

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十六年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九十三号



日川協加盟

No. 923

四月号

川柳塔創刊八十周年記念

合同句集 『川柳塔』

「川柳塔」は、大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、平成十六年で八十周年を迎えます。これを記念して、同人・誌友を中心とする合同句集『川柳塔』を発刊いたします。合同句集は昭和四十九年以来、十年毎の刊行で平成六年の誌寿古希記念につづく第四集となります。同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎いたします。一人でも多くの御申込みを心からお願い申し上げます。

- ★刊行 七月七日 ★締切 四月二十日（火）
- ★体裁 B6判・約五百ページ・上製本
- ★参加費 五千円（句集一冊呈）
- ★掲載句 一人十五句（自選）
- ★申込 所定用紙に掲載句（平成六年以降の発表句または未発表句）を記入し、参加費を添えて川柳塔社事務所へ。なお、参加費は同封の払込用紙でお願いします。

〒545-0005

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第二ビル二〇二号室

川柳塔社

電話 〇六―六六二九―六九一四

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

披講

河内天笑

「日本で二番目に披講の旨い田中好啓であります。一番は川柳塔の御大西尾葉さん……」これは元ふあうすと川柳社の重鎮、故田中好啓さんの自己紹介。

メンズファッションビルの本社句会へお見えになった折、席題の選者をお願いしましたところ快くお引き受けになった時の一節です。確かな選句眼は申すに及ばず、滔滔とリズムよく披講される様子はさすがに謡曲のお師匠さんだけあって、その「ひびき」具合が今も耳底に残っています。

それから何年かのち堺の句会にお見えになった折も例によって「日本で二番目に……」の自己紹介をされたあと、「ところで皆さん、天笑さんの句を何

句か間違わずに誦んじられますか」との問いに、一同「シーン」。「そして一句でも正確に言える人は」、これにも口ぐちでもじやもじやと言うてるだけで反応はなし。「あかんがな、あんたらの親分の句の二句や三句は正確におぼえといってください（下さい）」。

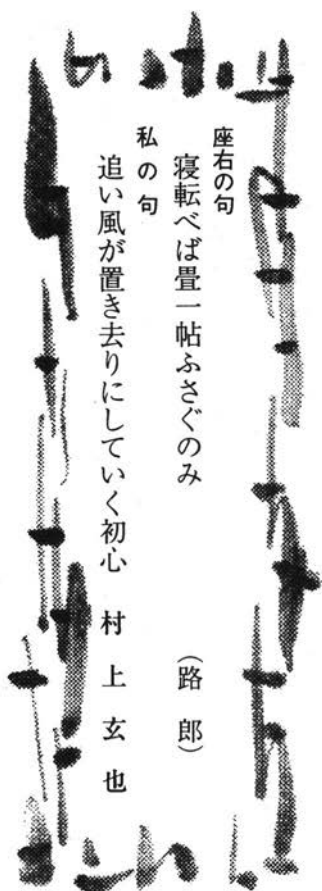
その夜の薫風、故後平岡先生を招いた拙宅での麻雀も、だんだん遠い懐かしいひとコマになって来ました。

好啓さんが本社句会にお越しになったのとは同じ頃、路郎忌の交換選者として来られた番傘川柳本社の保木寿さんの逸話。彼はひと通り選句をしたあと、赤鉛筆で句箋にいろいろしるしをつけています。あとで聞くと「作品を正確に伝えるための作業です」、とごく当たり前の様に言われ、これには驚かされました。「この様な超ベテラン選者にして披講に際してはこれほど気持ちを入れて居られる。見習わなアカン」。私はこれを肝に銘じ、それ以

後は常にこれを実行しています。

作者の作品に込められた思いを如何に正確に、そして効率よく会場の皆様にお伝え出来るかどうかは、選者の力量に掛かっています。選者にはそれだけの責任と覚悟が必要です。が、先述の様な披講を出来る選者はそうぐらには居られません。選者を指名されたら怯まずに勇気を出して堂々と挑戦して下さい。幸い、故西尾葉先生も薫風名誉主幹も素晴らしい披講のお手本を見せて下さいました。先達に一步でも近づけるよう私達には精進あるのみです。

披講のことばかり述べましたが、間髪を入れぬリズムよい呼名も句会ムードを盛り上げる大切な要素です。俯いたまま呼名したり、蚊の鳴く様な呼名は「謙虚」ではなく記名泣かせの「困った人」なのです。参加者全員が心を一つにして「ああ楽しかった」と言える句会が一回でも多くなることを、心から願っています。



座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路郎)

私の句

追い風が置き去りにしていく初心 村上玄也

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原王青

■巻頭言 披講

川柳よ有り難う

河内天笑……(1)
小西雄々……(2)

川柳塔(同人吟)

河内天笑選……(4)

自選集

……(52)

水煙抄

板尾岳人選……(57)

■句文集紹介『技師の一行詩』

木本朱夏……(78)

■句集紹介『五色豆』

田中正坊……(79)

麻生路郎物語(28)

東野大八……(80)

愛染帖

波多野五葉庵選……(83)

誹風柳多留二四篇研究 65

……(86)

茴香の花

藤田泰子選……(90)

川柳よ有り難う

小西雄々

昭和二十四年四月、勤務先の旧国鉄「後藤工場」に、文芸部が発足したので、十名が川柳と取り組むことになった。しかし、全員初心者で指導者がいないため、島根県で既に一家をなすある柳誌の同人に、毎月添削をしていただいた。

近年、川柳塔をはじめ全国的な各柳誌は、初心者に「添削教室」を設け、懇切丁寧に指導されている。私も現在、三ヶ所の公民館川柳の講師を担当し、添削にはそれこそ誠心誠意で行っているが、その先輩は○印と△印、そして×印に相当する句には「川柳に非ず」と、赤ペンで書いた簡単なものでした。

ある日、「川柳に非ず」の批評をいただいたが、どうしたら川柳になりますか、と質問したけど、納得する説明をして貰えなかった。市内の図書館に行っても、川柳に関する図書は皆無であったが、昭和三十一年八月書店で、麻生路郎の著書で「川柳とは何か―川柳の作り方と面白い方」の柳書を見つけ購入した。定価は二百五十円だった。

「空間」	河合茂雄選	(90)
一路集「看護」	楠 昭子選	(86)
「強引」	木村富美子選	(91)
初步教室「椅子」	三宅 保州	(92)
秀句鑑賞「同人吟」	中原比呂志	(94)
水煙抄	穴吹尚士	(96)
〈圖書紹介〉「川柳の群像」(東野大八著)		(97)
三月本社句会	竹治ちかし	(98)
尼れいじさんを悼む	太田扶美代	(102)
■エッセー ロボットの眼鏡		(104)
各地柳壇(佳句地十選/青枝鉄治)		(105)
柳界展望		(121)
四月各地句会案内		(122)
■編集後記	楓葉・義子	(124)

座右の句

灯台の神話夕陽を抱き寄せる

私の句

椅子拭いて一番好きな人招く

(緑之助)

伊藤 玲子

当時は助役試験を受けるため勉強していたが、寸暇を惜しんでこれを読み、川柳の作り方の主要部分は、暗記するほど熟読した。これによって作句意欲は倍加した。

「川柳雑誌」への投句は、昭和二十五年九月号(No二八一号)から、路郎師が四十年七月七日に他界され廃刊となり、四十年九月号(No四六〇号)が追悼号となり終止符を打ったが、約十五年間、「川柳雑誌」に連続して投句できた事は、路郎師を慕い、若さと健康にも恵まれ、また、勤務にも励んだ結果だと、今も懐かしく思いだしている。

そして、川柳塔社として直ちに再出発して今日に至り、今年は川柳雑誌創刊から八十年を迎えるので、合同句集「川柳塔」の発刊を七月に、また、川柳塔創刊八十周年記念川柳大会が、十月に開催されることを、慶びとしています。ただ、時の流れと共に、麻生路郎師と「川柳雑誌」を知る柳人が、僅かになってきたことは寂しい限りです。

さて、川柳塔創刊八十周年記念川柳大会の開催は、予想されていたので、健康管理に万全を期し、参加を希望していましたが、遂にその日が六ヶ月後に迫り家族とも話し合い、今から楽しみにしています。

「川柳より難う」の気持で一杯です。



河内天笑選

大阪市 西 出 楓 楽

うっかりと自分の尻尾踏んで転け
煩惱が揺れて自分が怖くなる

春の夢ちよつとエッチになるもよし

ジョークジョークと言うからきつと本心だ

お歳ですなあと自分に言い聞かす

冷え性のせいでお洒落が野暮になる

和歌山市 川 上 大 輪

希望の灯いえいえあれは非常灯

どう見ても私はただのオッサンだ

捕まえたゴキブリをさてどうしよう

公衆便所が一番混んでいようだ

人人人誰も私を見ていない

ため息一つ今日の空気を抜いておく

島根県 土 橋 はるお

階段が心配だから酒のまん

しあわせは奪えるものじゃありません

まん丸い月に心を奪われる

寝袋に寝てると野良犬がつつく

芋虫もわたしも行方暗まさぬ

若者に成るほどなあと言わせたる

堺市 志 田 千 代

満開の桜 アイスクリーム売り

夜桜や鳩はいずこで寝たのやら

さくらさくら とうとう離婚せずじまい

私を追い越していく白い杖

人違いされないように紅をひく

外出の時だけおしやれしています

鳥取市 徳 田 ひろこ

微くさいはなし土筆に笑われる

ピアノもう乙女の祈り弾ける春

化粧水ピチャピチャ今日の弾む音

団地で私を攻める草も春

化けるのに要る小道具が重くなり

世を拗ねたようにケイタイなど持たぬ

東大阪市 谷口 義

普通預金何が普通なんですか
選挙には行かず開票待っている
嘗められんようにベンツに乗っている
手を振りながら歩くわたしの人生だ
へそくりは持参金だと言っている
むつかしい鬼を一匹飼っている

高石市 浅野 房子

春遠し身内の鬼に責められる
十を聞きやつと分ったのはひとつ
一つ穴のむじなだったと今気付く
先延ばしした皺寄せがどつと来た
すぐ惚れてすぐ飽きるその繰り返し
スタンバイ出来たが誰も来てくれぬ

熊本市 永田 俊子

背伸びするとぐらつく私の脚立
鬼の面外すと淋しそうな背中
牛肉も鶏肉も不信心間も
負けても負けても走る馬の律義
おだやかな顔してゆずらぬものを持つ
子供の人さし指が恐い鬼

藤井寺市 太田 扶美代

お別れはスパツと大根切るように
反省は猿より下手と自認する
噂にもなるまいわたくしの挫折

遅れ癖まわりに誰もいなくなる

枕の下しずかに通過する月日

ゲートボールの音春になっている

寝屋川市 江口 度

大吉のみくじは声を出して読む

情性ではないすばらしい陽がのぼる

こぶしまた痛むやり場の無い怒り

沈丁花のように寒さに耐えている

キリンとも乾杯出来る象の鼻

世も末か変な病気が流行り出す

富山市 舟渡 杏花

ざれ唄が一つこぼれる愛去って

おぼろ夜の海に生れたことは秘す

カタカナに切られてばかりたそがれや

補聴器のとぎれとぎれの惚気かな

時おりの運で美味しいものたべる

不時着の男と揺れているわたし

檇原市 安土 理恵

憎まれ役ばかり回してくる世間

また一つ冬を越さねばならぬ業

潔く裸身をさらす冬木立

葱さげて無防備になる帰り道

意に添わぬ水にもときに乗ってみる

ブランドはわたし印で非売品

和歌山市 牛尾 緑 良

乾杯のグラスに続く過去未来

正論を背負うと肩が凝ってくる

お祝いの端に並んでからの縁

自己流を磨いて個性光らせる

タイガース夢のつづきを見ようかな

和歌山市 木本 朱 夏

ありがとう素直に言えて梅匂う

恋が一番美容液より効きそうだ

羅漢さんと睨めっこする逢いたくて

赤い月なにか良からぬ気配する

シフォンケーキのかるさでここの話

和歌山市 桜井 千 秀

悩みの奥にまだ詰まってる欲の皮

知ったかぶりの話もします時々は

欠点も個性じっくり見て欲しい

忍び寄る孤独に耐えて我を通し

作り笑顔で近所の普請褒めておく

和歌山市 細川 稚 代

初午の餅まき恋しと来る電話

シクラメン慰めくれる朝の膳

義理という絆を溶かす潤滑油

カメラアイうまいおしゃまな三歳児

たつぷりと時間があつて落着かず

和歌山市 古久保 和 子

カレンダーに赤丸つけてウフフフ

傘立てに借りたまんまも二三本

多数決サイズの合わぬ靴も履く

エンストを時々起こす膝頭

裸婦像の前で紳士が腕組んで

和歌山市 福本 英 子

真面目な磁石持っているから肩が凝る

砂時計心变りの無いように

負け犬と一緒に探すコンタクト

一分で負けて勝ち取る視聴率

吉野家を横目に食べる麦ご飯

和歌山市 青枝 鉄 治

票になる予算すんなり認められ

野次だけが群を抜いてる金バッジ

点滴に平均寿命延ばされる

目札の女へ妻の勘弁える

和を保つピエロの役を演じ切る

和歌山市 福井 桂 香

小春日のめだかダンスを始めたari

CO2食べて発熱する地球

デジタルの波に乗りきれない鴉

平成も昭和も平和には遠く

二十一世紀のことシリウスと話す

和歌山市 田 中 み ね

少年よ生きて俸せ掴むのよ(岸和田の事件)

かわいい娘と思えばやはり予約済み

カレーにおでん何でこんなに上手なん

噂をすれば影に背中を叩かれる

九死に一生そんなカルテが生きのびる(S・39年胸強打)

和歌山市 武 本 碧

微笑みが今日一日を膨ます

ちっぽけな幸を分け合う夫婦箸

埋み火を抱きどんぐりの群れにいる

立て板に水へ巻かれていく無口

酔うほどに饒舌になる腹の虫

和歌山市 上 地 登美代

世相斬るペンは温もり探してる

温かい助言を糧に立ち直る

雪降ると歌いたくなる雪こんこ

目がふたつあつて見落とすことばかり

猿と間違えられないように背を伸ばす

和歌山市 宮 本 三喜夫

華やかな弓引き初め京の春

鹿寄せに春恒例のラッパ吹く

鹿寄せに交響曲で餌をまく

この人がこんなに泣き言飲み過ぎね

きよしさん引退きめた流石です

和歌山市 松 尾 和 香

凜として達者に感謝寺参り

一人居の冴えた空気に深呼吸吸

冷水に浸す感傷わたし彩

突き放す壁にもなろう母の愛

神の国互いに競うテロ戦

海南市 三 宅 保 州

禁酒禁煙減塩無糖菓漬

企業戦士の墓標に見える棒グラフ

黴菌のように潜んでる誤植

こんな日に限って止まる腕時計

いつ幕が降りるかわからない舞台

海南市 堂 上 泰 女

忠告が嬉しく弾む毬となる

風評被害気をつけましょう冗舌家

樹医さんに学ぶ自然の美しさ

寒昂 女の夢は一途です

デジカメにキトラ古墳の神秘知る

和歌山県 中 後 清 史

瞑想のまぶたに浮かぶ地獄絵図

友好は銃で築けるものでなし

体制が気に食わないという驕り

赤紙を手にした時はもう遅い

森を出る子の洋服を誂える

鳥取市 加藤 茶人

妻の氣に入るように皆嫉され
銃を手にしない倅せ囁み締める
喉元を過ぎ憲法の良さを忘れ
初詣でしたはずなのに計が届き
子が職を決めた安堵の膳囲む

鳥取市 春木 圭一郎

好きなことやって賛辞に包まれる
愛あればいつも笑顔で乗り切れる
さりげなく自分らしさを出せたのか
プロセスを楽しみ今に没頭す
失敗に学び二度目は手を抜かぬ

鳥取市 美田 旋風

くたびれた社員夢みる暇がない
霊柩車僕が乗るには派手すぎる
度忘れも似て来て夫婦仲がよい
止まり木の相手が逝ってひとり酒
引き際に天狗の鼻が駄々こねる

鳥取市 田中 童子

保証期限切れた頃から愚図りだす
頼み事言い出せぬ間に頼まれる
そっくりと言われたくない子の本音
来ないかも知れないけれど雪を掻く
没ばかり二次会で顔売っておく

鳥取市 宮脇 道子

寒の入り義歯を外して炬燵虫
深い疵癒してもまた夢に出る
忘れたい過去首振りながら付いてくる
友達は半分ぐらい信じられ
踏ん張って二人で地獄通り抜け

鳥取市 岸本 孝子

猿に似た反省ばかりして生きる
トラファン胸の高鳴るキャンプイン
どちらでもいい二人目にまた男子
耳打ちを大きな声で念押され
老母とする内緒ばなしがはかどらぬ

鳥取市 岸本 宏章

胸に棲む鬼がいちばん手に負えぬ
鏡には笑顔を見せたことがない
お互いが空気のようにいて夫婦
世話焼きが勝手に恩を売りに来る
預貯金と余命数えて寝付かれず

鳥取市 西村 黙光

占いの通りに財布見失い
すぐりたい気持六法読んでみる
錆ついたハートきらきらさせる詩
無為無策やがて痴呆の餌になる
古疵がタイムトンネルくぐらせる

鳥取市 山宮愛恵

鳥取市 福田登美

ざわめきの一瞬わたくしに戻る
誰も死ぬ後か先かとつらにくさ
人間に背かれ人に助けられ

べつていさんにされてほへえむはかなし
ひらかなが好きくねくねと十七字

鳥取市 倉益一瑠

呼び声で夫の天気わかります

けもの道ちよつと覗いてみたくなり

気が付けばルーズに老いているわたし

ゼロの位置右にも左にも行ける

義理人情担ぎ息切れしています

鳥取市 近藤佳子

気にしてるところに触れてくださるな

征く日まで少女の友を買ってくれ

染みの数ほどには惚けておりません

自分だけここから消えてしまう死よ

生きているあいだは払う消費税

鳥取市 夏目一粹

立春は三月頃がよく似合う

経歴の上を転がる天下り

物忘れして順調に老けている

これも毒あれも毒では付き合えぬ

職退いてすぐ昼が来る夜が来る

留守にした郵便受けが混んでいる

病む夫が待つ病院へ走り込む

あれこれと一人芝居で黄昏れる

花活けて少し華やぐ留守の家

賞味期限切れても火種抱いている

鳥取市 永原昌鼓

正直な人だすぐ泣きすぐ笑う

鼻薬ずるい奴らの常備薬

頑張った証の皺だ勲章だ

偽札に賽銭箱も目を回す

学んでも学び足りない辞書を繰る

鳥取市 有沢せつ子

朝ごはん家族揃って食べてます

給食とダブった晩のハンバーグ

冬晴れに干し物がなくやしさよ

コマーシャル頻度が欲を萎ませる

音痴です風呂の広さで歌うたう

鳥取市 録沢風花

腰痛に暫し冬眠して暮らす

尤もらしい顔して猫が返事する

三猿になると脳波が乱れだす

泣きなさい笑いなさいと生きていく

低迷を抜ける今年の風を待つ

鳥取市 中村金祥

禁煙ヘタバコ貯金がよく貯まる
欲望の栓はしつかり閉めておく
心のシステム節目節目に変えていく
スイッチをうまく切替え生き延びる
無職だと言えず毎朝家を出る

鳥取市 植田一京

二世代の合併妻と揉めている
ゼロからの出発でした若かった
ゼロ歳児未来はあなた達のもの
猿真似を重ね大人になりました
動物園で猿に観察されている

倉吉市 松本よしえ

スマートで優雅風力発電機
忘れてもいいよ母さん歳だもの
温泉ヘグループで行くおばあさん
愛らしく少し哀しい猿の芸
三猿を守り神経性胃炎

倉吉市 野口節子

日没になるとふらふら足が向く
姉さんの方が綺麗でまだ独り
母代りの姉にあげたい殊勲賞
一度で好い溺れてみたい青い海
幸せのシッペ返しが恐ろしい

倉吉市 最上和枝

侮った微熱へしつぺ返し食う
器量よい姉より先に嫁に行く
やわらかな丸い言葉に棘がある
惚けたふりして甘い汁吸うつもり
わたくしと貴男にかける虹の橋

倉吉市 淡路ゆり子

無理をして八十粒の豆食べる
可愛いと言わればあちゃん舞い上る
歩道橋怖い日もある雪積る
向き合って惚けた二人の積る話
可愛さは三歳までの孫のこと

倉吉市 山本玲子

初夢は食べ放題のまつば蟹
顔中マスク取れば歯科医は超美男
慣例を出せば年だと決めつける
も一人のわたしが下手な嘘を言う
散歩が日課とはあまりにも婆婆くさい

倉吉市 猪川由美子

嫌いになれば同じ空気を吸うもイヤ
胸大っきい話題ばかりのテレビ消す
敵味方損得のみで生きる人
難題は食べて寝てから考える
コウノトリ御所への道を忘れたか

倉吉市 森 川 あらた

米子市 中 井 ゆ き

仮面を使い分けて他人の目をそらす
友達になると握手をしたくなる
愛学ぶための痛みに耐えている
海外に出ると寿命が縮みそう
山頂に行けば神様会えるかな

倉吉市 米 田 幸 子

米子市 本 吉 宗 光

可哀相 金の奴隷になり果てる
札束の効き目は直ぐに見え始め
私もついに悪女の仲間入り
猿だって耳もきこえる目も見える
蟹股でやつとよたよた歩いてる

倉吉市 牧 野 芳 光

米子市 白 根 ふ み

辛せを掴む形で双葉でる
磨りガラス透かしてこの世温かい
説教の本音が酒に溶けて出る
訛りにも寒さにも慣れ母になる
春の音土竜の穴を洩れてくる

米子市 木 村 富美子

米子市 林 瑞 枝

代々のしがらみ背負う鬼瓦
占いで一喜一憂する軽さ
ライバルの頭の中がのぞきたい
難病の娘を産んだのはわたし
空っぽにすると邪念がおどり込む

いいことも山ほどあつて生きて来た
地のぬくみ泥付き野菜からもう
たたいてもやっぱり無口ダルマさん
しばらくは馬鹿なお面で生きてみる
たのもしくなつた孫からお年玉

日米同盟国民よりも大事です
顔にしないけど超えた八十歳
イチャモンをなぜか私にある婦人
ほけたなあ今日は何日何曜日
声だけはまだおとろえぬ唄がある

寒まいる長靴すべり生還す
雪しんしん不安に変わる今しがた
立春に体内時計ピコピコす
アピールのしすぎでないか大いちご
煮くずれをしまいとこつた煮の中で

手術成功 医師は神よと拝まれる
五行だけの言葉の光る葉書読む
駆け抜ける噂も塀に来て止まる
春よ春いつも微笑みある小径
老いるほどお洒落にお金かけている

米子市 政岡 日枝子

困いを取って群の仲間を迎えよう

一族が散つてく点になる母家

群を出る時の挨拶考へる

少しずつ群の水位がさがりだす

残されぬように毎朝みるチラシ

米子市 青戸 田鶴

ナサ快拳火星をコタツから眺め

明日を読むなど大それた事を言う

泥舟と知つてもおきる事出来ぬ

砂嵐無事に帰国を祈るだけ

冬日和楽しんで来た短い日

鳥取県 小谷 孝美

趣味合わす背のびにアップアップする

後くされない別れなどあるものか

初デート一日妻の座を忘れ

明日会う予定風邪など寄せつけぬ

古い歌聴いて青春なつかしむ

鳥取県 上田 俊路

もみじ付け若葉マークに道譲る

慎重なもみじマークで初詣で

ベットまでブランドマーク着て散歩

右傾化の厳しい道を行く日本

陰しさに屈してならぬ拉致家族

鳥取県 新家 完司

年始からずっと休まず飲んでいる

晩酌のため胃袋を空っぽに

焼酎に慣れて清酒がかつたるい

酒を飲む時だけゆるむこわい顔

酒のない国へ行ったら酒造る

鳥取県 土橋 睦子

春遠く余寒が続く無言劇

傷口は誰にも見せず紅を刷く

トンネルの出口にうまい鯛焼屋

阿鼻叫喚テレビニュースを見るつらさ

今日の空信じてそばの種を蒔く

鳥取県 岩崎 みさ江

初咲きの蠟梅を切る母の忌に

回る忌に日頃の疎遠温め合う

母の味凍み大根に凍み豆腐

欲しいもの霞んだ脳の曇り止め

一年の答をくれる蘭の花

鳥取県 佐伯 やえ

自衛隊派遣忘れた傷をえぐり出す

孫から電話キリシマの芽がふくらんだ

どうでもいいことには口も手も出さぬ

並以下の乳房ガン検受けておく

仏間にあかり母に聞きたいことがある

鳥取県 林 露 杖

薄氷を跨ぎ損ねた老いの靴
磨り減ったテトラポットに寒の涛
水仙郷咲いて紀淡の海に向き（淡路島）
それなりに嫉妬もあるや猫の恋
賞味期限傲る女につけてやろ

鳥取県 近 藤 春 恵

変化球無口な父が投げてくる
おしゃべりが無口になって乱おこす
反抗期無口になった日がこわい
長生きに悶えながらも虹を追う
カード依存症口座が底をついている

鳥取県 深 田 俱 久

天空のオリオン イラク凝視せよ
身中の虫押え込む師のことは
品のないシーンで高めた視聴率
究極の笑顔ともみ手武器に持ち
如月の空にトンビの舞う日和

鳥取県 吉 田 孔 美 子

春の欲手から足から萌えて来る
春の陽に晒そう冬の蟠り
妖艶な炉に近づいて灰になる
ダメージをさらり女の歳不詳
係わりは断って鬼さんくらそう

鳥取県 山 下 節 子

人間を避けてベットと暮して居る
餅はどんな木になると園児さく
天からのメッセージです雪が降る
確立がゼロでないからくじを買う
合併の賛否近所の和がくずれ

鳥取県 西 原 艶 子

泥臭い暮しに慣れて掌も荒れる
干からびた愛は無口のまま続く
感動の虜になっている無口
唇を真一文字に閉じている
続編は泥にまみれた足で舞う

鳥取県 山 本 正 光

煙幕で鳥のウイルス防がねば
核持てばキタのカポネと思うらし
老嬢と二時間もいた喫茶店
荷物より重たい頼み負わされる
嘘言えぬことでたびたび損をする

鳥取県 國 森 武 子

進歩する世を見るだけでも満足だ
世の中の表も裏も興味あり
私は死にたいなんて思わない
ひたすらに無病そくさいのります
日が沈む明日は明日で生きてゆく

鳥取県 前坂 なお美

一宿の御恩まだまだ返せない
ワインより熱燗がいい父ゆずり
冷凍のさぬきうどんを買い占める
おとなりがやつと静かになりました
わたくしの好きなお方は熱血漢

鳥取県 村上 信子

赤ちようちん心なごますように揺れ
飼猫を納得させて旅に出る
チョコレート貰い菩薩の笑み浮かべ
独りでも勝手気ままに生さられず
百姓の子です一番米が好き

鳥取県 谷口 次男

嘘ついた針千本を大臣に
鉛筆の芯がちびると寒くなる
絶筆の母のハガキが胸を打つ
凍てついてペンギン歩き人の群
停電にネコ踏んじやって大騒ぎ

鳥取県 埴 寛子

予定表埋めつくされている幸よ
椅子がけでテレビ体操しています
ふくらんだ蕾に哀れ知らぬ雪
雪止んださあオサンボだ赤い長靴
モーイイカイ消える術なしマーダダヨ

鳥取県 蔵本 悦子

昨日より少し大きく今日を生き
核ゼロと北よ学ぶが良いだろう
便利な世 学ぶ力が消えてゆく
人間のずるさに神が怒るとる
人間にずるさもなけりや味が無い

鳥取県 澤 裕子

野も山もいそいそ春の化粧する
蟹づくし食べて口もと締まらない
民謡と地酒が旅情かきたてる
初めてのおつかい親も子も試練
猿まねをする愚かさに気がつかぬ

鳥取県 石谷 美恵子

日本海パノラマにした砂丘の湯
会釈してほほ笑み合って出ぬ名前
お陽さまよ雪よ雨よと得手勝手
つぎつぎに薬を替えて試される
受話器から風邪をうつされそうな咳

鳥取県 奥田 保子

美しい日本のことば何処へ行く
天と地の恵み貰って生かされる
医療ミス謝罪の言葉聞き飽きた
ウインドーに映る自分にギョッとする
怖い世に護身の笛を持ち歩く

鳥取県 奥谷彩子

蠟梅を手折り指頭に春を摘む
春の陽に浮かれ華やぐ服を着る
母さんの笑顔かなめに朝動く
毛糸玉巻く無口な夫の手を借りて
いい人生幕降ろすのはもっと先

松江市 安食友子

神さまもその場のがれをあきれてる
朧月はない美女を漂わす
憂さ晴らし場末でしてる弾き語り
青空に乙女心も散らばって
エンゼルも見て見ぬ振りをする濡れ場

松江市 松本知恵子

暖房を抜け出して飲む寒の水
詰めこんで飼うニワトリのツケが来る
やりくりの家計も楽し新所帯
海荒れて行商女まだ来ない
行商に春乗せてきた新わかめ

松江市 銭山昌枝

父の生き方おさらいをする同じ歳
ワクワクと順路を回る美術館
大観の凄さ余韻に酔い痴れる
雑踏で過去と未来がすれ違う
皺取りと美白になれる化粧する

松江市 津川紫晃

人間を習った猿が瘦せてゆく
この道は自転車だけが知っている
雑炊を吹いて見合わす顔がある
無意識に妻と指切りしてしまい
洋皿で笑いこころげる冬トマト

松江市 三島淞丘

愚者なりに今日一日を演じきる
カーブミラー退屈そうな過疎の路
潰れない内に肩の荷軽くする
ローカル線青息吐息ひた走る
蜂の巣をつついたような下校時

松江市 佐野木みえ

つらら達の春の囁き聞こえます
時計台あの頃は未だ修理中
窓の雪解けて明日は旅立つ日
占いを信じ至福の春となる
雪かぶる沈丁花から活貰う

松江市 川本 畔

一族の秘密が動く如月
秘めごとを聞いていました靴の紐
冬の海怒りのかけらなどみせて
片々と落とした肩を濡らす雪
支え合う人という字のたおやかさ

出雲市 吉岡 きみえ

言い訳は止そうポケット寒いから
いざこざは骨がぼきぼき鳴るうちに
荒れ狂う日本海男の血を洗う
百歳を保証してくれた内視鏡
アカンベエーしながら逃げた鬼もいる

出雲市 城 多喜

病む部屋にわたしの匂いする埃
八十歳未だ夢の中浮遊する
幸せが来ると貰った唐がらし
エプロンを着けると主婦の顔になる
気働きわたしに欠けたものがある

出雲市 多久和 敬子

一日をゆつくりたたむ仕舞風呂
重ね着を脱いで初音を待っている
ウグイスの初音こたつで待つ二人
花壇からそつと聞こえる春の音
こだわりを捨ててポケット軽くなる

出雲市 岸 桂子

舞い終えた揚羽は浅く地に還る
生きているうちはコントを続けよう
延命は不要と書いてあった遺書
正直に言えば誰かに傷がつく
ゴマを煎る線香花火の音に似て

出雲市 伊藤 玲子

よかったねやつと味わう三分粥
ドクターの診断を待つ雲の中
ハチャメチャな音も偶には快い
ペン牝臍も愛しい夫の中指よ
墓道でようお参りと落の臺

出雲市 青山 久子

月蒼くイラクの闇が近くなる
お先とも言わず花野にいった姉
みぞれ降るひとりぼっちのキムチ鍋
一日の予定財布にきいてみる
針山で針が大きな欠伸する

出雲市 小玉 満江

結び目を少しゆるめて酒の席
おみやげは白菜大根重たいな
ストレスを溜めては解かず舞い扇
北風へ春をみつけた落のとう
芋がゆを炊いて昔を偲ぶ朝

出雲市 小白金 房子

爛徳利 話上手な堀こたつ
追加したお酒が過去を喋り出す
洗濯の渦に溶け行く農の汗
薬屋根の頃はよかった子の育ち
悪友の情けと生きる老いの詩

出雲市 石 倉 美佐子

急がねば明日が織れない雪女
風媒花ほろほろと夢を見る
先つちよが折れて三日月雲の中
うつの日は長い物にも巻かれよう
もう少したつぷり欲しい私のスペース

出雲市 園 山 多賀子

両の掌に自我を握って翔んでいる
鉛筆が冗舌になる春うらら
ロボットが金属疲労溜めている
吃水線辺りで私揺れている
存在感誇示しています希少価値

出雲市 佐 藤 治 代

オアシスに出会ったように出る晴れ間
雨のち晴れ何となく炊く豆ごはん
主に似たインクの出ないボールペン
七十二歳自分に負けた日の厄日
友達に助けってもらう事ばかり

出雲市 富 田 蘭 水

福は内二度ない喜寿と力こめ
ざつくばらん笑顔ですてずたく生き
ストレスをためた手毬が高く跳ぶ
水仙が私を癒やす寒修行
器量よりぬくい言葉に決意する

島根県 伊 藤 寿 美

帰省子が亡夫の伴天羽織る新春
入院前の酒がそのまま棚にある
わたくしを晒せば哀しみだけ残る
いのちの重さイラク派兵もホスピスも
黄色いハンカチ振る平成の銃後かな

島根県 榊 原 秀 子

日向ぼっこなどと倅せすぎる時
いい加減ふんふんとときく噂
ラッピング心躍らす贈りもの
五色豆 京のみやげのなつかしさ
歩道橋ゆつくり渡るのは私

島根県 森 茂 美

先ずやってみることにする思いつき
そのうちに直る機嫌と読まれてる
露天風呂入るお猿が顔を染め
鬼ごっこした娘が曾孫連れている
冬眠の柳も芽吹く自然界

島根県 多々納 テル子

物干しが明るくなつたお正月
のしかけてきれいな地球子におくる
七十路でやつと生命を燃やしてる
耐えながら新芽を吹いている枯木
でこはこの道ひたすらに亀の意地

島根県 持田 多輝子

おたがいに挨拶目とする美容院

逆境で人の心の裏が見え

母のひざ悩みをいやす防波堤

本心を言えば火の粉がふりかかる

悲しみをかくす笑顔のテクニク

倉敷市 小野 克枝

定年のふんざり靴を履きかえる

根回しの労は字幕に映らない

安心を貰い眠りにつくワイン

勝つよりもきれいに負けた心地良さ

治まらぬ微熱の中に湧く慕情

倉敷市 井上 富子

ロングメールで玉虫色の謎をかけ

星の降る浜辺でデートする蛭

心の被爆毒舌からの放射能

豪快にワインが燃えるフライパン

蟬という美名いじめの鞭が鳴る

岡山県 大石 あすなろ

バーゲンでオーバーヒートした財布

妻という綱に終生つながれる

陽光にカウントダウン待つ蕾

海老で鯛老母は笑って釣られます

木立から葉にもらう葉がひとつ

岡山県 山本 玉恵

休ませておこうもひとつの仮面

バランスを狂わせて来る腰の骨

艷種のまん中にいて呆け上手

ふんわりと咲いて宇宙と向き合えり

三途の川で金が必要なら引き返す

岡山県 国 米 きくゑ

旧友と再会嬉し黄泉の国(天彦く 3句)

安らかな寝顔で妻を慰める

オイ母さん夫の呼び声耳に生き

悲喜交々巣立つ子送る春の駅

人生の隙間を埋める一行詩

岡山県 小林 妻子

春ですね父も田のこと畑のこと

米づくり冷夏がまたも気がかりな

歯がゆいが何時も泥縄式政治

補聴器に一番響くとがり声

帰らんでいい旅だつて遠からず

岡山県 富坂 志重

仏壇の母に断りつまみ食い

借金も無いが金も無い九十路

降りかかる火の粉のような嫁の愚痴

よっこらしよ何しに立つたのか忘れ

浅学の哀しみ辞書とともに住み

広島市 森田 文

大寒波 寒さが痛いことを知る
猫も兎も我のふとんにもぐり込む
戦争を語りむなしさだけ残る
人生とや俗世は離れ難きもの
長寿社会の中のひとりとなりて生く

竹原市 森井 菁 居

その中に生涯の友きつと居る
脇役に徹し長生きしてしまう
ごまかして来た問題のツケどさり
生き方を変えたと見えて来た出口
芸が身を助けて恙無い日なり

竹原市 時 広 一 路

約束を数字で書いた時刻表
同じ家住んで時計の仲違い
ブランコが揺れる小さな物思い
ハイハイと回り続ける風車
有難くさせる読経の節回し

竹原市 正 畑 半 寛

ウィーンフィル演奏を聴く初春豊か
大樹にも子供のころがあつたろう
人の世にいらぬもののない命
人間は自然になにを返せるか
小魚の目は海の色南無阿弥陀

竹原市 岩 本 笑 子

ほつと言ギブスの重さなど言わず
人間がいるから狭くなる地球
年輪の堅さ強さよ父の背よ
口開けて雪待つ瀬戸のたそがれに
そろり猫梅の木登ってはみたが

竹原市 石 原 淑 子

荒っぱい子の思いやり受けとめる
膨らむよぼつぼつと木瓜の夢
枯草の下から萌える希望の芽
カタカナが脳を素通りして困り
桜さくら想いのたけを花吹雪

竹原市 小 島 蘭 幸

走って走って走って魂を磨く
おだやかな握手よむらさきの火花よ
赤鬼青鬼 老人大学は賑やか
てのひらの薬と走らねばならぬ
みんなやさしくて淋しくなってくる

広島県 藤 解 静 風

面舵いっぱい小泉さんは無邪気かも
サマワ視てイラク見てないのは困る
無党派のボクの眼鏡がくもりだし
病院のベッドが妻と近くする
ときどきは自分のために窓を拭く

美祿市 安平次 弘道

脇役にしては言い訳多すぎる
頑固者大風呂敷がたためない
砂をかむ思いにひたる今日のうつ
午前二時オモチャのマーチ始まるよ
膨らんだ胸父さんは嫌いです

宇部市 平田 実男

道草を食った男の人間味
田や山を売り実印を悲しませ
ソロバンを弾き損ねたイラク戦
氷山の一角が出る医療ミス
女性見る時は米寿も男の目

熊本県 岩切 康子

褒められて向上心が踊り出す
やがて着く知らせに鍋の火を入れる
ふらふらと酔ったふりする甘えん坊
結果待ち車の中で日向ぼこ
牛に鶏 次は何物ヒト攻むる

唐津市 久保 正剣

金持に無駄なお辞儀をしてしまふ
デートの日ドレス替え合う三姉妹
ゴミ捨て場公德心も捨ててある
気休めに民の声訊く目安箱
相性はびつたりわたしと影法師

唐津市 市丸 晴翠

おめでとう待たれた手術後のおなら
バブルには遇えず負担は強いられる
目減りする脳細胞へ応援歌
近付くとみせて遠のく福の神
婦省子におふくろの味てんこもり

唐津市 樋口 輝夫

脱げかけたベビーパンツが逃げ回り
カラオケが軍歌になって座が白け
値切られる前に正札高くなり
土を割り胸ふくらます露のとう
不気味だと言うて呑み込むおどり食い

唐津市 山口 高明

応戦のいとま与えぬ自爆テロ
割腹の歴史もあつた皇居前
春風のように闊歩のパリジェンヌ
神様にもらうお札も上中下
宿敵も試合終れば握手する

唐津市 井上 勝視

曾孫見て柿を植えている傘寿
不況でも敗戦時より楽である
カネはなし少子高齢夢もなし
逆らわぬ老妻に結局牛耳られ
つきあいの悪いあいつは貯めている

東かがわ市 原 賢

生命ある限り明日の絵を描こう

残照に誇れる夢を一つ追う

正論で向かえばつむじ曲げる風

結局は老いても妻の手を借りる

握手した時から負けたなと思う

東かがわ市 清 川 玲 子

残り火を一気に炎やす方に会う

健康食のどれかに元氣貰つて

どれ着ても似合う自惚れ試着室

もう一人の自分見つける試着室

新しい家族エサ皿用意する

東かがわ市 瀧 井 勝

見本市時代の風を見て歩く

好奇心元氣で足が草臥れる

春間近 夢捻らせる土起こす

運動と無駄な動きも苦にはせず

苦勞した甲斐があつたか子が優し

東かがわ市 伊 勢 八重子

目に見えぬ愛を引き裂く北の壁

長い夜マグマを抱いて朝を待つ

愛してるの一言一生しばらく

診断は朝の鏡がしてくれる

長い道光と影をくり返し

東かがわ市 川 崎 ひかり

空港へ置いてきました旅の恥

検尿のコップささげる目の高さ

夫婦しておんなじように風邪を引く

タンポポに今年初めて会うてきた

MRI自分の脳を見るフシギ

東かがわ市 池 内 かおり

押し売りを呆けた振りして追い返す

一対一 声掛けられぬ他人の子

全身が映る鏡にギョツとする

批准とは補填とは辞書を引く

素直な子きつと明るい母ちゃんだ

東かがわ市 神 保 坊太郎

釜揚げの湯気のむこうに通の顔

ご先祖の嫌な椿のコロリ落ち

祝祭日に国旗を見ない変な国

二枚舌使う四月のウストラ寒

あの世でも要らぬ奴だと呼びに来ぬ

松山市 宮 尾 みのり

常識の域を守って淘汰され

競うこと止めると捻子がゆるみ出す

係長止まりの首を洗わされ

雛飾る老いても女です私

ぶっかけへせてたつぷりきざみ葱

松山市 高橋 宏臣

言ひ訳の包帯派手に巻いている

脇役の男の背にも春の風

想い出を辿るひとりの路線バス

三位一体 年金と妻と僕

知り尽くす妻の前では力めない

松山市 古手川 光

昼ちらちら夜しんしんと雪が降る

ロボットに頂くような年賀状

さらさらと弾ける水も春の音

春が好き皆生き生きとすくすくと

コイにトリ ヒトがやられる序章かも

愛媛県 中居 善信

間の抜けたところがとってもいい女

僕の来た道を誰にも言っていない

切り札は何にも持っていない野良者

ああ四月春の野菜の種を選ぶ

鉄砲も刀も持たず鋤を振る

高知県 赤川 菊野

余生図はこんなはずではなかったに

生きるため時には尻尾ふつてみる

愛を盛る皿はあくまで真白に

イラク派遣哀しい記憶呼びもどし

まだ欲があるから今日も米を研ぐ

高知県 小川 てるみ

日溜りへ蓮華タンポポ土佐は春

義理という四角四面ののし袋

完璧を目指し臆病風が吹く

カルシウム不足心がすぐ切れる

カチャカチャのチャネル権がなつかしい

砂川市 大橋 政良

平凡な一日だった夕焼ける

くたびれた命が映る水たまり

駅裏のめし屋自慢のてんこ盛り

世話人の体のこなし目のうごき

断りの文句あれこれ決らない

黒石市 相馬 一花

なで肩で姑を背負う力瘤

通販の三味になじまぬよされ節

人間に近い猿にもない笑顔

乾杯は上戸も下戸も右に持つ

義理チョコを老妻に隠して食う米寿

十和田市 阿部 進

妻逝きて何時の間にやら三回忌

口ほどに身体動かずもどかしい

墓掃除妻の背流すつもりです

居酒屋で老いた頭脳に油さし

面倒見よすぎて誤解されている

弘前市 今 愁 女

雪国育ち雪に泣いて怪我もする
オレオレのあと ごめんなさいという新手
あなどって治りの遅い春の風邪
すすまぬ食にいちご一パック平らげる
ひたいに掌当てくれし母遙かなり

弘前市 相 馬 銀 波

球春の音が紙面に詰めてあり
絵手紙も墨絵で寒い春の風
虚しさが募り夕陽に背を向ける
スランプに押し流されて筆が折れ
運命のいたずらだらう残り福

弘前市 高 瀬 霜 石

焼き芋を三本貰う仲直り
ハンカチを忘れた時に出る涙
自動ドアその先にある蟻地獄
聴くこともないレコードを捨て切れぬ
ケータイも借金もない軽い靴

弘前市 高 橋 岳 水

折ることばかりで老母の丸い背な
糊代の広い夫婦にあるゆとり
老人を金蔓にする介護法
人生の縮図が浮いている港
未知数の毬が転がり出す四月

弘前市 須 郷 井 蛙

母の打つ太鼓で朝が動き出す
心配をするから病名言わずおく
教育費ビタリ止って家計黒
太陽を知らずに死んだ深海魚
見合いすら来ない農継ぐ男達

弘前市 福 士 慕 情

雪解けてまだ眠そうな花時計
豊かさに慣れて人間見失う
話すたび腕が広がる釣り自慢
横柄に道を聞くから知らんと言ふ
日本一富士より故郷の岩木山

弘前市 一 戸 ツ ネ

四月馬鹿 貴男がくれた指輪です
生前葬チビリチビリとひとり酒
オリンピック俺もでるぞと孫悟空
百態の友がおります地蔵さま
能力の開拓します電子辞書

弘前市 櫻 庭 順 風

古書買ってにこにこ顔の生活費
にこにこ顔を食卓にする妻の知恵
地理教授旅費捻出に四苦八苦
海外視察三十回の莫迦でよし
病床で海外視察わめきたて

八王子市 播本 充子

真剣になればなるほど尖る口
バッテラの語源を知って食べ過ぎる
枯れ方の見事に拍手してしまふ
みんなが困つてゐるバアサンの気炎
面倒を楽しむつもり幹事役

東京都 清原 悦子

コトコトと鍋から幸が吹きこぼれ
迷惑をかけないための貯金する
片想い自作自演で締めくくる
勉強をしたい時にはもう白髪
スイッチを切り替え明日を考へる

東京都 後藤 早智

平和への貢献見せる日章旗
憲法が揺れ日の丸も身構へる
壊れ物のように初孫そつと抱き
春の花春の兆しに買う至福
節分会帽子で受けた豆を食べ

東京都 岸 野あやめ

福耳が拒むダイヤのイヤリング
つき通す小さい嘘にも要る覚悟
若い僧よそ見しながらお経上げ
そつとすえ京の言葉につい油断
ひとり寝の夢が恐い夜楽しい夜

横浜市 菊地 政勝

貯古齡糖もらつた祖父の笑い皺
勝ち独楽も疲れごろりと横になる
芳香が静かに育つ梅の鉢
習性は直らぬいつも裏を読み
春闘の氣勢拳がらぬ不況風

横浜市 小野 句多留

地図なんかない天国へ旅遍路
オレオレの詐欺が意外に近い距離
男とか女とかいう時は去り
飲めません言つてグラスを持ち替へる
老妻は餅を小さく切つて盛り

さいたま市 八田 敏

待ちかねて花買い並べ春を呼ぶ
イラク派遣わが出征の遠き日よ
今はただ隊員の無事祈る日々
明日はどの医者か手帳の予約繰る
これ俺か疑うスナップ老いの顔

佐倉市 岡井 やすお

少子化でも入学試験楽じゃない
新社員息抜きの手も伝授され
実社会風は強いと子の便り
年金が貰えるまでは置いて欲し
アリコにも見放されたか九十二

富山市 島

ひかる

亀岡市 井上 森 生

黒ユリが待ちこがれてる春の風
どの花に止まろう蝶になってみる
香りだけ残して散った春の花
悲しさをたつぷり聞いたベットの死
ひらめきが欲しくて亡父に手を合わす

静岡県 蘭 田 獏 杏

発言が過ぎて責任被る羽目
宅急便優しい母の顔偲ぶ
甘党の父の墓前に包み開け
正月も祭も妻の看護する
風の夜に天と湖底に同じ月

愛知県 早 川 盛 夫

お寿司をご馳走して許して貰う
人悲し表の顔と裏の顔
君が思うほどわたしは馬鹿じゃない
川柳も医者薬も手放せぬ
成るようになるさ日が照り日が沈む

京都市 都 倉 求 芽

合唱に高音がなし反戦歌
大器晩成それなら僕はまだ若い
山の芋とろとろ元氣すべり込む
ATMのボタンに余命つないでる
天気予報 最高気温だけ見てる

余生とは言わぬ生き生き輝こう
手を振って白寿の母におめでと
幼稚園小中高の孫受験
夜明け前じじに合図はハムスター
閃いた青色発光二百億 (中村修二教授)

京都府 丹後屋 肇

インフルエンザ退散させる寒稽古
般若心経帰命頂礼坐禅堂
キャッチボール決める万葉相聞歌
ヘルパーにときめく介護5のベッド
恩讐を越えて居並ぶ苔の墓

大阪府 中 澤 伽 羅

世の流れ鬼も可愛くなりました
伸びた足広げ優先席塞ぐ
何も彼も忘れてしまう青い空
デュエットに音程狂うほどのほせ
猿も人も同じ顔して湯につかる

大阪市 榎 本 日の出

春の陽にもう隠せない皺がある
今日どこへ行くんやったか立ち止まり
オアシスに居てオアシスに気付かない
よく遊ぶ父見て嫁にまだ行かず
傷ついて人に優しくなつてゆき

大阪市 津 守 なぎさ

現代の常識を子に諭される
親睦会音痴の唄で盛り上がり
飲酒運転で人生棒に振り
志望校めざして塾を梯子する
はやすぎるブランド志向中学生

大阪市 津 守 柳 伸

熱い物熱く食べさすおもてなし
好物をすっかり食べている至福
念押して自分自身に言い聞かす
節分にイワシが届くおつき合い
最高の笑顔化粧に勝るもの

大阪市 榎 本 舞 夢

つくばいの青竹冴えて茶席入り
鬼の面はずして譲る社長の座
年齢を気にして服は買えませぬ
まだ生きるつもりで畳張り替える
湯の花で温泉気分仕舞風呂

大阪市 津 村 志 華 子

へそくりはたと持ってる振りしとく
抜け目ない娘あれこれ持ち帰り
医者いらず心の傷にも効くやろか
鳥たちのシンフォニーです春の森
ウインドー ハナエの蝶が翔んでます

大阪市 星 野 きらり

生き甲斐の独り舞台よ台所
身のほどを弁え決める腹八分
嬉しい日ビールも一寸お相伴
孫夫婦見送り寂しさをのこし
顔のない服ばつかりの寒い駅

大阪市 小 糸 昭 子

らんらんこの雨虹に変わりそう
幸せの鍵はいつものポケットに
神様は表と裏がよく見える
人間になりたい猫が家に居る
遅らせも進めも出来ぬ砂時計

大阪市 安 達 はじめ

野仏の顔からとける春の雪
核心にふれて絆を確かめる
いささかの救い病室花一輪
カタログに洗脳された無駄遣い
メロドラマ読書の秋にしてくれず

大阪市 前 たもつ

大阪城風揚げできる空がある
生き物のすんでる星は地球だけ
快気祝一度も知らず古稀を過ぎ
七不思議きっぱり止めた父の酒
ご先祖の位牌移して生家閉す

大阪市 熊代 菜月

優先の席でねた振りして人
待つ人のある幸福をかみしめる
助け合う愛に境界作らない
転勤のたびに荷造り慣れてくる
一粒の種から夢の花も咲く

大阪市 野田 栄呼

動かずによく食べ足につけが来る
思ひ出がまつわる品で捨てられず
皆が居てひとり居の気楽さを知る
思ひ出の人がだんだん増えていく
国内産表示を見ても戻す肉

大阪市 川原 章久

同行二人そろそろ足がへこたれる
くたびれたグローブ孫の宝物
何時にない妻の強気にオロオロと
若向きを演じてみてももう傘寿
シングルベッド二つ並べて夫婦です

大阪市 神夏磯 典子

地を這って虫も桜に寄ってくる
いち日が早い寄り道ばかりして
インターネットメール茶の間が騒がしい
はあちゃんの下手な三味線鳴っている
大福餅夫の前では食べられぬ

大阪市 大川 桃花

減る年金特売巡りする日課
慌てんでも信号はまた青になる
配られてじつと見たことないチラシ
病弱と貧乏武器に生きている
居眠りが佳境になって降ろされる

大阪市 川久保 睦子

ヒロインになれぬ深紅のブチトマト
ともかくもお酒が呑めるうちがいい
タクアンの尻尾かじって一人酒
噂話おんなの耳が立っている
ジョーカーを持って一度も使わない

大阪市 鈴木 トヨ子

桜吹雪未来抱く子へ惜しみなく
ひな人形嵐三代耐えた顔
我が家恋し病乗せたい流れ雲（入院 3 旬）
国訛りナースに母の顔重ね
病窓で気楽に見てるボタン雪

大阪市 板東 倫子

どことなく春めいた朝北帰行
君が代と日の丸サッカー場の愛国心
節約はケチで小言はダサイとき
言にくい事をメールで打って来る
福招く恵方はどこと寿司かぶる

大阪市 岩崎公誠

大阪市 中村 穀子

コンビニの混んだ時間の無愛想
ネット死はデジタル経で供養する
高齢化骨なし魚が定番化
逃げ道を塞がれてからしほる知恵
ダイエット試算と誤算あぶら汗

大阪市 奥村五月

苦勞して卒業させてまだバイト
社宅では上司の妻に威張られる
猿以下と言われ反省させられる
木枯らしに愚痴も吹きとお屋台酒
たこ焼の土産が良いと寒い夜

大阪市 古今堂蕉子

一等の旗に並んだ事がない
空々しいお世辞と知っていて楽し
琴線に触れ涙腺のとめどなく
両方を立てる策なし振子なり
楽しみはテニス川柳めしに風呂

大阪市 鶴田遠野

細る年金締め直す命綱
ふぐの日に切り上げ祝うパール婚
また身内去るかのように歯が抜ける
愛犬を取り合っている倦怠期
男と女らしさが消えてゆく巷

グローバル食材デパ地下みなそろえ
食べた事がない牛丼を食べに行く
競う気がないので意気が上らない
手の内を見せず素面でヘラヘラと
近いのに何故にこんなに遠い国

大阪市 西川更紗

朝シャンをかかさずしてるパラサイト
人を恋うオンザロックを傾けて
リフォームに昔の着物生き返り
カレンダーにうれしい予定ひとつ増え
へそくりを隠した場所をもう忘れ

和泉市 中川 楓

耕した心に赤い花の種
古いのが好き九条と赤ワイン
手袋を脱げば節くれ母の指
持ち味として灰汁少し身に残す
倅のためいそいそと行く厄落し

泉佐野市 山本蛙城

塩分と散歩口癖お医者さん
ケータイご遠慮空念仏の車掌さん
牛の鼻息見せる牛丼屋のテレビ
飯がわりにサブリメントを食べて春
留学の嘘山となり霧が湧き

茨木市 藤井正雄

交野市 山川日出子

才たけた祖母がまさかの痴呆症
単身赴任支局は今朝も雪になる
わがままに食べて胃薬飲んでい
るでかい声力不足をカバーする
疲れ切る代理出席貴賓席

大阪狭山市 矢野 梓

手がだるくなつてさよならする電話
年寄せて頑固ますます頑固なり
見くびった天気予報に泣かされる
冷やかな笑みまで添えた丁寧語
主婦の午後牛耳っているものもんだ

柏原市 永浜加津子

そこかしこ春の息吹きは競いあい
起き抜けの水が体内駆けめぐり
その話蛇口全開聞き流す
献体の手続き終えて手術台
看護人風邪をひいては嫌がられ

交野市 森本弘風

年賀状当りましたとお礼状
鬼は外輸入した豆投げつける
妻からの本命チョコがまだ来ない
お返しが怖い義理チョコ一つ来る
胃カメラがキレイきれいと褒めてくれ

節分に平和な日本イラク行き
梅薫る玉青画伯百一歳
大寒に三つ見つけた路のとう
母がよく野崎小唄を口ずさむ
乳ガンによく効くバナナブロッコリー

交野市 田岡九好

人間はこわいと鬼が豆を撒く
イラク行せめて黄色いハンカチを
日本史の年表に虎Vと書き
近鉄さんほかに売るものなかったの
女房が留守でおしようにうたつぷりと

河内長野市 石堂潤子

春ですぬ朝から鳥の音がする
三姉妹真ん中だけが不美人で
目には目をそれが出来ないから悩む
鴛鴦は幻でした離婚印
時どきは亡母に愚痴をもらします

河内長野市 村上直樹

面倒な話は聞かず酒を注ぎ
少子化のつげに老後を殴られる
お迎えが来ても閻魔にあかんべえ
たればの大言癖は親譲り
髪付けの香も春を呼ぶ大銀杏

河内長野市 山岡 富美子

奇抜な絵かいて風向き変えてみる

サバイバルゲーム ライバルともハモる

新人の奇抜な案が風を呼ぶ

年金を減らし改革謳って

百代の民話を紡ぐ太い梁

河内長野市 加島 由一

雪ですと酒の支度の台所

お多福の面で涙を隠す妻

帰る気の男に雪は降り止まず

子供持つならジャズより演歌歌手

甲斐性ない男可愛いとこがある

河内長野市 水谷 正子

チューハイもあるよと花見誘われる

いける口美人であろうとなかろうと

気まぐれな桜に予定狂い出す

見収めと去年も言うたがまだ元氣

良妻の面を外して終い風呂

岸和田市 岩佐 ダン吉

じっくりと九条の味をかみしめる

ただ祈る殺されぬなよ殺すなよ

ジャンボくじ外れ静かに生きている

幸せな日記で今日も異常なし

曲折の人生らしい聞き上手

岸和田市 井伊 東吉

冬空に金盃似たる下弦月

遠赤の下着温いか買って見る

親子の情周囲の情も地に落ちる

外国の力士国技を脅かす

ウィルスの猛威は神の怒りかも

岸和田市 原 さよ子

火の粉舞う春の息吹きの二月堂

消費者を平気でだますにせラベル

正論を妨害してる多数決

冗談を平気で言える輪の温み

正直に言うてしまった後の悔い

堺市 矢倉 五月

絵心があればと寒の月の冴え

反りかえる鰯へ爛のほども良く

また揉めております夫とバソコンと

風邪癒えて鏡にチョット老いた顔

観覧車静かに春を待つ形

堺市 齋藤 さくら

苦勞したことに触れぬ笑い皺

言い訳をしない人柄好きになり

見なれたら柱のきずも愛おしき

満月にいつしか両手合わせてる

雪国の地酒と蟹でまた肥り

堺市山本半錢

飛び込んだ未知の世界で咲かす花
東山魁夷の青に逢いに行く
鬼百態愛しきものを飼ひ馴らす
耳たぶを染めてひれ酒堪能し
渡世とや無理な握手もしています

堺市西村りつえ

めずらしや第五日曜ある二月
福は内 鬼は氣力がすほみ出す
草野球で鳴らした足も装具つけ
白酒よりワインが好きなお嬢さま
五十年プチ整形は遅すぎる

堺市和田つづや

万歩計お疲れ溜まりませぬよう
善人の真似は時々ぬかりなく
嫁にやりたくはないけど孫ほしい
止り木の妻の新鮮さに惑い
恙なく暮し我慢も半分こ

堺市源田八千代

東風吹けば天神さんの梅まつり
日だまりで弁当ひろげる梅見客
春風が心の窓をノックする
斬新さと木の温もりが同居する
入学も父の転勤左右する

堺市村上玄也

誘惑を振り切ったけど悔いもある
病気の数競い合つてゐるクラス会
カードだけ増えて預金は減るばかり
虎の威を借りて出馬の知事選挙
嘘うまくつけて役者だなどと思う

堺市柿花和夫

わが恋を辿る行脚に千社札
百均の差別の無さが好きになる
肩書きは主婦の代理としておこう
迷い箸すれば聞こえる母の声
マンガでもいいから読めと言う教授

四條畷市吉岡修

振り向けば荒れた轍があるばかり
才女には一步譲つておくがコッ
トランプか花札でこい爺が勝つ
大物と見てたがただのビール腹
玉屋でも鍵屋でもよいミニフェスト

吹田市太田昭

消えたはずの恋消し壺で燻り出す
女から刺された棘を抜きもせず
平均寿命越えても女背を伸ばす
苔の生えた足引きずつてまだ歩く
陰口も聞ける補聴器買いにゆく

吹田市 瀬戸 まさよ

親と子の絆暴力とは哀れ
阪妻が一番という無法松
大正の律儀私もその一人
柚子の有無評価の決まる茶碗蒸し
診療所風邪の行列回れ右

吹田市 大谷 篤子

飛んでみる残り時間を無駄にせず
飛込んだそば屋の主人元の彼
お酒飲み同じ痛みを分かち合う
追憶の美しい青い海
優しさに触れて傷口うずきだす

吹田市 山本 希久子

道なりに行けば明かりにきつと着く
癒してるつもり癒されてる介護
少し狂うてわたくしの子になった母
九十五歳のころ無視した医療器具
すべて成り行き次に来たバスに乗る

吹田市 早川 棲世

可能性無限と先生だって嘘
家鳴り断続わが婚の築五十年
謝辞言えば嘘になるのを妻知らず
不倫乱交すさまじい世に老いている
俺の辞世来世はもつとうまくやる

吹田市 穴吹 尚士

浮き沈みあるから此の世おもしろい
童謡が心に沁みる歳になり
鬼のよう叱り仏のよう諭す
去る者は追わず夜寒のはしご酒
痩せ犬が遠吠えをする縄のれん

大東市 南原 正和

おまかせと桜咲くまで梅に桃
春雷に桜新芽も首すくめ
得意気に九九詠じる孫の顔
神妙にサスペンス見る古稀の妻
空気のように何時も心に君が居る

高槻市 井上 照子

就職難孫を励ます昨日今日
聖職も一部の悪で濁される
ミスは駄目白衣を頼り拝んでる
婿殿にやっぱり遠慮車呼ぶ
悔しいが錯覚だった愛の顔

高槻市 西谷 治三郎

料亭でイラク支援の秘策練る
ばあちゃんも肥満を隠す斜め撮り
自家用車親父トヨタで子は外車
税払いながらこそこそ煙草吸う
うたた寝の中途半端がやめられん

高槻市 左右田 泰雄

お互いの丁度よい距離見定める
いつもよりときどき一緒の方がいい
さりげない言葉思わぬ波紋呼び
カーナビに頼ると自分見失う
年毎に坂が重荷になってくる

高槻市 江原 秀夫

寒鴉どこに帰るか小雪舞う
大正二人無言で過ごす冷えた夜
凡人の首すじにくる寒の冷え
春一番冬の怠惰をはぎにくる
計画はいずれ変更する予定

高槻市 乙倉 武史

水ぬるむ待つていました花粉症
時効にはなつても罪は消されへん
逃げ足の早い諭吉を愛おしみ
行状を遺影の妻はお見透し
心して過ごさん老いに明日はない

豊中市 水野 黒兎

胸に降る雪深閑と積もるのみ
喧嘩後の無口トマトを真つ二つ
別れ道天を仰いで風を読む
本流も支流もやがて同じ海
長生きは見送ることと母卒寿

豊中市 安藤 寿美子

面倒を逃げてばかりで終りそう
ラーメンを食べてる機嫌なおつて
その話されると私ちこまる
ケータイを持っても使いこなせるか
そら一寸しんどまつせと値引きせず

豊中市 山門 タミ

忌はめぐり梅の蕾よ夫恋し
花屋では春夏秋冬競い合い
イヤリング九十歳をときめかせ
ランドセル贈った孫も二十歳
杖なんかほって大道走りたい

豊中市 樫谷 郁子

エースの座恋も涙も置いて行く
トップとは神のいたずら贈り物
朝鏡死角探して化粧する
山門に鈴の音わびし遍路杖
消える雪寒さきつちり連れて来た

豊中市 江見 見清

安産の病院照らす明けの月
空席の隣美人も来ぬままに
予想見て空を見上げて迷いだす
いい春も悲しい春も桜咲く
たばこ吸う生徒が怖く目を外らす

富田林市 片岡 智恵子

分かることと出来る事とは大違い
無駄遣い今日いちにちの楽しみに
相槌はうつても妥協してくれず
人間がみたくてのぼる天守閣
物置きに無用になった餅搗機

富田林市 中崎 深雪

春だから庭木はみんなはしゃいでる
婆ちゃんに桜見せたく車椅子
ただ歩く桜月夜のしのび逢い
早よ寝ると損した気分臘月
やさしさに包まれ心晴れました

富田林市 藤田 泰子

Gパンの穴も小粋な長い足
風花の中でおんなをとり戻す
酔い醒めのラーメン胡椒たつぷりと
痛いところ擦ってくれる春の風
虹色で春のセーター編んでいる

富田林市 大橋 鐘造

友達でいよう別れがつらいから
鳩尾に伏せた野心は覗かせぬ
回復へ五臓六腑の機嫌とる
夢一つ抱いて走ってきた命
運命を背負って挙げる呱呱の声

寝屋川市 籠島 恵子

バンドラの箱に入っていた戦
冬木立 空をちよっぴり広くする
もつともつと知ってほしいと枇杷の花
来し方の違いか未だよく揉める
気をきかせたつもりで切った奴唄

寝屋川市 平松 かすみ

神仏に感謝稀なる歳になり
古希の坂目指す私のローヒール
白髪になって小粋なループタイ
ウィルスに負けた私の力瘤
ウィルスに好かれた分が赤字です

寝屋川市 富山 ルイ子

頑固さはどちらに似ても骨つばい
恩返し出来る足腰鍛えてる
ホームへの入所を決めて丸く住み
恙なく家事分担の三世代
肝心なことは喋らず掛け直し

寝屋川市 堀江 光子

九条を摺り抜けるようにして派兵
新曲を直ぐものにして老い知らず
別の道志す子も我が宝
真心を知ったは遠く去ってから
何気ない言葉にも出る人の幅

寢屋川市 高田 博泉

羽曳野市 吉川 寿美

ええことをしてきたような墓まいり
マジックのように円高あやつられ
無造作に髪なびかせる若さかな
改革の言葉に庶民乗せられる
騙されて平和ボケから立ち直る

寢屋川市 坂上 高栄

祝うべし平和うれしい梅一輪
自衛隊イラクの夢は空を駆け
改憲の審議 喧喧諍諍と
積む雪を割って二つ葉春覗く
豆の蔓薬にすがって天を指し

寢屋川市 森 茜

赤いポストに尋ねてみたい花だより
スキーより帰りばたと寝てしまう
変化球 母ごとく受け止める
まあ一献となりの椅子は恐そうな
大空へひとりの旅もロマンなり

羽曳野市 安芸田 泰子

祈祷料差がつくやろか願いごと
老眼は人の心が見えにくい
妬まれているのだろうかバラ枯れる
これつきり会えぬ予感のする握手
ゴミ出しの朝を鳥に教えられ

彦左のいない貧政軋むここかしこ
息切れがして来た古希の通勤車
心電図の乱れ病夫には言えず
三度三度の飯に預けてある余命
苦勞した事は言うまい冬薔薇

羽曳野市 三好 專平

偽物の方が高いと画商言い
たまご生むにわとりみんな埋葬し
冬終わりけり いくさつづきけり
教育につぎこむ金を弾に変え
傀儡のからくりみんな知っており

羽曳野市 徳山 みつこ

税理士に教えてもらっている答案
ばらまきの税の行方よ国税庁
セールスをバツタバツタと斬っている
重装備命を的に行く支援
裁かれる日本丸の現在地

東大阪市 中岡 妙

娘が父へ父は黙ってチョコ食べる
借地畑こぼさぬように冬菜摘む
風邪引かぬようにと冬日浴びに出る
ゆつくりと歩む競争せぬように
この世での地獄巡りをするニュース

東大阪市 指宿 千枝子

君眠る花野の春はまだ浅く
青春を辿れば蒼き空と海
名も知らぬ小鳥一羽が今日の客
老婦人動かなくちゃと押し車
咳くしゃみインフルエンザ過敏症

東大阪市 笠井 欣子

満月を二人で見るの久し振り
我が理念崩さないよう生きて行こ
病む友へ年賀出さずに寒見舞う
苦勞性忙しいのに増える趣味
引き算の増える暮しも張りがある

東大阪市 安永 春

畦道に春が芽吹いて摘むよもぎ
吹きさらしタオル頭に首が浮く
校門の桜はうれしそうに咲き
行政もわたしも四月事始め
お好み焼にビールなるほどうなずける

枚方市 寺川 弘一

哲学を追いかけるとき眼が据わる
鰯雲編めばこの世を包めるか
自己革新は先ず手始めに深呼吸
命あるように石ころ移動する
いい顔で作って欲しいデスマスク

枚方市 宮川 珠笑

晩成を待てず大器が職追われ
百歳をめざしボキボキストレッチ
遠出やめ氏神さんに頼んどこ
妻の留守今日はゆつくり部屋で喫う
鐘の音がどれも浄土へ急いでる

枚方市 鈴木 政子

昔麦ごはん今巻寿司の節分で
顔パスを自慢していた戦中派
もうあきまへんと言いつつ盃重ね
たたき売り消えて久しき新世界
人前で唄うドキドキやつと消え

枚方市 海老池 洋

地球儀を包みにかかる星条旗
この道はいつか来た道日章旗
我が家にも確か国旗のあったはず
気がつけば旗振る人が消えている
揚げた旗巻くに巻けない男意地

枚方市 安達 忠央

よわねはきねつころがれるうちがよい
肩書きのつらさがとれて好々爺
満開の桜一本無人駅
桜咲き青テントにも春があり
大空へ富士だけ聳え雲の海

藤井寺市 高田 美代子

松原市 小池 しげお

こんな絵に売約済みが貼つてある
三食を心貧しき日にも食う

お茶請けに自慢話をさりげなく

種蒔いて毎日のぞく植木鉢

優先席に少し離れて立っている

藤井寺市 楠 昭子

啓蟄へそろそろ虫のスタンバイ

痛いところだんだん増えてきた歩幅

何着てもおばあさんだとすぐわかる

還暦以来真つ赤なベレー帽愛す

ひと目惚れマネキンの服欲しくなり

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

自分史に懺悔している恋すべて

気まぐれはお互いさまよエンドレス

求愛をうやむやになどしない猫

フラメンコからだ芯から活気づく

三分咲きさくら確かな息づかい

松原市 國 見 蘭 香

向こう意気すぎて三猿身につかず

音高く住むは一人の見栄っ張り

試着室うその自分が気に入らぬ

その歳で言われてもまだ夢を追う

小さな犬 小半日吠えている

ただ酒をよばれて晩酌がまずい
ジャンプ傘開きたがつてしょうがない

正月呆け頭の蓋が開いたまま

賽銭は五円しつかり手を合わし

知事選に行つてノックを思い出し

箕面市 出口 セツ子

咲く日までパワーを溜めている蕾

面接に正直すぎる子が向かぬ

逝く日まで炎を抱いている日記

人生を二倍楽しんでいる波乱

明日の陽を見つめ笑つて生きてやる

箕面市 岩 津 ようじ

命令の通りに動く歩の苦勞

ご機嫌のマダム手相を見てくれる

おしっこが時々漏るという傘寿

雨もよし庭石少し潤つて

肉弾の相撃つ試合見る炬燵

守口市 井 上 桂 作

その話うそと知りつつ聞いてやる

ご愛想を好意と思うお人よし

その話聞く耳もたぬ苦い過去

解けぬ謎あるからこの世面白い

高見盛 無我の境地で気合入れ

守口市 結城君子

三枚目のばあさんがいて肩こらず

氷点下の予報に明日は何の鍋

癒さねばバレンタインが逃げてゆく

夫唱婦随しぶしぶ止める柚子の風呂

名義貸し叩けばほこり出ますこと

八尾市 宮西弥生

篝火の炎に癒す薪能

あきらめか悟りか雲が流れゆく

ひとすじの主義で生れた自立心

魂の宿る硯に氣と向かう

節節の傷もゆっくり過去形に

八尾市 宮崎シマ子

ひとりぼっちになつてしんどい木守柿

生活をしている家だ音がある

河内野を青山として動かない

一度言い出した止まらない不満

船頭の腕はたしかな潮の道

八尾市 高杉千歩

五感まだ少しうごめく好奇心

憂鬱のうつを書くたび辞書を繰る

後ろに佇ってます携帯驚かす

現品限りやっぱり買うことにする

好きなものから箸をつけ老いはじめ

八尾市 吉村一風

いつの日か返したい恩温める

老いてなお飲める幸せ噛みしめる

老人パワー弾むお昼の縄のれん

賽銭の音確かめて手を合わす

失って知る平凡の大切さ

八尾市 内海幸生

刺し傷を間違いでしたと言われても

塞翁が馬と思えどいつも逆

負けるなよ凍りつく夜の青テント

二月七日たしかに生きていたと書く

携帯に背なを丸めて歩く群れ

八尾市 長谷川春蘭

九十越え杖に頼らぬ恵方かな

旅に覚めて朝うぐいすをほしいます

甚平や手足の皺のあからさま

ちゃんちゃんこ着て婆の座に婆の居て

パトカーの回転灯や寒の雨

八尾市 生嶋ますみ

さすがプロ時間きっちり介護する

魔女が顔ときどき出してくる頭痛

かと言って嘘をつくにも苦勞する

病む夫に答えもなしに話しかけ

家計簿ほど続けたものは他にない

八尾市 山本宏至

父を慰めるわが子はもう男
とんでいる女の涙はすぐ乾く
年月にB面の方が光り出す
突っこみを入れて話の輪を広げ
目の色が金の話に光り出す

大阪府 初山隆盛

春うららばあさん付ける万歩計
道楽は卒業したと土いじり
どの球団も日本一になると言う
自爆テロ神風特攻より怖い
嘗て無い総理が軍旗授与をした

大阪府 米澤椒子

晩学の壁這いあがる遅々として
百舌鳥の餌忘れたままの枝に春
風神の袋も春のいろに替え
通訳のいる若者の新造語
まさかの時の生保CM耳に胼胝

大阪府 澤田和重

妻という安全パイがある強み
辛口の助言に妻の愛がある
伝言板の馬鹿とは僕のことらしい
期限切れ教えてくれぬ冷蔵庫
これからは自分に投資する余生

神戸市 木村貴代子

人助け僕も元気になってきた
畜生も鬼も我が子は殺すまい
阪神のグッツに和む応接間
学校のように通った映画館
リボンかけ心にしまういい言葉

神戸市 山光久

バレンタインやつと貰った古稀の恋
処方箋 禁酒と言わずほどほどに
自慢するものは無いけど生きている
どっこいしょ弾みがついて男み足
真っ直ぐに歩いて傷が付き纏う

神戸市 伊勢田毅

絵馬選ぶ神が時々ミスをする
ゴミ捨て場男同士が目をそらす
休肝日妻より先に箸をおく
古希過ぎてブライドも捨て軽く生き
ゼロ金利たんす預金も底をつき

相生市 中塚礎石

靖国に祀るといわれ書いた遺書
飲めば出る歩哨に立ったときの歌
ロッカーに黒のネクタイ下げてある
差した指手もとに殺意秘めている
首輪はずして野良犬の自由主義

芦屋市 黒田 能子

春風に会いたくなつたシャボン玉

颯爽としたくて春の彩を着る

調子よく引き受けた荷が重くなる

遺言と日記書かぬと決めている

ロッキングチェア退屈を楽しまん

尼崎市 長浜 美籠

あの人に似た声が背に空耳か

運命がいつも陽の射す道避ける

嘘っぱい話に欠伸かみ殺す

本性が出る飲みっぷり酔いつぶり

サブリメントより効果ある佳い話

尼崎市 山田 耕治

いよいよのとき捨てるものふえている

玉遊びゲートボールで終りかな

にぎやかに童謡かけて冬がくる

最後には眼鏡外して見る鏡

布団干しふさぎの虫を叩き出す

尼崎市 内田 美也子

愛しい人ずらり並んだ冬銀河

いじめ虐待考えられぬ世の歪み

雑踏で元気をつけて夜勤入り

くよくよと悩むことなし春の音

春風に乗って嵩んでくる出費

尼崎市 春城 武庫坊

カタカナの花を並べて部屋温し

串団子主役に並べスパー春

風は旅人行き先告げず走り去る

神前にあふれる絵馬に神思案

現況をみんな知ってるのはカルテ

尼崎市 春城 年代

餌を絶たれた鳩が凍土を漁ってる

ああ無情のら猫に餌をやらぬよう

紆余曲折の末おだやかな今がある

音楽会果てて大阪城の夕茜

春宵のそこはかとなく沈丁花

尼崎市 軸丸 勝巳

寒波きて訃報の欄が広くなる

長寿箸今使わねば何時使う

五十年過ぎて記念日こじんまり

片足でよろけズボンに笑われる

多機能もよいが老人用も要る

尼崎市 田辺 鹿太

ひかえ目に生きたい夢も塩分も

忘れたら忘れたでよい誕生日

妻のいる限り孤独に縁がない

コウちゃんにおカジが僕の宝塚

啓蟄や遊びの虫もさわぐ頃

川西市 西内 朋月

西宮市 山本 義子

熱燗にしあわせ貰う寒最中
コンビニの豆で済ませる鬼は外
牙の無い鬼に催促されている
節分の巻き寿司太いのは困る
風船を飛ばしたあとの逆転打

川西市 米原 雪子

プレゼント編む楽しみを味わいつ
大声で叫びたかった野辺送り
或る時は図太くなつて遣り過ぐす
冬枯れの冷気を吸ってウォーキング
スーパで泣きわめく児に若いママ

三田市 北野 哲男

上澄みを流してからがおもしろい
光る孫嬉しがったり案じたり
不眠症月下美人の夜は別
古い二人不景気も良し物価安
好き嫌い無くて達者で人嫌い

西宮市 菊池 トミエ

記念品見るたび思う友の顔
華やきも孤独も共に抱き合わせ
北風に負けたのか背中丸くなる
さざん花がほろほろ散つて小鳥来る
老化度の自己測定にクイズ解く

春の陽に少々傷なら癒える
一歩ひくと言訳なんかあほらしい
追い抜くのはやめたゆつくりマイペース
一抜けた二抜けたつぎはわたしかも
星空に会いたく少し遠出する

西宮市 牧 渕 富喜子

雪はマジシャン公園しばし神の庭
仏壇の花がなかなか萎れない
ゴミ当番さらの冷気に触れている
割り切れぬ思いはあるが札を言う
コロケがおいしい今日も列がある

西宮市 門 谷 たず子

乗り替えの駅であなたを見失う
一人にはひとりの音で鳴る時計
指切りの果せぬままに梅さくら
バイト料入った孫に奢られる
旅土産ビデオに写るグアム海

西宮市 井上 松煙

父母おわす彼岸はいつも春の空
拉致された人にさくらよ早う咲け
ガラス越し春の小鳥に笑み返す
勝負どころ空を仰いで深呼吸
ガソリンより高い飲み水瑞穂国

西宮市 西口 いわゑ

チヨコレートうちの大事な鬼に買う

私の鬼は豆では出て行かぬ

紅椿淑女の集い見るような

煩惱がまだ残つてゐる生きられる

記念日の夫婦小さなケーキ切る

奈良市 米田 恭昌

裸婦像を見る男の風が動かない

子には子の妻には妻のカオがあり

海鳴りの音にまどろめぬ鳥羽の宿(伊勢路 3句)

湯舟から来光仰ぐ凡人の首

伊勢詣で雑踏のがれて誓子館

奈良市 天正 千梢

共通性見つけてからの君と僕

畦道でバツタ答を出してくれ

さらくさは尻尾かくさず物が言え

割り箸がバシツと割れたためでたい日

直指庵やさしい風よ木洩れ日よ

大和郡山市 坊農 柳弘

幾度もいのち削ってきた背骨

いつからが余生か年金もろてます

季の巡る早さに花粉症ちらり

新月の渚で詩人になるころ

ハンデイーを貰つてからの不眠症

生駒市 飛永 ふりこ

ふんわりと肩の荷下ろすレモン風呂

冬眠から覚めてつくしが背比べ

ふつとした視線に本音籠つてゐる

いきなりの言葉のジャブが躲せない

思わくが外れ水面騒がしい

香芝市 大内 朝子

ピヨコピヨコと頭もたげるつくしの子

踏んばればまだ望みある土俵際

当り前の事をしたのに來たお礼

良心がときどき余所見する浮き世

老いらくの恋パープルにそそと咲く

橿原市 居谷 真理子

死ぬという仕事も楽でないらしい

横書きにすれば乾いていく言葉

あんたさらい淋しい顔を見せるから

地方版賽銭ドロが捕まった

流行が雨に打たれるゴミ置場

奈良県 渡辺 富子

恵方の鈴 東北東で春を呼ぶ

意地見せてラストサムライ花と散る

ポリシーを曲げぬ男の粘り勝ち

リピングに蹴りたい背中ある真昼

乱気流去つてふたりの海が風く

和歌山市 山口 三千子

情念をまだ捨て切れぬコンパクト

駄け糸付かぬ子供が増えている

背水の陣 檣山も視野に置く

政治家の尺度は庶民には解けぬ

和歌山市 堀 畑 靖 子

年金のくらし本番近くなる

年齢に縛られぬよう赤を着る

トリビアの泉わたしも持っている

若返り情報読んでいる眼鏡

海南市 谷 口 義 男

距離置いて時々自分見詰めてる

暗証が思い出せずに金出せぬ

新築にしてもローンで縛られる

詭弁家に乗っ取られてる政治裏

鳥取市 杉 本 孝 男

決着がついた安堵が高いびき

剣が峰に立てば見えない裏も見え

通り道僕にも解けぬ謎ばかり

他人めく退職離婚熟慮中

鳥取市 武 田 帆 雀

いきいきと走る駝鳥に春の風

父の座は硬い蝶の頭付き

不手際と手抜きが埋めてある土管

揚げ足を拾う酒なら辞退する

鳥取市 山 本 益 子

人生のデコボコ道に立ち向かう

良き友に出会いそれから花開く

この身体 合併症に蝕まれ

腹の虫けなるいなあと叫んでる

鳥取市 福 島 庸 二

若い人賞味期限に無関心

アルバムにセピアの世界引き寄せる

日の丸が歪んでゆれる日本国

いきいきと生きる体験ボランティア

鳥取市 富 山 檳榔樹

日に一度大空見上げ夢を追う

曖昧を許せば後に吐く吐息

少子化へ日本の行方鐘鳴らす

結果より経過がびびく風と雲

鳥取市 前 田 一 枝

長い口とめてしまいたい立ちばなし

いそいそと ついて行くのもあほらしい

いそいそと彼女の足が早すぎた

いそいそととつくにまかれたもう居ない

倉吉市 山 中 康 子

一命を医師にあずけてほつとする

甘言に乗るな出るなとラブコール

老いのなり汚いものを見る目つき

感情をむき出し叩く野党連

米子市 澤田千春

鳥取県 乾 喜与志

宇宙探検星座とじかに話したい

満たされて笛の音までもチャーミング

太陽にピチピチ魚の背が光る

胸底を鬼が一匹かき回す

米子市 永井三津子

若者言葉 て言うかマジ チョウむかつく

政治家に民の悲鳴が届かない

かずら橋嫁の差し出す手が温い

未断続つ女心と座禅組む

米子市 木村春枝

春二日冬が三日と梅の花

白銀のまぶしいお山一人占め

ハーモニカ音色侘しく街流し

春彼岸 犬の寝言を聞いている

米子市 野坂なみ

流水へ無口の町が喋りだす

あの頃の貧しさ下駄泥棒もいた

無口でも張り合うペンを持っている

寂しくて鈴振る群の中にいる

米子市 光井玲子

小川さらさら群れるメダカをみかけない

こころ配りくれるコールにただ感謝

空っぱの頭で右往左往する

この歳で人のこころがまだ読めぬ

温泉や毎日通う足の裏

詩を吟ず喉も機嫌が良いようだ

老人の海ひねもすを吞気節

シベリアに沈んだ過去よ梅の花

鳥取県 鳥羽玲子

生きざまも心も素顔かくせない

ほけかけた脳に錆止め塗っておく

マツチする木陰に風もついてくる

粉雪のロマンチックな旅となり

鳥取県 鳥羽直市

喜寿越えた初春感謝して暮らす

病んでから煙草やめても遅すぎる

寺の門くぐり悩みを吐いてくる

やりきれぬまさかの事が多過ぎる

鳥取県 原 みさを

ウイルスに人の驕りを叱られる

人の子を死なせておいてから拝む

田打ち初め転作田の真ん中で

金の話家族会議も国会も

鳥取県 平尾菜美

糸口がつかめぬままに冬に入る

乗り越えた三日坊主に春の笑み

緞帳が上がる静かに静かに

面倒な手続き終えた大きな樹

鳥取県 下田 茂登子

帰らない猫にも未練あつて泣く
五体満足それでも仕事みつからぬ
輪の中に入ると抜けぬ足がある
学者みたい川柳作る部屋に居る

鳥取県 平井 栄 翁

おかげ様暮す八十路の胸の内
肩に手をおいてなおさらよく泣かす
降りしきる雪が隣を遠ざける
逢つて来て内気な胸をふくらます

鳥取県 田村 きみ子

春の川メダカの群にはつとする
のんびりと豆を煮ている四月馬鹿
その先は問うまい淋しそうだから
薬飲むために間食今日は抜く

鳥取県 太田 幸枝

手のひらの運を逃さぬ目張りする
お神楽の鈴に心も浮いて来る
苦労した人で話がよく分かる
イラク派遣ぬくい炬燵でお見送り

鳥取県 西川 和子

他人だと思えば腹も立てられぬ
耳うちにその気になった落し穴
野辺送りお飾りほどの春の雪
花の下鬼と一緒に舞う神楽

松江市 小川 注湖

娘よく育ってくれてさらわれる
幕引きのタイミング知る桜花
うちの子が目立ってますと親心
読み慣れた筆跡の中母論す

出雲市 岡 あきら

粉雪に乗って舞込む計の知らせ
寒々と年金の記事追う眼鏡
東京の何処がいいのか行つたきり
生き方を変える積もりのない昭和

出雲市 久谷 まこと

術もなく猫と一緒に冬日向
がつくんと舟を漕いでる冬日向
喝采に奈落の黒子嬉しそう
味噌汁の匂いで今朝も食すすむ

岡山市 井上 柳五郎

無為徒食それで一人前の飯
自信喪失しだいに声がちさくなり
食事中見たくないことこのテレビ
今聞いた血圧数値はや忘れ

岡山市 福原 悦子

不揃いの兄弟にある未来地図
流れゆく時代の彩と生きている
淡い恋芒野に秘めて遠ざかる
川の果て海はやさしく抱いてくれ

熊本県 高野宵草

わだかまり解けて明るい酒旨し
恥積んで馬齢人並み喜寿を生く
親切の濃さをたどれば過疎となる
思い出も詰めて送った里の匂

唐津市 宗水笑

日暮れまで魚が臭う朝市女
旅の店美女の笑顔につい追加
ロボットがからくり儀右衛門師と仰ぎ
ブライドがにんにく臭う暖簾避け

東かがわ市 成重放任

三文の得を信じて早く起き
跡取りがなくて改築だけで住み
旅先で同じ訛の温かさ
消耗をしたか膝腰痛み出し

松山市 丹下美津子

何は無くとも孫八人の雑煮箸
東の間の油断を猿が狙ってる
定年を自然豊かな里で待つ
春そこに雲に濡れたふきのとう

高知県 小澤幸泉

ざわめきを消して私を取り戻す
絶望の果てに光がみえてくる
古い猫が行き場さがしてなきつづけ
苦しみの糸で織り上げ笑いじわ

高知市 北川竹萌

戦争はしてはいけない夜が寒い
寒つづき庭の紅梅開花止め
省みる九十二年は長かった
そこまでは言えないことが一つあり

弘前市 岡本花匠

雪量標 積雪ゼロに春瀬踏み
ガラス拭き春の実感兆す彩
春彼岸 新芽も笑い人和む
うぐいすの夢売り誘う梅さくら

青森県 小寺花峯

言葉のむ会話に古傷が疼く
ぐずぐずの俺に北風容赦ない
身を削る覚悟は出来た孫の顔
二次会のトイレで携帯鳴り響く

静岡市 安本晃授

春雨のやさしさの旅まくら
うますぎる話尻尾が見えかくれ
春めいて先走りする風の私語
春眠に心の根雪まだ溶けず

大津市 中宗明

ヘソクリを収入ゼロでみな遣い
収入がゼロで戸惑う退職者
合併の可否で混乱村ふたつ
申年を迎え不況の去る年に

京都市 高島啓子

目標の樹になるまでの長い道
ネクターの印象だけの講演会
カーテンを引いて私のテリトリー
デザインはそのままがいい戎橋

京都府 稲葉冬葉

もう一人のわたくしに住むまだらボケ
死ぬと捨てられるわたしの宝物
眼にやさしいレンズに替えて一人旅
髪染めて好きな服着て無料パス

大阪府 松尾柳右子

幸せは元気に動き良く食べて
茶筆筒に思い出並ぶこけし達
急ぐまい出来る事だけやる歳だ
ぜいたくな猫と二月の日なたぼこ

大阪府 清水絹子

成人式先ずはためしの赤ワイン
タラップを降りて歩けば人心地
初雪にいいことあると実南天
保険証のコピー頼りにひとり旅

大阪市 渡部さと美

四十五理想の歳の気で暮らす
牛丼は食べた事なし未練なし
停年の夫にあらまこんな面
川へ糸垂れて体操してはるよ

大阪府 寺井東雲

隠し玉何処へ行ったかわからない
明日デート心浮き浮き手につかず
浮くような話を妻についしゃべり
脱皮した親もびっくり成人式

大阪府 杉澤汀

貸し借りの勘定に暮れ春遠し
女は春ボクには寒がまだ明けず
うぐいすに誘われ藪に迷いこむ
ホトトギス早う登れとせきたてる

大阪府 町田達子

威勢よく豆ぶつつけた頃もあり
ユーモラスな鬼が顔出す京の寺
境内の墓地敬遠のカラス達
落暉の土手を犬も染まって走ってる

大阪府 伊藤博仁

無視をした娘からティッシュは貰わない
ピカソより理解ができた屏風絵展
猫舌に合わせています鍋料理
黄な粉にし楽々食べた鬼の豆

大阪府 小泉ひさ乃

正月も過ぎて静かに鳩の群
ひたすらに歩かねば道見失う
三猿になったら私少し変
人間も脱皮出来れば楽しから

大阪市 本間 満津子

ゆるい坂 一歩一歩を踏みしめて

耳遠く全盲だけど口達者

死は恐れないけどお別れは悲しくて

目で合図うまく蒸発してしまい

大阪市 玉置 英子

雨よりはいいと出勤雪の朝

愛子さまにこにこつられ笑っちゃう

閉じ込めた昔冷たさない琥珀

明日無事な目覚め願って灯り消す

大阪市 中田 あい子

正直に宿る神様留守らしい

親が子を子が親あやめる異常な世

春よ来い野球シーズン待ち遠し

サッカーのシーズン開始に武者ぶるい

大阪市 川端 一步

目をカッと開いてテレビ嘘まこと

大阪城デートの相手梅さくら

啓蟄や年金減らし寝ておれぬ

ひかえ目の苦労ばなしが腹に落ち

池田市 栗田 久子

首を振り奇妙に学者振るカラス

越えられる域だと神が出す試練

あきらめは最後の手段だと思ふ

ふもとから渦巻くごとく山桜

和泉市 西岡 洛醉

点滴に或る日の命助けられ

凡人の背なやわらかし万歩計

前進を忘れなかった父の靴

善人は一歩後退二歩前進

河内長野市 井上 喜醉

犬小屋の中へ合鍵入れている

無気力になればしんどい向かい風

見なかった事にしとこう孫の罪

外食で携帯鳴ると不味くなる

河内長野市 植村 喜代

一寸先闇と言うのにあくせくと

風呂敷もいつの間にやら紙袋

転ぶのもむつかしそうな雪の町

百均は孫のおもちやも気にならず

岸和田市 木村 正剛

ひとりでに抜けていく菌に感謝する

焼芋が恋しくなつて落葉掃く

閏年生れでやつと二十歳です

荒行は民に任せて千日目(総理在任)

岸和田市 原 苑子

解凍を活魚に見せた不意の客

体力をつけても不意に来る病

好きな物食べてこの世を去ると言う

万人の願い背負つて鳩が舞う

岸和田市 亀井 皎月

高槻市 傍島 克治

易者言うあなたクジには当たらない
鉄の土落として今日の日課終え

新薬の開発進み生かされる

よい夢が当り続けて恐くなり

吹田市 野下 之男

日の丸に因果含めて旅立たせ

青空で迷子にされた千切れ雲

怖くても乗れば忘れる空の旅

日本晴れ桜吹雪の良い男

吹田市 岩屋 美明

四つ橋に来て四つ橋が見当らず

昼 今井 夜はレトロな自由軒

国境の山を跨いだ虹の橋

よく働いてくれた軍手だ指が出る

大東市 児玉 蛙

失敗を笑ってすます老いの知恵

いつの間に家族ばらばら老い二人

後悔はせずに前向き生き延びる

さりげなく口添えしてる温かし

高槻市 生田 義一

薄化粧残りしてすれ違ふ

朝食の味噌汁おいし老いの日々

色気など卒業したと嘘ばかり

青い目もまじり国技も国際化

下戸からの花見の誘い応じない

七十歳古稀とは言えぬ長寿国

今だから言うがと父の艶話

群を抜く頭脳に欠ける処世術

豊中市 吉田 あずき

ウイルスがやがて地球を制覇する

商売に良心が無い恐いこと

起きぬけに温度計みてまた寝床

豆ぐらいで逃げる鬼なら可愛いね

豊中市 岸田 知香子

一病を持ち健康の重さ知る

差し向かい千切りひじき老いの膳

八十路来て惰性で動く小商い

肉御難老いの膳には事かかず

枚方市 二宮 山久

再職も慣れてきました職悩み

年金を受け取る私は元気者

寒風の勤め身に沁む始発駅

給金が入った妻よ旅に出よう

枚方市 鈴木 政子

ママ面倒屋外食家族増えている

寺田屋と十石船で稼ぐ伏見

人間でもヘルベスの痛み耐え兼ねる

牛井の吉野家新メニューで繋いでる

枚方市 森 本 節 子

炬燵の中 青海苔採りのつめたさ見る

年賀くじふるさと小包いだいて

順風に助けられ逆風に喝もらう

冬の窓小鳥のむれに癒やされる

寝屋川市 太 田 とし子

放り投げる賽銭怒る神もない

コーヒーが冷めてもさめぬ二日酔い

鬼も内福もうちなり小家族

叱つたり褒めたり家族ややこしい

羽曳野市 酒 井 一 壺

まさかなと思いたくない思わない

飼い主で運命決るベツトたち

まだ生きているのですかと僕のこと

花の駅逢うてはならぬ人という

東大阪市 北 村 賢 子

羨まし思えば負けたことになる

ひかえめに見え そうでないカスミ草

なにくそと思う心が這い上る

人波を抜けはつとする通り抜け

藤井寺市 中 島 志 洋

待たされてやつと気付いた四月馬鹿

おみくじの女難の相に北叟笑み

隠居部屋静かすぎても気にかかり

才女よりいつも陽気な嫁がよい

八尾市 村 上 ミツ子

慎重に投げたボールがかえらない

ぬけ道があるから楽をしたくなる

いのちの坂が急に険しくなってきた

インフルエンザひとに移すと治るかも

大阪府 桑 田 ゆきの

バカの壁読んだ読まない騒がしい

告げ口に良妻賢母の顔になり

ちぐはぐの話頷く日向ぼこ

天神の牛黒光り知恵もらい

神戸市 池 田 善 守

メール慣れ面と向かつて話せない

福を巻き縁を切らずに丸かぶり

世界中有害ですよとタバコ売る

一字でも直筆添える年賀状

伊丹市 山 崎 君 子

花暦ひとりの部屋を温める

モナリザと同じほほえみ気にかかる

今日立春 剪定終る衣替え

八十年のドラマ ハッピーエンドと書きましよう

三田市 久保田 千 代

虐待に母の神話がくずれ去る

腕吊つて五体満足真に知る

喉仏動いて我慢のいろが見え

少しだけ嘘がばれてる軽い咳

西宮市 秋元 てる

臺灣の文字なつかしい台北駅(旅 2 句)
たどたどしいがガイド頑張る日本語

父帰る開口一番母さんは

受取れる自信はないが預金する

西宮市 刈田 泰司

吹けば飛ぶ椅子で定年近くなる

翔び過ぎへ夫の携帯持たされる

青い青い抱負がとても頼もしい

飛びついた話は金の要る話

西宮市 亀岡 哲子

百円がうれし大根ずつしりと

鬼の役終りベランダ星仰ぐ

公民館へ通う地蔵のおわす道

男のシャツ大きく干して二月かな

西宮市 緒方 美津子

言訳を背負い日の丸イラク踏む

定年でさえる講釈鍋奉行

旗色を読むかのように逃げる猫

妻の愚痴いつもノイズと限らない

西宮市 長谷川 淳

群衆は誰も彼もが大学出

友はみな九段で神になっている

孫からの年金のようお年玉

イラク派兵勝ってくるぞを思い出す

西宮市 坪井 孝一

今年もう日記ずさんになりかけた

人間を磨くになんと長いこと

掌の汗をロボット奪い取る

野心など滅相もないお父さん

姫路市 古川 奮水

潮騒のなぎさ相応の家建てる

金品が貯るとケチがひどくなる

鬼は外祖母焙烙で豆を煎る

東北東恵方へ無心寿し齧る

兵庫県 大谷 幸次郎

二人して敷いたレールに子が乗らぬ

ライバルの意見そのままでは吞めぬ

分け前が決ればすぐに動き出す

湯搔かれて蟹の目ぎより湯気の中

10月10日
(日曜日)

川柳塔創刊八十周年記念
川柳大会並びに第十回川柳塔まつり

於 アウィーナ大阪

本社
4月句会
(4月7日・水)

四月から本社句会の開催時間が午後
五時半から、出句締切午後六時半と
なりますので、間違いないよう
注意して下さい。

自選集

旅それは僕の展覧会の絵だ

橘 高 薫 風

玉ちゃんにもはるウララにも春の水
句碑までも父ライオンの形して

散るさくら如何にかいるやビンラディン

水壺を頭上に爆薬を運べ（アフガンの女）

西 村 早 苗

呼び声にひと鉢を買う春の色

冬眠がフツと気付いたぼたん雪

独り居のテレビ相手の冬苺

マフラーの色と明るく春の彩

つるつるの道です娘よご用心

仁 部 四 郎

駅伝の人も見ている好きな旗

ジョギングに娯楽の人と義務の人

小走りで去った議員のやせた影

ケータイで走りながらの敬語かな

走り抜けた暦に手抜き一二枚

和やかな俺の老後だわが天下

会員募集自己を無視したボランティア

キックイン伸びるゴールの網深く

倅せは医者智者福者の友三者

私は凡人しかし死に方知っている

波多野 五楽庵

五線譜に悲曲一行涙ぐむ

淋しげな日影がついてゆく背中

時代考証になつて来そうなボクの顔

西に友 東に友の花便り

結んで開いて手を打って夫婦愛

藤 村 女

小さな庭に都忘れの花開く

白い物白く洗って満ち足りる

葱坊主 蝶を迷わす背くらべ

漬物石に母の歴史の愛がある

百度石 古い女が積む願い

芳 地 狸 村

節分の豆まきスターの揃い踏み

タレントの豆まきうける寺舞台

甘酒が今年も温い節分会

節分のひいらぎ売れに売れている

節分に泣いて笑った福と鬼

野 村 太茂津

宮口笛生

いくらでも金有るように孫思い
自転車に乗るのも怖い八十路坂
三寒四温つばきの花が咲いてくる
JRになつても汽車の音残る
SLで駆けたなつかし駅線路

森下愛論

疑心暗鬼少し器を広げよう
ひとり言亡母の余韻と図を重ね
残り雪解かす情欲の残り火が
老化する焦りも捨てて長い日々
焦燥も反省もなく檣山へ

八木千代

冠を沼には落とさないように
沼に墜ちたら冠だつて泥まみれ
境界線の向こうが沼であつたとは
なぜ沼を這うの 浮草だつて咲く
月のふりして沼の藻を照らしたい

八十田洞庵

美人より心優しい嫁選ぶ
予告なく桐ひと葉落つわびしさよ
味方だと飲んだ酒だが仇になる
反骨の血を継ぐ父の塔まぶし
師弟とは血を吐く思い芸の道

両川洋々

プロポーズすると雪おんなが融ける
ヤセ葉いるほど地球飽食だ
影法師あなたの夢は何ですか
春風がハートをノックして回る
火ダルマの背中は妻にさえ見えぬ

阿萬萬的

四面楚歌鬼にも見える他人の目
逃げる訳ではないが歳には逆らえず
歳だから一歩退つて守る線
過去のこと忘れなさいと落椿
ささやかな生きがいまずい句を綴る

石川侃流洞

アパートの窓は元気な鬼の豆
ああ父子何と似ている無一文
アリコからいいことずくめ聞く米寿
御神酒として焼酎やがて胸を張る
匙投げた医者を見返す煎じ薬

板尾岳人

咲くサクラ母に知らせる九十九折
お母さん今年もサクラ咲きました
母にだけ恋物語話そうか
一生涯エキゾチックな母の恋
母さんのお箸の先にあるお洒落

奥田みつ子

荒海も楽しからずや小さき舟（祝「川柳塔のぞみ」発会）
遠き人の魂とかす鈴を振る

春一番 信じることのむずかしさ

如月の空 冬でなし春でなし

春を待つ二月の風はうすピンク

河井庸佑

難題を投げ掛け試される度量

途中下車する用がある無人駅

我を張って互いに退けぬ丸木橋

青い鳥探して森へ迷い込む

同じ穴簞つたとじへ自己嫌悪

川島 諷云児

奔放に生きるのもよし余命表

惚けまいと浮世の風に立ち向かう

人脈も金脈もなしマイペース

馬の耳です念仏も忠告も

七転びころんだままでもう傘寿

木村 あきら

春爛漫七彩の風吹いてくる

雑踏を抜けると碧い空がある

ひたすらに農を守って七十年（八十九翁）

檜山の道に古武士の山桜

落ちてなお燃えて止まない寒椿

工藤吟笑

菜の花も咲いて遍路の笠揺れる
老人ツアー ガイドのマイクだけ頼り

騒がせて未練なく散る桜花

国訛り乗り合わせてるローカル線

充電はしたがエンジン掛からない

黒川紫香

仁王さま春の陽射しへ仁王立ち

散髪はついでに寄っただけの事

雑談へ焚火ときどきはね上がる

よく喋る女と歩く交叉点

陽だまりに爺ちゃんが居て曾孫居て

小西雄々

吹雪く夜はボトルと止まり木で話す

炎の橋をいそいそ渡る日もあった

戦友会 食後の薬わすれない

蟹の呪詛 泡吹くたびに消えていく

ライバルを倒す矢尻を磨いとく

小林 由多香

丁重に添え書きをして欠にマル

この頃の子供制帽ないのかな

奉加帳右にならえて書いておく

旗日にはせめて日の丸ひらめかせ

数字には強いが儲けてはいない

齊藤 嘉

蹟いた石が教えた人間味
花の種吊るして目下冬眠中
大物の顔だ母校の雪達磨
ひとつ消えひとつ生まれていく邪心
取り敢えず陽の差す方に芽を伸ばす

田口 虹汀

命ある句をと路郎師言われたが
みの一つ持たぬ心を詩に託し
死ぬまでに命ある句が作りたい
名誉主幹に命ある句を見て欲しい
方円の器に一句浮かべたし

竹内 紫 鏑

留学で知る唾吐きの国
発がん性だよ伝統の炉材
若いころ来た机下の脇付
深夜ラジオは懐旧の箱
リサイクル油でかつこよく発車

田中正坊

大義なき戦を支援する暴卒（イラク派兵）
自衛隊 戦場へ征く肅々と
誤った出兵の過去忘れたか
赤紙のように入院通知来る（検査入院）
一日が日課通りに過ぎて行く

玉置 重人

あきらめたときからうどんぬるくなる
孫よりも曾孫へ移るキーワード
ともだちが真面目で話はずまない
捨て猫に訴えられて目をそらす
いのち響かせて明日を考える

恒松 町 紅

酒の罪名入りの靴を間違える
知らぬ子が挨拶くれる通学路
人並みに生きて仏の灯に出逢う
少子化という淋しきで囲む鍋
老いてまだ酒も花にも手を伸ばす

遠山 可住

他人までわくわくさせて遺産分け
こともあろうに砂漠に生きているいのち
半目の勝負もプロの十時間
全自動二人になった洗濯機
絵馬に散る花にも春の運不運

土橋 螢

反骨の骨が一本折れている
無職とは仕事をしない人のこと
背に残ることはを夕陽からもらう
悪人を善人にする散歩道
その色の匂いを忘れないでいる

春の吟行会で案内

川柳ふうもん吟社

日時 4月25日(日)

午前9時30分より受付開始

会場 鳥取砂丘・砂丘会館(リフト発着場)

TEL 0854-22-6835

参加費 3000円(昼食・酒ビール・発表誌・記念品含む)

兼題 「沈」 石谷 忠良 選

「ラブラブ」 土橋 螢 選

「助太刀」 竹内 朋恵 選

「あずる」 前田三津子 選

因幡方言(苦しむ・まごつく)

「自由吟」 平木 公子 選

席題 「 」 埴 寛子 選

各題3句吐、投句締切 午前11時30分厳守

表彰 総合10位まで呈賞

傘寿未だ老いず食欲旺盛に
イラク派兵賽投げました小泉さん
寒気なお酷し大寒やと気付き
学歴のついでにテニスまで詐称
冷え込みも酷し今年の大寒波
泣きながら食べた日があるふかし芋
筍と鰹のたたき春旨し
お水取りおや紋白蝶もう来てる
雑草の意地これでもかこれでもか
水金地火木土天海冥セドナちゃん

河内天笑

西田柳宏子

第15回 時の川柳交歓川柳大会

日時 5月2日(日) 10時30分開場

会場 兵庫県民会館9Fホール

JR/阪神元町駅西出口徒歩10分

会費 2000円(記念品・発表誌贈呈)

昼食は各自(地下に食堂あり)

兼題 「ヒント」 西宮 小山 紀乃 選

(各題2句) 「苦手」 弓削 貞岡信太郎 選

締切12時 「爪(つめ)」 大阪 西出 楓楽 選

「うしろ」 竹原 小島 蘭幸 選

「野」 神戸 佐藤 純一 選

「声」 東大阪 片岡 湖風 選

「雑詠」 西宮 小松原爽介 選

特別課題 「食べる」 神戸 武田 森茂 選

講演 「現代語を考える」 久保田半蔵門

賞 知事賞、市長賞他(兼題合点11位迄)

懇親宴 5000円(当日受付 申込順60名迄)

◎当日、時の川柳作家賞他の表彰も実施

主催 時の川柳社

後援 兵庫県/神戸市/神戸市教育委員会他

第5回 井笠川柳会浅口大会

とき 5月22日(土) 締切 午前11時

開会午後1時 閉会午後4時

ところ 鴨方町健康福祉センター

JR鴨方駅より徒歩10分

課題と選者 { 泉 比呂史(加古川) } 共

第一部 「雲」 { 貞岡信太郎(久米南) } 選

(当日投句、2句出句) 小林晋太郎(鴨方)

特別課題 当日発表 高木 勇三(笠岡)(1句)

{ 小松原爽介(西宮) } 共

第二部 「水」 { 小島 蘭幸(竹原) } 選

(事前投句、2句並記) 花田 貫一(鴨方)

お話 小松原爽介

会費 2000円(昼食付、発表誌呈)

出句 第二部(事前投句)用紙自由

締切 4月30日

住所・氏名・電話番号・所属柳社

欠席投句 1000円 大会誌(入選句)後日郵送

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡507-68

井笠川柳会 電話 0865-63-5858

句碑除幕式 5月22日 午前11時 古城山川柳公園

主催 井笠川柳会 後援 岡山県他



板尾岳人選

府中市 馬場利子

八尾市 松葉君江

正座して仏と語る母の春
落雷に父のドラマを裏返す
ざくざくと未練断ち切る米を研ぐ
どの色を溶いても春はあったかい
肩車見えないものが見えて来る

三田市 石原歳子

達筆の葉書を少し嫉妬する
無紫煙の空気おいしい夫留守
貫禄をつけて見下ろす鬼瓦
いい知らせ母は電話へおしぎする
安心をさせる小さな嘘も要る

長岡京市 山田葉子

ボール来る位置にピタリという男
五合目で味方数えている男
いるだけでいいと言われている男
運も実力男強気に舟をこぐ
あかね雲明日の空をのぞかせる

ささやかな夢で老化を先のばす
一枚の葉っぱに我が身だぶらせる
自慢より失敗談に湧く拍手
心ないひと言溝を深くする
追ってくる老化に甘え許されぬ

大阪府 前田ゆい

凜とした孤高にも憂 松の枝
枯れたかに見えたが小枝から芽吹き
天を突く梅の新芽に負けられず
新聞のニュース右寄り左寄り
延命は無用と告げて気も軽い

吹田市 木下敏子

生きている限り先祖に手を合わす
背伸びして渡った橋を振り返る
姑に合わせ渡った橋の数
やりくりの橋も渡って来た夫婦
欠点を隠すスプレーふって置く

和歌山市 喜田 准一

存在を示すつもりで蒸し返す
すれすれの合格点と見て妥協
ふところに逃げ口上を用意する
欠点と見ずに長所と取るゆとり
切りのよい数字並べて行き詰り

田辺市 大峠 可動

恍惚の境地 射たれることに馴れ
どの顔もフィクションがありみな他人
二枚目の舌は妬心と堕ちてゆき
郷愁も思想も僕の絵は茜
一点の大地ほろほろ落の臺

倉吉市 酒井 美美子

いい人と逢った街角のときめき
古セーター過去の栄華が捨てられぬ
永すぎた青春セーターも伸びちゃった
大根足でしっかり大地踏みしめる
結び目が解けて温い血が通う

米子市 足立 由美子

泥かぶる覚悟もできている帽子
丁寧に昨日の泥を拭いている
饒舌と無口で馬の合う夫婦
頼もしい大樹の雪受けている
街も人も無口になって黄昏れる

米子市 猪森 スミエ

ハリポッター読む子におやつ聞こえない
禁煙を余儀なくされた子沢山
おらが春おらが村だと過疎の猿
遺産分けはじめましてと言う顔も
おしゃべりと無口に橋を架ける人

鳥取県 福西 茶子

正論を吐いてお酒が胃に澱む
鍋囲み昔ばなしの出る囲炉裏
終章は七福神の舟に乗り
穏やかな顔で国盗り策を練り
喪が明けた日から口紅濃いくする

鳥取県 平木 公子

好いことを耳打ちされてから温い
春近し風が耳打ちして通る
親になる資格試験も要るようだ
ゼロからの出発夢は無限度
特別な春になりそう梅の花

出雲市 小豆沢 歌子

正直でころころ転ぶガラス玉
わだかまり解けてゆつくり傘をさす
陽炎を浴びて迷わぬ花の芯
美しい夢を見ている壺の中
じつくりと打ち明けようか冬の月

鳥取県 武 島 ちよえ

錆ついた私を今日も研いでいる
介護する心も爪も丸くして
耳寄りな話仕入れた美容院
繋いだ手離し力を試される
あれに良いこれに効くよが多すぎる

島根県 福 間 博 利

派手を着てこらでちよつと翔んでみる
ものごとに裏があるからおもしろい
八十二まだこれからと酒一合
叱られて転んで角がとれていく
過去形の話が好きな歳になり

岡山県 矢 谷 富士野

濡れ衣を着せられて待つ春の雪
鍵かけた心によどんでいる疼き
よくはずむ妻の手鞠におどらされ
我家にもオアシスがあり湯があふれ
道ならぬ恋が切れない裁ち鋏

今治市 野 村 清 美

仏壇へ朝一番の熱いお茶
ふんわりと猪口一杯で雲に乗る
出入口間違ひ焦り出す日暮れ
春を描く色とりどりの絵具皿
淋しくて並んだ人の列に居る

今治市 塩 路 よしみ

花に問ひ花と遊んで白昼夢
人間不信扉素直に開かない
薬屋根へ哀しいまでに桜舞う
泣き事を言うから虹は遠ざかる
群青の海にこころは透き通る

愛媛県 花 岡 順 子

風船が膨らむような恋だった
私だけを見ていて欲しいそれが愛
初恋の日記に鍵を掛けている
うとうとと夢を見ていた掘り炬燵
テーピング老化を止めてくれなにか

横浜市 川 島 良 子

天狗にはなれぬワタシの低い鼻
土壇場で慌てふためくのはオトコ
本番で試されている肝っ玉
牛井の最後の客を待つカメラ
雪像のいのち短かしシヨベルカー

京都市 清 水 英 旺

雲水の経 凍てたまま遠ざかる
満月を薄墨雲がなでてゆく
踏みしだきたい誘惑の霜柱
時として心に鬼が顔を出す
北向きの鬼瓦にも梅かおる

大阪市 升 成 好

不器用で右へならえが出来ぬ僕
適当というむつかしい匙加減
上品なマナーを喰うカニ料理
妻を撮るすこしピントを甘くして
コンニャクに同情のない針供養

大阪市 尾 崎 黄 紅

忘れたいことは忘れず憶けてくる
返せない恩だけ増えて老いの日々
連想はよそう魚を捌いてる
竹馬の友とが恋の諍いに
敵の敵を味方に敵を討つ手段

和泉市 横 山 捷 也

冬型がくずれて妻をさそう道
仲裁を終えてきつめの眉を消す
妻の肩払った雪があたたかい
キッチンをやめるほど夫料理上手
美人の湯妻には一寸遅かった

泉佐野市 稲 葉 洋

線どこで引こうか老いという境
もう無理をするなど影に諫められ
思ひ出の荷を振り分けて老いの旅
モノクロの季節に凜と実南天
財成せば名も欲し人の欲尽きず

岸和田市 雪 本 珠 子

幸せも愛もほどほど今が良い
妻が居るただそれだけで温かい
片想い さ迷う落葉追うような
恋終り海に涙を捨ててに行く
夢と夢競い合つては消えていく

寝屋川市 岡 本 勲

母さんに急所にぎられ借りた猫
百歳までは守りたいなあこの命
写真帖めくると母が生きている
供養です煩惱すててする写経
達磨にも言いたいことがたんとある

富田林市 稲 川 恵 勇

順調にボケが進んで憚らず
せつかくのへそくり妻が差し押え
親に似る子のいたずらを叱られず
改革で狂う老後の羅針盤
若づくりうっかり干支で引つ掛かり

藤井寺市 喜 島 芳 江

目覚しが今に鳴るかと思えて待ち
万札にゆつくりしてと無理に泊め
親のスネかじったくせにもろい骨
しっかりと躰はしてる茶髪ママ
元気かと葬儀屋名刺置いて行き

藤井寺市 鈴木 いさお

目を伏せて軽い胃炎と母に告げ
微笑んでわが子の嘘を受け入れる
譲られた席が僕には狭すぎる
夫にもスリーサイズは内緒です
平均へまだ五年ある五年ある

八尾市 西川 義明

阿と畔で四季の山坂越えた今
病むイラク微熱が続く星条旗
愛一途歳の差越えていろはには
初夢は拉致の家族の揃う顔
定年後妻に従う日が多く

八尾市 寺川 はじむ

恥じらいも包み込んでる青テント
大丈夫許した後で痛む傷
力づく奪った恋の濁り色
取りたての野菜に自慢添えてくれ
昔ベル今ケイタイに縛られる

大阪府 畑中 節子

いたわりの言葉頂くほどに老け
土が好き地下足袋が好き春を待つ
好きなだけ持って行けばと自家野菜
もう一つエンジン欲しい登り坂
日溜りで主語なき会話風笑う

神戸市 両川 無限

遣伝子に組み込まれてる僕の運
大胆に生きる男のにぎり飯
勝ち戦 信じて敵の中にいる
主婦という無職がでかい顔をする
悶々と恋の方程式を解く

尼崎市 桑原 東園

身障を越えて阿畔の呼吸合わす
午後は雨相合傘に気が弾む
戦争の絶えぬ地球を観る火星
杖をつく足に落葉がまといつく
ほどほどにピンチもあつて沸く元氣

伊丹市 延寿庵 野鶴

川底の石は流れに背かない
じつくりと話せばわかる親子酒
知恵の輪が素直になれと笑ってる
生きざまをそのまま刻む笑い皺
身の丈の暮らしへ少しジャンプする

奈良県 江波 正純

まだ夢を残る命で追ってみる
この部品修理で持つと医者が言い
でこばこが合うて二人で家族する
たくさんの恥ご破算で生きてきた
迷惑のかけない恥はよしとする

京都市 三宅満子

まず葉忘れぬように旅支度
三寒四温綱引きして冬と春
貧乏神見返してやる空元氣
青汁を飲んでスタートさせる朝

大阪市 三浦千津子

嘘ひとつ私の夢を遊ばせる
平凡という幸せを受けている
不器用を夢の中まで仕切られる
自尊心ハンディキャップは欲しくない

大阪市 伏見雅明

絵日記にちよつぱり見栄が顔を出す
趣味の欄大物釣りと書き加え
地球儀の軸を氣取った星条旗
主治医から許し出た夜の酒の味

大阪市 池上清治

寒桜もう満開と故郷便り
多すぎるまさかまさかのニュース種
古卵産みたてとして売る度胸
学歴は要らぬ角栄さんを見よ

大阪市 寺井弘子

本命の積りが義理にされるチョコ
今年こそと誓った減酒初めだけ
笑わせるピエロの素顔淋しそう
痛いところ突かれ口数減ってゆき

池田市 多田契子

記憶力良すぎて長い無駄話
叫びたい孤独の顔のある鏡
図太さを買う必要の独り身も
持て余す嫉妬なだめる風の夜

和泉市 小坂凡英

振り上げた拳の論理聞かないで
温情だらうが余計な助け舟
いい噂尾鰭を付けて流しとく
相好を崩して噂聞きに来る

泉佐野市 備後三代子

馥郁の香りに酔うて梅の山
片寄って通る人待つ路地時雨
母の忌にあんなこととかこんなこと
すらすらと名が出て今日は冴えてるぞ

大阪狭山市 羽田野洋介

貸す耳は持たぬと顔に書いておく
自分には振りかからぬとみた油断
氣配りが過ぎて自分は乗りおくれ
今年こそお頼みます文殊さん

柏原市 伴洋子

退職金妻には妻の胸積り
常識の枠が歪んでいく日本
胸すこし開けて颯爽春の彩
SOS地球の喘ぎ地を揺する

河内長野市 木太久 正一

誕生日妻とふたりの握り鯨
年一度雪見障子を上げて見る
鬼は外鳩の好きそな豆を撒き
立春の部屋飾りなる福の面

河内長野市 坂上 淳司

慌て者太く短く逝くなんて
国技館世界の相撲見本市
痛い右庇い左もご同役
諍いを上手に裁く大家さん

河内長野市 印藤 智子

三猿を並べ寂しい年女
また三時夫と無言のお茶タイム
コルセット硬くて心かたくなる
老いてから亡母の教えを実行す

岸和田市 土橋 房枝

亡母の過去知りたい歳になりました
誕生の秘密を知って貝になる
天気予報子の住むところも気に掛け
病む夫の無理を少うし聞いてあげ

堺市 大久保 伸子

有頂天昨日とちがう雲みてる
遺言を書いて幾年生きたやら
丁寧な言葉の裏にある刃
余生という未知の次元へはばたこう

堺市 河盛 龍三

失敗は辛すぎるけど明日を待つ
飛行雲 先は野望か故郷か
内輪もめ見ている母の壁写真
一步先見えた昨日が遠ざかる

堺市 荻野 像山

千人針持たせイラクへ出しますか
寝付かれぬ夜はこっそりワンカップ
目覚ましの鳴る幕がない定年後
オイオイと肩をたたけば他人の妻

吹田市 二宮 栄子

甥っこがへたなオレオレ言うてくる
九州の風邪を土産に連れて来る
手は貸すが口は貸さない事にする
この町に惚れて根付いて出られない

高槻市 安田 忠子

機内食三回食べて目的地
テムズ川朝霧遙かウインザー城
ゴッホの黄にせと本物見て迷う
五千年経ってミイラでさらされて

高槻市 大崎 侑子

年ごとに義理チョコくれる人の減り
祝日に旗出す夫照れもせず
白旗を先に掲げた妻の勝ち
衣食住足りて刑務所出たがらず

高槻市 瀧本 きよし

招き猫不況風には両手上げ

やりくりの苦労知つてゐる割烹着

古希を過ぎ過去贖罪のボランテイア

穏やかに人見る眼鏡持つてゐる

高槻市 田中 初恵

香焚いて二者択一を亡夫に問う

大伽藍小さな自我を捨てられず

晩節へ仕切り直して塩を撒く

友が来るモザイクかけた愚痴さげて

羽曳野市 永田 章司

うっかりで済まなくなつた昨日きょう

見なくても今は書けますイラク地図

パラサイト ブランド物で身をかため

デジタル化侘と寂とは相入れず

羽曳野市 福田 悦子

だまされてだましてよしのエイプリル

重いかなあ期待の詰まるランドセル

心音を聞くと絆が強くなる

終章の日まで弱音は吐きません

羽曳野市 森下 一知

地に落ちた父権に家族まとまらず

ワープロを打てない僕はエンピツ派

涙腺の蛇口が緩む定年後

頂点の椅子ヘクラスのはぐれ者

枚方市 莊司 弘之

寒風をものともしない冬木立

この寒さ春が来るから耐えられる

イラクにも贈つてあげたいはるうらら

挨拶し別れて思い出す名前

枚方市 小川 良吉

愛熱く語り明かした青春譜

大荒れの成人式に袴泣く

三猿の教えも死後に世も変わり

話好きあつと気がつく自己顕示

藤井寺市 吉田 喜代子

玄関に菜の花いけて春を呼ぶ

老猿は見ます聞きます話します

悩みなどとくに無くて白髪増え

還暦に赤い靴 靴 誘い合う

藤井寺市 西村 栄一

ある程度ショックが無いと惚てくる

花束を受け取ってから老いていく

パーフェクトだったが一球に泣く

菜の花もさくらも試す草木染

藤井寺市 若松 雅枝

油断して負けたら鬼も笑うだろ

私でもきつと出来ると負け惜しみ

好物はあとから食べる癖がある

他所の子もみんな大事な宝物

箕面市 寺井柳童

たて縞に着飾りでんと冬將軍
うすれいく記憶に自分史追いつかず
薬飲むために食事をとっている
嫌なことあつて生きがい見えてくる

八尾市 平川幸枝

持て成して居心地よろしい福の神
スッピンを盗み見るよな初鏡
後ろめたい罪の意識の革を着る
山緩む雪の帽子を脱ぐように

八尾市 田中トシエ

風通し良くして鬼と向かい合う
先送りして問題をこじらせる
お裾分け容器行ったり来たりする
嫁が来て本音建前同居する

八尾市 脇俊子

日溜りは春の匂いをそつと置き
大波をかぶった年をくぐり抜け
ひと雨で春の季節をノックする
春なのに心が寒い不況風

八尾市 中島春江

梅一枝夫に供えて喜寿ひとり
健康器具近頃ヒマとほやいてる
人の目を気にせず暮らすことに決め
車間距離とつてご近所仲がよい

大阪府 神野千恵子

懐かしいエイプリルフル軽い嘘
丸くなる歳と言われて角が立ち
繋いだ手その温もりに心解け
ああ言えばこう言う人のいる茶の間

大阪府 高木道子

他人の幸うらやむ我に花を買う
旧姓で呼ばれ私を取りもどす
助手席が口で運転してくれる
オレオレに氣イつけなはれと母米寿

神戸市 田中章子

失敗がチャンスになる日いつか来る
夫から大事な話正座する
太古より続くリズムが血に流れ
待つというしんどいしんどい親ごころ

神戸市 山田婦美子

厳寒に耐えてやさしくなれる春
陰口を聞いて黙秘の地獄耳
無駄骨を折って本物見えてくる
普段より目線をかえて見る工夫

尼崎市 河津正治

盃の底に真実見え隠れ
マジシャンの手つきで母は料理する
盃を伏せて女将は酔ったふり
玉虫色の答えを嫌う砂時計

川西市 井本 清山

啓蟄や水虫うごく足の裏

果たし状のように納税通知くる

年金で小さい春のバスツアー

居酒屋で異動のはなし聞く四月

三田市 堀 正和

紙一重だったと思う不合格

政治家に似合わぬ白の胡蝶蘭

生返事ばかりしている冬籠り

踏まれても踏まれても咲く花の意地

西宮市 片山 忠

他人から見れば幸せ者らしい

大人からなにも学べぬ蔑の群

病んでから先ずは合掌するごはん

鬼畜でも子供は親を選べない

兵庫県 安達 厚

自力より運だと思ふ喜寿の春

ようこまで持ったもんだと喜寿の春

生かされて身の引きしまる喜寿の春

大型に追われて道を譲る喜寿

奈良市 成橋 邦柳

五種類の薬並べて元気です

酒やめず食前食後胃腸薬

夢を追ひ輝く老いを生き抜くぞ

福は内孫が豆まく鬼は内

奈良市 乾 春雄

よろこびの水引きかける母の指

清貧に生きる軍手の泥まみれ

男の胸に女の知らぬ地図がある

土壇場でまだ冗談が出る救い

奈良市 矢野 良一

建前と本音飛び交う永田町

禁煙でへそくり貯めて酒を飲む

吹雪く夜は八代演歌と酒がいい

鬼鳴いて春はそこまで散歩道

橿原市 藤 永実千代

棒読みのように聞こえたあざみ歌

自己主張ベアルックには程遠い

悉く意見潰され貝になる

自負心が隠し切れない鷹の爪

奈良県 南海 美知夫

牛どんで育って来たと言う男

生きている不思議を星と語り合う

ない袖は振れぬと国民負担増え

オレオレの他人の孫に貢いでる

奈良県 藤村 重之

仕事終え仮面はずして赤ちようちん

聞き上手許せぬこともそつと受け

山頂で甘露と知った水の味

うっかりと乗ってしまった口車

宇部市 高山 清子

逆転が出来ぬ余生はマイペース
穏やかな口調に潜むある予感
歩には歩の進む道あり意地があり
不況の世貧乏神も疲れ果て

愛媛県 安野 かか志

写メールの裏で悪魔が乱舞する
日溜りの風へ目覚める露の臺
ストレスの高さで浮かぶアドバルーン
おんぼろの木馬が眠るおもちゃ箱

愛媛県 黒田 茂代

いつまでも心閉ざした冬のばら
たまの雪きれいきれいと言われ
まだ生きたる気概の髪を染め直す
詩は文字で飾る素敵な心の絵

高知市 伊野部 和江

旅立ちを待ち侘びているおひなさま
平凡な暮らしに潜む青い鳥
電話から元気を貰う今日の鬱
温い鍋手抜き味の混ざってる

南国市 小原 圭二

退院の日に家中の灯を点す
来客もないのに家を飾る妻
戦さえねば日の丸すがすがし
年金を脱税したいけど出来ぬ

高知県 百田 幸

馬鹿にされ馬鹿になりきるむつかしさ
物忘れ元の位置まで聞きにゆく
みかん花咲いて空気の甘い里
そうだった忘れていたと聞き上手

高知県 桑名 孝雄

雑菌の免疫持っている強み
骨太と書けば安定感がある
シナリオが切れたところで試される
読み書き算盤ダサイが僕の学道

高知県 貞岡 佐紀子

いい夢をみたい蒲団を暖める
白内障心の窓を手術する
寝たふりをして聞き流し乱を避け
言い訳はすると言ったつむじ風

北九州市 岡田 幸生

スーパールの目玉へ主夫の市場籠
ネクタイを捨てると明日の荷が軽い
世渡りに笑顔の仮面隠し持つ
あの時の君の一言から虜

唐津市 坂本 兵八郎

壺の値のゼロを数えて褒めている
青春のテニスに支えられる古希
同期会時計のぜんまい巻いている
停年を前のピエロが飲む怒り

シドニー 三谷 たん吉

十万票サギがばれてもまだ議員
借り衣裳あれこれまぜて花嫁に
馴れきったいつもの道は回り道
ひとりきりクシャミのついでに何か言う

シドニー 坂上 のり子

五歳児に私の英語直される
安売りと聞けばあるのも忘れ買う
アイディアがないかないかと辞書を繰る
武士道の心残すは桜だけ

メルボルン 藤原 ポン吉

日の丸は敵か味方か親方か
奥の手は使う頃には終つてた
日の丸をかき間違えて的になる
右左訳もわからず無我夢中

札幌市 三浦 強 一

いんげんの五人兄弟みな元氣
紫の高貴な衣まとう茄子
ブロッコリー パンチパーマのお兄さん
ジャガイモのその実直な貌が好き

青森県 富士 トキ

立春を吹雪で消した北の国
干葉汁昔の家族顔を出し
笑って泣いて泣いて笑って人生か
暮れに兄明けて義弟の喪に服す

秋田県 湊 修水

除雪車の音うるさくもありがたし
吹雪く夜雨戸をたたき雪おんな
割り勘で損ばかりなり総入歯
卒寿すぎなお燃ゆるあり紅椿

日立市 加藤 権悟

出稼ぎの父の想いは雪のこと
春一番国境線のない黄砂
完走はしんがりでいい父の汗
晩学は亀の歩幅で行くと決め

東京都 小川 賀世子

強がりの仮面も少しきつくなる
白地図にまだまだ旅の続き描く
余生まだ明日の彩を子と紡ぐ
孫五人我が家の枝葉芽吹いてる

東京都 やまぐち 珠美

癒えていく洗濯物が干るように
渡世の掌かゆいところを撫でてやり
天窓の高さの悔いを持つている
恋が去る銀河に墓碑を立ててやる

東京都 井上 つよし

出陣はビール打ち上げ会は発泡酒
ふんわりと干した布団で春の夢
パソコンを使えぬ手書き感謝され
落着けと悠々開く自動ドア

武蔵野市 亀井 円女

おおきにを何遍言うても足りまへん
翼下さい亡母の笑顔をひと目見に
老いてまだたつぷり夢や好奇心
親に似て娘も泣き虫で笑い虫

横浜市 巖田 かず枝

目標はマザーテレサという介護
商談の前に菌磨き靴磨き
血圧を下げる一役担う犬
人間の方が恐いと鬼が言う

横浜市 金森 徳三

暖冬の油断を笑う大寒波
盃を伏せて味わう山椒の実
床の中ラジオ体操聴いてます
国会は蹴りたい背なの多い椅子

新潟県 高野 不二

重役になってるらしいという空き家
オレオレの被害強盗よりひどい
偉そうにイラク派遣に反対し
オレオレが俺にも来たと自慢する

岐阜市 平野 あずま

紺碧のインキ続編書き綴る
ストッパーとなつて余命に立ち向かう
矢の尽きた男が握る発泡酒
口下手がケイタイだけは離さない

尾張旭市 三浦 きぬ

三年日記無駄かと思いつつも買い
亡夫への土産そろそろ整えて
節分に撒くも拾うも一人なり
あの時が初恋だったと言われても

和歌山市 坂部 かずみ

リフォームが人も改造してくれる
拘りがまだ多すぎて進めない
童謡がやさしい顔にしてくれる
人間もガソリン切れて走れない

和歌山県 寒川 武

長生きをしたくて医者へ行くのです
妻という宝をとんと忘れてた
食べ頃に賞味期限の来るソース
赦す気になった夜から良く眠る

和歌山県 村中 悦男

平凡な日々を作ってくれる妻
潤滑油ほしがる腰と起床する
誠実を表わしたくて楷書がき
冷たさは冬大根の白さかな

鳥取市 近藤 秋星

鶯も歌える春を待っている
勝利して花の四月を迎えよう
眠られぬ星の溜息聞いてから
老いの身に鬼より怖い寒気団

鳥取市 大坪 天涯

別離とはいっても悲しい風の中
そわそわとなにか話があるらしい
旅仕度したのになんで逃げていく
雪掻きは毎度のことさ里帰り

鳥取市 森 美智代

神様の前で大吉信じます
私流の筆順がもう直せない
サムライが世界を股に掛けている
オレオレの鬼を退治の桃太郎

鳥取市 横田 春名

セーターの編目奏でる友情よ
佳き話桜並木で打診する
恨むまい言い出しにくくペンを取る
四月馬鹿イラク戦争終ったよ

鳥取市 河田 のり代

カラオケに家族忘れる遊び好き
横着が楽に過ごせぬ風邪ごもり
冬の家昼寝て夜もよく眠る
亡姑の味習って忘れなつかしい

鳥取市 山口 千代子

我慢しろがまんがまんの一里塚
ああ美味いテレビ料理で唾を飲む
いい日和勿体ないと散歩する
たまの風邪主婦の休日かと思う

オンリーワンの猿に学歴などいらぬ

鳥取県 細田 裕花

つまずいて親の大きさふと思う
大胆な筆に心の彩をみる

悶々と悩みの種はよく芽吹き

鳥取県 藤山 弘子

猿まねを上手に利用生きる道

日替りの春の便りとにらめっこ

二代目と歯車あわせ生きる道

ボカボカと春の香りとお茶をくむ

鳥取県 吉田 弘子

耳うちの親子秘密が笑ってる

銀行へ引算ばかり印を持ち

血を分けた絆がやせて来る時世

仕舞風呂からだ全部で吐息する

鳥取県 山岡 久枝

冬抜けて出会う顔にも春の色

浮き沈みしてもやっぱり浮く花に

幸あれとこんぺい糖を買ってみる

何事も姉と比べる母がいる

鳥取県 岡村 孝明

服従に見せて裏では苦悩する
悪行は目立ち美点に知らぬふり
肉止める粗食に慣れて腹へこみ
難題が続く胸にはトゲ増える

鳥取県 岩崎和子

つき合えば深い所で皆善人
日差しな花々たちの応援歌
そよ風に心浮き浮き助手席で
軽装に足元強く土を踏む

鳥取県 竹森富久江

しのばせた香り淑女になつてみる
砂山に母を追憶して日暮れ
ふるりの橋だんに遠くする
若い日の夢をこぼした古畳

松江市 松浦登志子

喜んでうかれていたら輪の外に
裏の裏考え口を閉じる猿
強がりて交わり下手でひとりぼち
五十五で幸か不幸か母親似

松江市 山根邦代

今日は晴れ洗濯物も楽しそう
淋しいと言わぬ八十路の意地つぱり
意地があり頑固もあつて元気です
馴れている八十路の母の薄い服

出雲市 荒木英子

服などの中国製に追いつかれ
何時の間に八十路に迫る髪の色
熱爛で寒さを癒す水入らず
隙間風身を寄せ合つてラブソング

米子市 小塩智加恵

贅沢も飽きてきました鍋三日
老い二人男結びの太い糸
嫁の買う冷凍食に馴れました
髭面が揃ったサマワの自衛隊

鳥根県 菅田かつ子

ひよっこりと来て番犬に吠えられる
五十年合うてきました塩加減
どれ着てもお似合いですと服売場
Uターン都会の風を持ち帰り

鳥根県 毛利幸

ときめきを胸にしまつておしゃれする
中傷が私の胸に針を刺す
古里に昔の夢を置いて行く
心ない帽子が一人会釈する

鳥根県 松本聖子

宝石が萎びた指で独り言
水仙が春だ春だと咲きみだれ
春一番吹いて桜が喋り出す
顔色で心の中を見透かされ

倉敷市 撰 喜子

削られてたたかれ耐えている机
誘われるうちが花よと誘う友
バーゲンの肉は食べない血統書
母さんが素顔にもどる午前二時

わたくしと孫の成長反比例

和歌山市 根 田 よしこ

家事できるロボットづくり待ってます

カレンダー予定いっぱい風邪ひけぬ

和歌山県 森 下 順 子

柿の木も私も力つける冬

仏の花替えて私の誕生日

通りすぎる風が涙を消してゆく

和歌山県 辻 内 次 根

かくれんぼ札が一枚ある頁

良いものは良いと勅語も憲法も

集まった市民が横に押す車

鳥取市 岡 田 信 恵

子宝の新芽すくすく育ってる

ゼロ歳が大きな大人振りまわす

足鍛え歩いて食えて医者いらす

鳥取市 谷 岡 清 子

三猿を抱いて乗りきる夫婦船

介護するされるも老いの愚痴一つ

歩けない夫の景色は窓の幅

倉吉市 前 田 喜美子

肉弾を華と信じて散る恐さ

スリッパの音もはずんで退院日

仰向けの蟹は夢みて空歩く

馬鹿になる事も覚えて丸く住む

年寄りの目にも男の肉体美

スッピンを隠す帽子とサングラス

倉吉市 青 砥 菊 枝

階段の上り下りでリハビリを

地蔵さんに賽銭値下げしてしまふ

防衛庁大きな山が動き出す

米子市 池 尾 保 子

火と水が身体の中をかけ巡る

目も鼻も満足してる指定席

眉唾をつけても唾はすぐ乾く

鳥取県 毎 田 信 翁

早よ咲くと梅の蕾を家で活け

寒の鯉狙うがまだ顔見せぬ

閏月を抱いて一日生きのびる

鳥取県 竹 信 照 彦

空バケツだから大きな音たてる

みそ汁もつくれないのに嫁に行く

日本酒が処方薬よりすぐに効く

鳥取県 西 原 真 一

荒削りまだ考えが若過ぎる

餌されてふくら雀の輪が崩る

苦しんでやっと妥協の道閉ざす

鳥取県 西 尾 敬之介

浅い瀬を捜して渡る小役人

鳥取県 鈴木 一弘

三つ指をつかれて背筋寒くなり
大宇宙澄んだ瞳の奥にある

鳥取県 橋谷 静江

午後三時世間話がやって来る

私の持つて来る知恵は惜しまない

シッポ貼る今日一日の腰と脛

出雲市 加藤 スズコ

やさしい便り心安らぐ冬炬燵

命の灯神に預けて軽くなる

元気でずやる気の拳握れます

安来市 原 煩惱児

狭い地球テロの足音鳴り止まぬ

被害者が叱られている警察署

容疑者に頭を下げている監房

府中市 岩本 雅代

窓のぞく梅の蕾が春を告げ

色つやもあつて嘘つく人と住み

爪切って搔いた母の背手がぬくい

串間市 高畑 滝

ハプニング起らぬネタはポイと棄て

西風が嫌とも言えず襟を巻く

帰省して遺言ないかと墓磨く

長命の秘訣よく食べよく遊び

取替えた菌ブラシ朝の新しく

ありがとう自然にこぼれ皆笑顔

唐津市 岩崎 實

神様の話になると姉負けず

人間の言葉どこまで分る犬

咲き揃う花待ち遠い蘭の鉢

宜野湾市 杉谷 一栄

雨降ろうが渡つてみたい虹の橋

お茶でもと声かけられて腰をすえ

帰り道子犬と遊ぶランドセル

東かがわ市 向山 治延

ひとことの駄弁纏れの源となり

忠告を無視され川が牙を剥く

笑顔まで浮かべて眠る母の膝

今治市 渡邊 伊津志

雪しんしん黒豆煮えている火鉢

地に落ちる度胸で咲いている椿

針供養針もて生きる老いの日々

愛媛県 宮本 末子

正論が隅でうつむく多数決

露天風呂見ない振りする昼の月

歳だなあ堪忍袋に皺が増え

高知県 近森 功

日高市 根岸 方子
家事開放夢のプランをもう創り
ストレスがもつと食べよと旗を振る
筆順はどうあれ母の温い文字

横浜市 布山 嘉信

還暦の重さを増した登山靴
逆転打たれた天狗の鼻折られ
有頂天裏に奈落の落し穴

横浜市 石原 三郎

門松の後は焼かれる定めとは
入院の妻に慌てる台所
親指の怪我に他の指慌ててる

静岡市 中西 雅

イントロの昔を偲ぶ彼がいる
道端の小さい春をみのがさず
熟年を嫁にあずけてある余生

滋賀県 久保 和友

雪解け晴れレノンの眼鏡いまもなお
点滴後ひたすら老いを追いかける
追っかけっこしている老いとウォーキング

大阪市 平井 露芳

海岸の砂まで赤い中国産
コーランは人を殺せと書いてとらず
強そうに見えても豆に弱い鬼

大阪市 吉内 タカ子
里が無いちゃん付けで呼ぶ人が居る
戦中派すぐに集まる同窓会
老夫婦実のある日々に鬼が来る

大阪市 井丸 昌紀

雲一つない青空で油断する
飛んでみてなんや大したことはないな
鬼は外内なる鬼は追い出せず

大阪市 中村 忠敬

梅咲けどイラクの春は道遠し
定年後家事雑用は俺がする
ひとりごとが多くなったとひとりごと

大阪市 近藤 正

一歩だけ退けば話が丸くゆく
ミスターKブッシュの論拠掘り崩す
牛肉もかしわも消えた鍋料理

大阪市 中村 トミノ

読みたいと思ひ積ん読本ばかり
ばあちゃんのベストセラーを夢に見る
白内障目に年輪が現われる

門真市 矢阪 英雄

パンかじり文化を語る言葉出ず
牛丼がたべられないと列つくる
支援する野次馬連は声ばかり

河内長野市 内海綾乃

高槻市 執行稲子

黒髪が少なくなった成人式
雲の後軒並み家が光ってる
重いです体重計に笑われる

本番はいつもがたがた老いの筆
きっちりメモしています右脳にも
慎重の歩幅肩こるかずら橋

岸和田市 坂口英雄

羽曳野市 仲谷真一

族がいてうまく舞えない改革案
契約書大事な所虫めがね
老人会ドッコイショーでおひらきに

春なのにお別れですか恋人と
きっちり憲法九条守ろうよ
梅一輪桜はまだか春を待つ

岸和田市 森元ふみよ

羽曳野市 吉村久仁雄

自分史にストレス溜まる挫折感
少子化が進む日本に不安増す
ロマンとは平均儚なく消え去りて

父母祖父母の傘で育てた芽が伸びず
ポッポ屋が切符きる手を持て余す
平和ボケ脇の甘さを突く派兵

岸和田市 堤 梢代

東大阪市 今岡貞人

戦争の大義今さら問われだし
聞き役はあなた私はいしゃべり役
放言がこわくて生きて行けますか

影だけが下らぬ私についてくる
庭師来てこの眺望はどこの家
ひとり暮しは一人暮しの忙しさ

堺市 奥 時雄

東大阪市 米田志津子

英霊も年に一度は起されて
今度だけ許すといつも甘い親
許したら調子にのって入り浸り

神参りしても取れない角がある
寒の月イラクの空で見えますか
美容院出て一本のばらになる

吹田市 須磨活恵

枚方市 大昇隆広

てのひらに微罪をためて生きている
まさか坂越えて女も強くなる
いい友と持ちつ持たれつ縄電車

反戦のデモも護られ恙無く
安心と温さがずっと里暮らし
少年期の血潮が戻る里の味

枚方市 二宮 紫鳳

寒風に凜と香りし黃水仙

パート代孫の土産がぶらさがり

春告げるウォークシユーズにつくしんぼ

藤井寺市 伊藤 アヤ子

陽だまりの土の中から春の音

霜柱サクサク父は野良仕事

若者に勝つ事がある知恵袋

藤井寺市 増井 ヨシ枝

頑張らず病氣と仲よう生きてます

ぶり大根コトコト亡母が歌いだす

終焉は赤いドレスでワルツなど

藤井寺市 俣野 登志子

またどうぞ手料理營めてくれた人

寝坊して軌道修正夜半まで

また乗った知らない人の口車

豊中市 源田 啓生

探すとき見つからないのが核らしい

年豆が増えてそれだけ鬼も増え

大航海ボトルシップの知らぬ夢

豊中市 藤井 則彦

バーゲンで選り好みする主婦パワー

スーパ―に奥方と居た鬼部長

札付きは心を鬼にして諭す

富田林市 古田 千華

抽斗に亡母の匂いの櫛二つ

父母に抱かれたままで脱皮せず

一般で走り抜けますアテネまで

寝屋川市 中川 恵香

おだてても所詮飛べない庭の鶏

話し好き向かい合ってるバカの壁

サスペンス裏は愛染メロドラマ

八尾市 赤木 妙子

人生の余白まだまだ埋まらない

いい子ぶりやめると肩が軽くなる

約束の指をからめてそのまんま

八尾市 笹倉 ひろし

煙り立つ民のかまどは火の車

嫌煙で紫煙もドラマから消える

方便を透し中味を確かめる

大阪府 藤井 郁代

貝になるという気持も今解り

寒椿凍える雪にじつと耐え

鶯の鳴き声心ほのぼのと

大阪府 小栢 こずえ

手をかえて寒さ攻め来る老いの坂

こぼれ種静かに耐えて春を待つ

冬ごもり梅が春だと誘い出す

尼崎市 古川 正子

よく似てる双子の姉妹無事育つ
長谷寺の本尊菩薩に無事祈る
沈丁花蕾重たげ香り待つ

篠山市 永井 かほる

追風はこんなに楽とペダルふむ
エリートに育てた母の鼻高し
習おうと揃えた絵の具あくびする

篠山市 谷田 多美子

鬼は外独りぼっちの豆を撒く
窓際に追いやられた日の茜雲
あちこちのポケットさぐる物忘れ

三田市 辻 開子

年二回絵ごころある友癒しくれ
グランドはふる里篠山趣味の会
やる事をためて気にかけて兄は逝き

西脇市 七反田 順子

着飾って行くあてもない三が日
飾り棚狭い部屋には落ちつかず
マスク好き美人をかくす手段です

兵庫県 岩本 美緒子

自己診断お腹空いたと嬉しがり
皺伸べの苦劳います老い化粧
冬の座へ水仙笑ういい奢り

兵庫県 黒崎 美紗子

ガヤガヤがにわか無口の蟹料理
ぜんざいが朝のサービス蟹の宿
あやとりの眼輝かせた子等という

奈良市 田中 賢治

許したら次から次へ攻められる
陰膳で特進の無い帰り待つ
枯すすきお許しが出て一人旅

生駒市 小西 稔

アメリカに自慢できるは日本食
神さえも許すはず無きテロ行為
戦争を許す議論は御法度に

原稿募集

— 旅あれこれ —

8月号掲載の同人の原稿を募ります。

これまでで一番心に残った旅、旅の失敗談、
旅先での人々とのふれあい、これから行って
みたい旅など、旅にまつわる思いを題材にした
エッセーのご応募をお待ちしています。

締切 6月15日

四百字詰原稿用紙一枚半〜二枚(600字〜800字)
本社事務所宛
ただし、原稿の採否、添削は編集部に一任
して下さい。

編集部

■句文集紹介

『技師の一行詩』

竹内紫鏑 著

木本 朱 夏

川柳塔目選集作家・竹内紫鏑さんがこのたび句文集「技師の一行詩」を上梓された。

紫鏑さんは大正八年一月東京小石川に生まれ東京大学工学部を卒業後、日立製作所に入社。電気機器用金属材料の研究や、粉末冶金関係技術を担当された工学博士である。

句文集は第一部「紫鏑川柳」、第二部「自分史の断面」にわかれ、序文は橋高薫風名誉主幹である。薫風名誉主幹は序文に「酒の句と風景の句が少ないので、鑑賞者にも息を抜くところがない。それに恋の句がない。金属への恋をした文字通りの石部金吉氏ということか。これらは次の第三句集への課題で」と紫鏑川柳の一端に触れている。

沈殿の色から科学技師の道
はんだごて 理科少年に鳴るラジオ
金へんの漢字に躍る技師の指
冶金科の実習みやげ鉸山の唄

紫鏑さんは三十代の大半を入院と静養に費やされた。療養中に雑誌『キング』の付録の川柳特集号に刺激をうけ、また短歌会に所属されていた母君の影響で、短詩型文芸には抵抗なく誘導されたようだ。

退院後、川上三太郎主宰の『川柳研究』に、さらに『番傘』に入会。のち電波新聞の川柳欄を通じて薫風先生に出会い『川柳塔』に移られた。

紫鏑さんは一時期、七七調の句をよく作られている。「十四音はそれなりにリズムを持つているので、内容しだいでも七七調よりも締まった姿になることがある。」

□「階を降りてどこへ行く身ぞ 麻生路郎
□量も匂い初刷りも匂い 麻生路郎

があるから、ばくも試みたいと思った」と文集に書かれているように、七七調の句をたくさん発表されている。

梅見の親が絵馬の代筆
油が乗った古希の翻訳
ビルの車庫から昼の尺八
年金で生き第九を歌う

二百七十八句中、七七調の句が三十三句収められているが、破調の違和感がなく不思議な魅力があり、路郎師の作品と同じような哲学の匂いがする。

東大卒の工学博士という経歴は、ともすれば

ばお堅くて近寄りがたいと思われ勝ちだが、品の良いユーモア作品も収録され、紫鏑さんの意外な素顔がかいま見える。

神主の構えが似合う四番打者
戒名にギザギザ文字はやめて欲し
バーコード付きで好物供えられ
腰痛はスロービデオのさまで起き

第二部の「自分史の断面」には二十編のエッセイが収められている。「物識りかるた」と題した文章にはかるたにまつわる蘊蓄を、「カリヨンの丘」ではカリヨン（組み鐘）のメロディーを分析して、その結果を五線譜に記すなどの随筆が、科学者としての奥深いまなざしで纏められている。未知の世界の扉を開くような紫鏑さんの知識、教養あふれる文章の数々には川柳にない魅力があり、教えられることも多い。

八十歳を過ぎてなお「科学の世界での感銘」を詠みたいと述べられる紫鏑さんの川柳の背景には、常に好奇心とチャレンジ精神に満ちた科学者魂があるようだ。

これからも米寿、卒寿と、歳月を経るに従いますます芳醇に匂いたつ銘酒のように、深い味わいのある作品の数々を発表されますようお祈りします。

■句文集紹介

『五色豆』

米田恭昌 著

田中正坊

序文で橘高薫風氏が触れておられるようにタイガース優勝の翌年から川柳を始め、十八年ぶりに再び優勝した翌年の今年、この句集が発刊された。実際は「古希記念」ということだが、熱心なタイガースファンの著者にとっては、うれしい因縁かも知れない。

五色豆 色天々に欲を持ち

句集の題名にもなったこの句を筆頭に六〇〇句が「五色豆」「時差超えて」「バージロード」「タイガース」の四章に分けて配列され、「家族」の句とエッセー四編があり、各章の末尾に出身校である京都葉大の先輩・同輩・後輩と著者の長男が、それぞれ発刊を祝う言葉を寄せている。

さらに著者近影と家族の写真、木彫・木工・水彩画と多才な芳子夫人の作品が四頁のカラーで巻頭に、NHK教室・翠洋会・川柳

塔社・川柳塔なら等、著者が参加する句会のスナップや集合写真が八頁のモノクロで巻末に配されており、装丁は地味だが、中味は文字どおり五色豆のような多彩な句集となった。

時代劇が好きな父娘で仲が良い

手強いぞ孫を味方につけた妻

駅前の赤提灯にはつい負ける

喫いたくも我が家禁煙席ばかり

第一章の「五色豆」から抜粋した。家族の句と愛煙家で酒もたしなむ著者らしい作品が並んでいるが、

月の砂漠に戦車の響き無粋なり
といった時事吟もある。

次の「時差超えて」にまとめられた平成六年から八年は、社会的にも著者自身にとっても激動の時代だったようで、震災を記録した平成の眠りを覚ます震度七など七句とともに、疾患の体験を詠んだ三句

脳梗塞から還り人生観変わる

が胸を打つが、やがて平穏な日が続く。

好きなこととしてゐる妻がいて平和

第三章の「バージロード」では、

バージロードこんなに照れた事はない

花嫁の父は眼鏡を拭くばかり

と娘の結婚を喜ぶながらも、

這松に生きる力を与えられ

傷心を森の蒼さに救われる

すぐ種のわかる手品でうけている

などがあり、こんな辛口の句も見落せない。

反骨の独房に散る鶴形

終りにここ三年間の作品を収録した「タイガース」には、円熟の句が少なくない。

古い二人米一合で足りる日

マイベース凡人でよし目刺し焼く

哀しいなつい愛想笑いをしてしまう

そしてラストをタイガースで結ぶ。

六甲おろしのテープはエンドレスにする

「家族」の章のメインは、やはり著者に川柳を始めるときかけを作り、そしてご本人も作句し、第九回川柳Z賞の佳作を射止めた夫人で、その一句を紹介しておこう。

好きな事している妻にやさしい目

著者と私は翠洋会の仲間で、ここ数年来会長と自由吟選者としてコンビを組んできたが、その経歴や家族関係などは句集を編集する過程で知ったほどだ。いたって気さくで世話好きな人柄もさることながら、長く葉周経営にたずさわってきた経歴から「家庭人」に徹しただけに、家族を詠んだ句が圧倒的に多く、孫の作品まで収録したこともさこそとうなずかれる。そしてそれが、ほのぼのとした暖かみのある句集となって結実している。

麻生路郎物語

(28)

— 資料雜記から —

東 野 大 八

前号をもつて「麻生路郎物語」は、そのストリーターの幕を閉じた。暇さえあれば大きな机いっぱいに資料をひろげて、同じようなことばかり書きつづけてきた私は、実のところホツとした解放感を味わった。出来のよくないそんな私の悪文についてきて下さった皆さん方も、やれやれどうやらこれでケリがついたか、と一息ついていられる顔も眼にうかがふ。

毎号、貴重な本誌上を三頁も割いて貰つて二十七回にわたつて掲載して頂いたわけだと思えばそのストリーはメインストリートだけで息をつく横丁がなかった。また思わず息をのむエキサイトした一幕や、一読ギョツとさせるような秘中の秘話もなかった。いうなればヤマのないキレイごとにつつま、という感触がしきりにするわけだが、内心はそれでよかったんだと、自分自身で納得させている。

実伝作家の杉森久英あたりなら、素材を八方から拉しきつたつて、仮借なき完璧の伝記に仕上げたであらう。しかし、私の場合、そこまでは追い切れなかった。

人間路郎をなりふりかまわず裸にしてやろう、そうした気負いは、頭初なくもなかったが、やがてそうした非情さは、川柳界という特殊な環境や、路郎の血をひく川柳誌という立場などから、さまざまな判断や、制約が生じて、ついに裸身を求めたはずの相手は、いつのまにか下着をつけ、普段着をまとい、場合によつてはネクタイまで結んでしまう破目になった。いわばこれも成行きである。

この退屈な長講一席を終った私の感慨は、一ジャーナリストの端くれとして、新聞でいえば、これは普通の日刊紙でなくて、業界紙なみの形だったという結論をかみしめてい

る。(ちと新聞人の玄人的感触だが……)

さて、つい余計な無駄口を書いてしまったが、これからこの号と次号につづく二回分のまともな、歩いてきたストリーからのこぼれ話の資料雜記である。本稿といわば前号からの延長なので、以下敬称を省かせて頂く。

大阪の高商予科(明治三十八年ごろ)にいたころ、路郎は尺八も熱心に習っていた。尺八の都山流の流祖中尾都山の死を悼む記事に路郎はこう書いている。

「実は私は都山師の古い弟子で、明治三十七、八年頃だったか、都山師が旧難波橋筋の今橋を西に這入った南側で尺八指南をされていたころに入門している。大げさにいえば、いささか前歯が飛び出し、右親指のかっこうが変型になったほど吹きまくったものだ。

その頃は玄関が稽古所だった。まだ譜本が発行されていなかったで、習うだけずつ師が半紙に譜を書いて渡されたものだが、これが少しずつ溜つていくのが習う方にとっては魅力だった。その頃玄関番をしていた上田という少年が、後年上田流の流祖となった。私が高商予科にいたころのことで、柔道の寒稽古へ出かける時でも、尺八を携帯することを忘れなかった。出入橋の学校まで、六キロほどあったので、夜半の三時に家を出て、五時

に学校へ着き、八時ごろまでドタンバタンをやリ、この合い間には尺八の吹奏をやったものだ。それから井戸水をかぶり、おかゆで腹をふくらませ、九時から授業をうけたのであった」(『川柳雑誌』No.425)

筆者はこの古い川柳のナンバーを眼にし、その昔、筆者とさしの路郎酔談で

「わしのアゴの太きいのは、尺八もやったからだよ」

の一口があつたのを思い出した。

「先生の上あごの太きいことは、大阪警察病院の齒科の患者の三人のうちの一人である。あとの二人というのは講談師旭堂南陵師と、今は亡き名優実川延若丈とである。うな。あとで先生にこの話はホントですかとお聴きしたら「俵夫の足が発達したようなものさ」と否定されなかつた。柳界のための幾十年の獅子吼がそうさせたのであらう」(戸田古方・昭和26年11月寿像贈呈式典にて)

獅子吼もさりながら、アゴの強さの初手はどうやら尺八に起因するようだ。

——南無日車さよならとも云わなんだ 路郎

昭和三十五年一月十日路郎は、かつての日の遠いむかしの盟友川上日車の終焉の地、近江八幡市を訪れている。随行したのは、岩崎愛三、正本水客、橋高薫風、不二田二三夫、久米宗良子、林宏子の六人。この訪問の模様は、『川柳雑誌』(No.393)に要領よく不

田二三夫がまとめている。

川上日車については、本稿にも詳報した通りだが、死去したのは一行が訪れた前年の十一月九日である。三十三年に中風を病み、実妹豊さんに見守られて、その不遇の生涯を閉じた。七十二歳。

日車の晩年は、こと夫人とも別居し郷土史の研究著述という日陰のあけくれであつたといふ。『葉柳』のなかに十代末の若き日の日車の写真があるが、まるで絵にかいたような美少年ぶりに愕かされたことだが、晩年の老爺と変じたその写真も、ありし日の匂うばかりの眉目清秀の面影をとどめていた。

「小島の家は北堀江にあつて、心齋橋北詰西側に小島洋服店陳列所を出していた。厚司にそろばんという六厘坊君や日車君らと私もその倉庫の中で句会を催したほどの熱心さでした。その後、六厘坊君が結核で魚崎へ転地療養に行つたときなど、さびしかろうと、日車君は六厘坊君と起居をともにして友情の厚さを示したものでした」

「翁の奇行の一つとしてこんな話もある。編集会議を南地一流のお茶屋でやり、きれいにこの芸妓をときには二十人も侍らし、そこで次号の企画をし、文学を語り、川柳発展に心をくだくのだが、せっかく呼んだ芸妓はは仕事のかまをしておくと、少し離れた後方で

勝手なおしやべりに余念がない。成駒屋がどうの、河内屋がどうの、鴈治郎や延若の話をしておれば花がついてという風変りな散財であつた。つまり一つの座敷で、編集会議をする数人の一団の後方で、二十人もものきれいどころの一団が別々にいたわけである。この芸妓衆の団を屏風と呼ばれていたそうである。脂粉ただよう女人群屏風の前で、柳談を咲かせての編集会議を

「よき時代のよき人たちよ」

とは愛二氏への明治への郷愁であらうか」

『川柳雑誌』No.393・日東翁終焉の地を訪ねて・不二田二三夫

六厘坊と路郎は同じ歳で、日車がこの二人よりも一歳年長だった。明治も末の新しい川柳をささえたこの三羽鳥、しかし、三人のリーダー格は六厘坊で、句はもとよりその人格についても路郎は極めて大きく影響されていたことは否定できない。

「井上剣花坊さんの記憶中の六厘坊をよみました。が、十四歳ぐらいの少年にしては、句が大変おとなびています。そのころの句風からすればたしかに尖端を行く天才児だったのでしょう。剣花坊さんの六厘坊の記事の中に新派歌人と謝野夫婦を大将とせる明星派が芝居をするというをきいて六厘坊は

——鉄幹が眞晶子がおこんなり

——新派の歌に倦み珍派の芝居なり

六厘坊

馬の足になるは地方の誌友なり
はるかに引幕を贈る六号活字連
—文士劇鎮文明読で幕を開け
とからかったそうです」(霞乃書簡)

堀口堯人が『川柳雑誌・古希特集』(昭和32年・No 362)で「わるさ帖から」と題し、大正初期の路郎作品を十句とりあげている。若き日の路郎作品の素地を物語るものとして興味深いので、この名文を失礼ながら要約して採録させて貰うことにする。

堯人のいう「わるさ帖」とは「その人すら忘れていたような古い作品を、ひそかにひかえておいて、あなたにはこんな句がありますよ」とびつくりさせて喜ぶくせがある。わるさ帖と名付けている(以下略)という次第。

—気短かに驥(しつけ)を取って若旦那
大正二年の路郎先生の作。今の人々に、しつけ、の意味がわかるであろうか。

—立話宿替をした事も言ひ

先生の作としてはあまりにも平淡なようであるが、立話の外がわやかたちを写したのでなく、話の中味をあらわして明暗をつけた、きめのこまかいところがわかりますかお立合。

—千日を後戻りする懐手

いまの歌舞伎座のところに楽天地と称する明治趣味豊かな建物があった。(中略)これ

はその頃、浅井五葉先生激賞の作品であるが、絵看板をちらとながめて後戻りする若き日の作者はいささか酔っているのかもしれない。

—思い切らせた筈が心中

十四字調の鋭じさに鬼才路郎のある一面が出ていた。だがどうして、どのように納得させたのかしらないが、世間体や義理の重圧に対する抵抗が、たったこれだけの中に現われている。近頃こんな句風は少い。大正三年の作。

—飴売は何処の子供か抱き起し

その頃まだ紙芝居はなかった。飴細工はあった。(中略)市井の風物と人情のある句。お人好し路郎がよく出ている。

—私生児は母の繯綴と父の才

私生児の性格をチラとみせて、その父母のロマンスにまでさかのぼった十七字の力はおどろくべきものである。四十五年後の今日といえども通用する作品である。

—一番の渡しを渡る豆絞

山崎と水無瀬宮の中間の淀川堤から出る渡し船は今でもやっている。中州で一っぺん乗りかえて、再び舟にのらねばならぬ。この中州は谷崎潤一郎の小説『芦刈』によつて有名であるが、サイクリング流行の今日たずねる人もあるまい。むかいは橋本である。仮の小橋を渡れば遊女町のまん中に出る。以前はこの渡し船でわたって一夜の夢を結んだ若い衆

がふたたび船の中の人となり、土堤の遊女とさぬぎぬの別れをおしむありさまは珍しくもなかった。

その時の類かむりの豆絞を詠んだのかどうか知らない。大阪松島遊郭も川に面した家があったから、そこらあたりの早朝の風景であつたかもしれない。どちらにしても路郎先生が若かったことだけはたしかである。

—履歴書に楷書で書くも久し振り

大正四年の作。(紙数がない、あと略)

—粉煙草にいい知恵の出る筈もなし

粉煙草とはさきごみのこと。(中略)刻み煙草も残り少くなれば、火付も悪いしキセルもつまる。何だかわびしい気持がする。

—抱車夫さきの女房が違いくる

今の自家用自動車運転手、昔は人力車が多かった。その車夫に極道者が少くない。捨てたのか別れたのか、それはわからないが、あいにきたのは未練か、金か。複雑な人生内容は泉鏡花にでも書いてもらつたらはつきりするかもしれない。

これらはいずれも大正初期の作品であるが、どうしても明治の匂いがする。しかも、それぞれの作品にしっかりと情緒が感じられるのは、単に私のよき時代への郷愁であろうか、それとも路郎先生の人情味がこもっているからであろうか。

愛染帖

波多野五楽庵選

岡山県 山本 玉恵

老いました人きらいではないけれど
幾度も迷いまよった女道

人間という骨が有りまだたしか

愛媛県 中居 善信

燃え尽きておとこの骨はほろほろに

向こう傷男の勲章かも知れん

何でもこんな女と住んで四十年

弘前市 高瀬 霜石

寝返りを打つたび増えてゆく白髪

不景気の話は続くスルメ焼く

追伸の追伸にある金のこと

弘前市 高橋 岳水

旅人の目にはきれいな雪景色

一円の重みをレジに來て悟る

残高を余命で割ればブリザード

和歌山市 木本 朱夏

じょんがらに嗚呼と血を吐く寒椿

熱い雪踏んでおんながあとを追う

松原市 小池しげお

敗者復活川の深さは知っている

ひよつとこの面でこの場は済ませよう

羽曳野市 森下 一知

単線に恋の切符がすれ違う

約束の指に虚しい通り雨

西宮市 門谷たす子

愛された記憶の中の花暦

六十年とやふたり芝居に拆の音

富田林市 池 森子

ポケットの穴から春の鼓笛隊

春からの使者はソプラノたちが好き

和歌山市 桜井 千秀

人生は所詮独りの思案舟

陽だまりで芽吹く余生のこぼれ種

四条畠市 吉岡 修

三人の子が細腕をタフにした

筆箱を閉じて二章をあきらめる

東京都 やまぐち珠美

少量の入眠剤を含む愛

息かけて冬の硝子が蘇る

和歌山市 福井 桂香

地吹雪におんなが庇う夜叉の面

サンピラーやがては願う尊厳死

かたつむり呑気に這つてゐる訳でなし

大阪市 神夏磯典子

あるもので済ます案外いい時間

背伸びして足の裏まで見せている

弘前市 福士 慕情

道明寺ほんのり春を連れてくる

仏壇へ飾る写真は決めてある

交野市 田岡 九好

ふる里は汽車に揺られて帰る国

四面楚歌 遠い汽笛が聞こえます

尼崎市長浜 美龍

バラ一輪きれいいことでは生きたらぬ

人生の七坂越えて来た背骨

橿原市 安土 理恵

割り算の余りばかり拾ろっている

一寸した理由があります以下余白

寝屋川市 江口 度

ああ晩年とびたつ音に背を打たれ

胃の中で善人のうそ乾かない

和歌山市 川上 大輪

生ぬるい風懷を出て行かぬ

ライトアップしてから軽くなる財布

高槻市 乙倉 武史

生きている内は破れぬバカの壁

そろそろと開けて見ようか玉手箱

今治市 塩路よしみ

負けて勝つそんな演技も年の功

理屈などどうあれ春へ翔んでみる

神戸市 田中 章子

気がかりが無ければ行きたい旅ばかり

イエスノーその中間で生きている

米子市 白根 ふみ

島取市 岸本 宏章
つじつまを合わせたところからほつれ

八王子市 播本 充子
返信に振った多目の塩胡椒

八尾市 宮崎シマ子
狂い咲く薔薇と同じ過去を持つ

島取市 徳田ひろこ
夢ひとつ画餅に帰したくない

京都府 都倉 求芽
すっぱりと切り絵の中に棲む女

米子市 足立由美子
かと言つて急に無口になれもせず

出雲市 園山多賀子
そこはかと雪降る夜は夢まだら

池田市 栗田 久子
いつの日か逢えるあなたでいてほしい

弘前市 斉藤 劼
風邪の子にそつと気遣う冬母

大和高田市 鍛原 千里
ずたずたの心を白くぬりつぶす

高知市 小川でるみ
いつの日か主役になろうかすみ草

竹原市 正畑 半寛
母の雲ふと手を振つたようだけど

尼崎市 春城 年代
あした花屋へゆこうと夫のたまいぬ

尼崎市 春城武庫坊
これからだ今来た道は振り向かぬ

海田市 三宅 保州
大病も大怪我もした処方箋

大阪府 井丸 昌紀
祖母よりも古くから住む内裏雛

奈良市 矢野 良一
雪道に下駄の二の字が懐かしい

東大阪府 谷口 義
退屈な鬼が聖書を読んでいる

大阪府 津守 柳伸
ほころんだ梅へ寒波と詠が届く

倉吉市 山中 康子
生き延びて未知の試練をくりかえす

唐津市 仁部 四郎
イベントの始末で新市できそこね

西宮市 緒方美津子
同舟にいて知ろうとはせぬ夫婦

堺市 桜沢 千世
てのひらに遊び足りない駒一つ

吹田市 太田 昭
伸び切ったゴムが切れずにいる孤独

弘前市 相馬 銀波
雪を掻く軍手春まで汗の日々

弘前市 中山 雅城
ブルースの調子に乗れぬ雪の夜

弘前市 一戸 ツネ
欲がある残る命と電子辞書

弘前市 岡本 花匠
点茶して綺麗な嘘と差し向かい

海田市 谷口 義男
忘れたい事を掘出すのが他人

和歌山市 青枝 鉄治
変わり身の早さでつかむ回り椅子

八尾市 吉村 一風
聞き役のうまい仕草にのせられる

寝屋川市 太田とし子
泣くことも笑いも失せた酒なれど

和歌山市 武本 碧
入れ知恵が張り切っている舞台裏

砂川市 大橋 政良
傍聴の目は避けられぬ幕が開き

松江府 安食 友子
枯れ尾花 三文の徳を存じか

和歌山市 古久保和子
矢印を無理やり曲げにくる寒波

島取市 西原 艶子
愛別離苦みんな流れてゆくのです

大阪府 澤田 和重
真珠婚ばちばち体形崩れ出す

尼崎市 内田美也子
食異変自給自足がなつかしい

松原市 玉置 重人
主義主張結婚しない症候群

鳥取県 岩崎みさ江
断ち切れぬ思いを払うジャンプ傘

和歌山市 田中 みね
お利口すぎる貴女と話噛み合わぬ

富田林市 大橋 鐘造
焦点をぼかせば見える風の彩

大阪市 川原 章久
ほっこりと真綿で包む褒め上手

堺市 山本 半銭
鬼さんこちら手を叩いてもひとりきり

有頂天の時のわたしに要注意
藤井寺市 太田扶美代

見栄張つてどこまで飛べたシャボン玉
熊本県 高野 宵草

饒けの言葉が温い始発駅
奈良市 米田 恭昌

春の空 身辺整理しておこう
鳥取県 土橋 睦子

一病息災 芽吹きがとてもしとおしい
羽曳野市 徳山みつこ

たんぼの綿毛のまんまるい宇宙
愛媛県 黒田 茂代

足の裏に表情があり見せられぬ
松江市 津川 紫見

沈黙へ切りだしてみるつかぬこと
喜屋川市 森 茜

受験日を思い出させる細雪
海南市 堂上 泰女

地に還る旅をひとりではとほとほと
高知県 赤川 菊野

顔洗う今日の一步は軽そうだ
米子市 小塩智加恵

疑問符はあるが疑うのはよそう
美祿市 安平次弘道

この恋も短音階に落ちてゆく
大阪市 古今堂蕉子

十二月八日忘れの老年兵
鳥取市 美田 旋風

ひな壇に以下同文が反り返り
唐津市 樋口 輝夫

寂しさの果てを飛んでる深夜便
倉吉市 牧野 芳光

空想をいっぱい食べるナルシスト
和歌山県 辻内 次根

ブランドの靴が私の足をかむ
倉吉市 米田 幸子

空白を埋める絵具は落いてある
八尾市 村上ミツ子

人生にマラソン重ね父は見る
大阪市 前 たもつ

あの人と素直に逢える青い過去
鳥取市 福田 登美

過去ばかり積んで穴から抜けられぬ
大阪市 三浦千津子

自分史の輝く年として生きる
鳥取市 岸本 孝子

冷やかしの積もりがいつか足とられ
大阪市 伏見 雅明

七難が去って清しい春四月
東かがわ市 木村あきら

鍵穴を覗けば神秘的な世界です
大阪市 町田 達子

今日は晴れ百円バスを乗りこなす
弘前市 宮崎ヒサ子

残照へ言いたいことが山とある
尼崎市 田辺 鹿太

君もかと苦笑いする落椿
枚方市 海老池 洋

懸命に生きて小さな灯を守る
富田林市 片岡智恵子

定年後二流会社になつてゐる
堺市 志田 千代

愛されてます涙腺の乾燥期
堺市 和田つづや

妹が姉がだんだん亡母に似る
宇都市 平田 実男

横向いた途端なにやら騒がしい
八尾市 西川 義明

なにもかも詐称でしたとマニフェスト
高知県 桑名 孝雄

再婚の話に燃えつくるいのち
黒石市 相馬 一花

極楽の切符欲しくて遍路笠
藤井寺市 中島 志洋

車では気付かなかつた坂を知る
横浜市 金森 徳三

老斑を見つけて萎えてゆく鏡
京都府 丹後屋 肇

美顔水バージョンアップさせる春
奈良県 渡辺 富子

柔かい土を知らない土踏まず
松江市 三島 淞丘

合格の靴が三和土に裏返る
唐津市 久保 正剣

長電話取り戻せないロスタイム
唐津市 市丸 晴翠

目立ちたい女のうしろにいる安堵
鳥取県 田村きみ子

こんにはだけの付き合ひ多くなり
喜屋川市 平松かすみ

俳風柳多留二四篇研究 65

清・佐藤 賛

505 引くるのにこくらく〜と店さらし

小栗 清吾・橋本 秀信

粕谷 長生・山田 昭夫

伊吹 和男・大野 秀二

清 博美・佐藤 要人

小栗 吉原張見世お茶引きの句。

営業終了の引け四つになるというのに、客が付かない遊女。張見世でこくりこくりと居眠りをしながら「店晒し」になっている。目を明けて見ればなむさんうれ残り

503 さんげく借金で参りました

さんげく大くをぬすみました 二〇二五

橋本 賛。行く前の両国での千垢離、入山の

小栗 大山の句。大山へ詣る者は麓の大滝で垢離をとり、罪障を懺悔しなければ本社へ登れない。罪障のある身で登ると、途中で天狗にさらわれて八つ裂きにされるとされてい

罪障大峰八大……」を踏まえて。

清・佐藤 賛。

主題句は、その懺悔の文句をそのまま詠んだもの。「盆の借金返済ができないので、大山参詣と称して逃げて来ました」と懺悔している光景である。(しかし、懺悔するに事欠いて、信仰心からはなしにやって来たことを白状して許してもらえものだろうか。阿々)

504 なさるともいわず御手がつきました

小栗 殿様が腰元などにちよつかいを出した。手を出された方は、普通なら「殿様がアレをなさる」と言うところだが、殿様の行動だからそのようなあからさまな表現をしないで「お手が付きました」と言うのである。という意だと思ふ。

重毛た、ぬ枕言葉へお手か付 二五15

さんげく間男をいたしました 一七七

さんげく藤沢であそびました 一九11

おへのこのはいるを御手が付くといひ

506 とうしなんしたとほたて貝へいれ

清・佐藤 賛。

天満 1

小栗 小鍋立ての句。

小鍋立てでは小鍋を火鉢に掛け、二人差し向かいなどで煮物をして互いに箸を突き込んで食うこと。よく吉原の流連客が、女郎とこの小鍋立をして食ったものである。そんな場合、この小鍋の代用をしたものに帆立貝があり、愛用された。(辞彙)

状況は「辞彙」の説明の通り。「どうしなんした」は相手の遊女の言葉。軽く言葉を交わして小鍋立てを突つく様子だろう。

ただ、「万句合」の方(帆立貝へ寄り)は

それでいいと思うが、主題句の「いれ」は、煮物の材料が酒などを入れたということではないのか、あるいは特別の意味があるのかよくわからず。柳雨「吉原志」の頭注に「理に落ちた杯酒」とあるが理解出来ない。ご教授を乞う。

居続ケで火鉢の沖へ帆立貝

二一九三

橋本 賛。理に落つゝ理屈つばくなる。悩み事や愚痴話をあまり理路整然と答えられると酒もますぐなるという余情を込めているのではないか。「梅暦」「今日はおめへのお陰で、酒が理に落ちていけねへ」などの情景、清「どうしなんした」は、客の浮かぬ面相を見て。

佐藤 礎稿賛。橋本説を加えたい。

507 小木の花見いたつておもしろい

小栗 吉原仲の町花見の句。

吉原の花見は、他所で栽培した桜を仲の町へ運び込み、終われば撤去する。簡単に運搬できる程度のものであるから、若い小振りの木なのであろう。

主題句は、この桜木を「小木」と表現し、自然に生えている「大木」の花見よりこちら

の方がいたつて面白いというのである。面白い理由は言うまでもない。

大木の花見ハ息子きらひ也

芭二二

大木の花見はものかいらぬなり

二〇三三

清・佐藤 賛。

508 おれハくと斗むこ花の山

小栗 貞室「これはくとはかり花の吉野山」のもじり。

友達と連れだつて花見に行った婿。友人達がこれから吉原へ繰り込もうと相談しているのに、「俺は帰るく」と逃げ腰になっている様子。

入りむこのつらさ花なら花つきり

安四信二

入りむこハ花の外にハ内ばかり

安九満三

清・佐藤 賛。

509 アゝしわくするのいせ屋虫のわざ

小栗 しわいは客齋、けち。

「虫のわざ」は「虫のせい」などと同義で、人間の体内には虫があり、種々の病氣の原因となったり感情をたかぶらせたりすると考えられていたことを指す。科学が未発達の時

には、原因不明の病氣や症状はみな「虫のせい」というほかなかったということであろう。

主題句はそれを踏まえて、「伊勢屋があれだけケチなのはとても尋常なことではない、あれは虫のせいにちがいない」とからかったもの。現代の流行語でいうと「ほとんどビヨーキ」といったところだろう。

女郎かいたがるもむす子むしのせい

一九九

かハらけをすくのも隠居虫のせい

四〇一四

あまりさせたがるのも下女虫のせい

末四三

あまり溜めたがるも親父虫のせい

三二五

清・佐藤 賛。

510 まだ御呼出しハないかと薬とり

小栗 流行医者薬取りの句。

薬取りがあまりに長い間待たされるので、退屈のあまりちよつと外へ遊びに出ていった。帰ってきて同じように待っている客に「医者から、まだ私のお呼び出しはないか」と聞いている光景。

薬取やつびし犬に手をもらひ

二二

清・佐藤 賛。

尚香のむ

藤田 泰子選

旅人の胸に消えない白い梅
 静いもしてます常に自然体
 続持った日の丸平和貢獻度
 取消したい一日があり熱いお茶
 追い風になろうあなたの船出の日
 恋人の詩が内ポケットにある
 美しい三日月だった冬の街
 耳栓をしても聞こえる銃の音
 角を曲がればきつと開けてくる視界
 誘ったのも突き落したのもわ・た・し
 古本屋で出合う同じ周波数
 やつかいな理性が阻む発火点
 ぬくもりを逃さぬように編み上げる
 折紙は二次元折ると三次元
 カレンダー命のうろこ一つ剥ぐ
 夕焼けの余白を千切り涙拭く
 コーヒーで残り時間をぬくめ合う
 焦げくせの付いた鍋だが捨てられず
 らしく生きよと教えられた古道具

吹田市 大谷 篤子
 富田林市 片岡智恵子
 東京都 後藤 早智
 神戸市 田中 章子
 堺市 矢倉 五月
 富田林市 池 森子
 藤井寺市 鴨谷瑠美子
 藤井寺市 高田美代子
 羽曳野市 吉川 寿美
 藤井寺市 太田扶美代
 和歌山市 古久保和子
 橿原市 安土 理恵
 堺市 桜沢 千世
 交野市 山川日出子
 寝屋川市 坂上 高栄
 松江市 川本 畔
 羽曳野市 徳山みつこ
 大和高田市 鍛原 千里
 熊本市 永田 俊子

退化したものが殊更いとおしい
 寒風にからからと桐の花
 波立たぬ水面箝口令の風
 しつかりと雪を切つて干す未練
 キヤバシテイの広さは愛の魔法です
 荒れ狂う海へ涙を捨てに行く
 幸せが行方不明になつて
 ぼつと花咲いたごとくに春ごろ
 許す気がまだあるうちに許さねば
 憧れは可愛気のあるオバアサン
 誰にでもある思い違いに北の風
 目の鱗一枚剥いで枯野行く
 瘦せてきた指紋でページ進まない
 地団駄を踏むほどでないきのう今日
 本人の価値は他人が知っている
 咲く順を弁えている花の園
 小津安の映画 大人の見る絵本
 足下から春じんわりやつて来る
 伸びてくる角の処分に苦心する
 にぎやかで歳を持たない女です
 気ままに寝起き出来ることは幸せよ
 自分史に書けないことが二つ三つ
 浮かれても許してくれる春がすみ
 母の忌に合わせるように咲く桜
 桜花 母の切り貼りあたたかい

西宮市 牧瀨富喜子
 寝屋川市 籠島 恵子
 東京都 やまぐち珠美
 出雲市 伊藤 玲子
 箕面市 出口セツ子
 高知市 小川てるみ
 倉吉市 野口 節子
 香芝市 大内 朝子
 池田市 栗田 久子
 八王子市 播本 充子
 東大阪市 安永 春
 鳥取県 岩崎みさ江
 和歌山市 福井 桂香
 米子市 白根 ふみ
 尼崎市 長浜 美籠
 鳥取市 徳田ひろこ
 堺市 志田 千代
 弘前市 宮崎ヒサ子
 神戸市 山田婦美子
 八尾市 田中トシエ
 八尾市 中島 春江
 三田市 久保田千代
 堺市 西村りつえ
 富田林市 古田 千華
 西宮市 緒方美津子

沈まないでくれよ頼もしい空母
受け皿にもなろう小さな母なれど
歳月の隙間へ母のわらべ唄
陣痛をすぐに忘れさすいとおしき
気位の高さは今も京の刀自
今以て追いかけている青い鳥
赤い月女の吐息染め上げて
束縛が解けて自由な空を翔ぶ
朗らかに集うミセスの花宴
あげるあてがないのに買ったチヨコレート
景気よい話が好きなコインチョコ
ブランコのふたり幾何学的に揺れ
振り向かぬと決めてしつかり返し針
痛い痒い自分に甘えてばかりなり
鉛筆を研がねば何も始らぬ
筆順が間違っているいつからか
よるめいた弾みにずれてきた進路
反抗期マリオネットの糸が切れ
泥道も手を引く君がいてくれる
不器用を支えて今日も頑張れる
重い荷があるから命張っている
ふさがった耳で雑音聞いている
櫛あれこれ女の過去を秘めたまま
何年も忘れられてる雛がある
駆けながら手櫛を入れる浜の朝

鳥取県	吉田孔美子	鳥取県	山本 玉恵
岡山県	渡辺 富子	奈良県	北村 賢子
東大阪府	北村 賢子	大阪府	山城 年代
堺市	山本 半銭	大阪府	中岡 妙
米子市	足立由美子	大阪市	松尾柳右子
豊中市	安藤寿美子	大阪市	津守 柳伸
米子市	林 瑞枝	大阪市	小泉ひさ乃
大阪市	神夏磯典子	西宮市	門谷たず子
大阪市	町田 達子	和歌山県	桜井 千秀
弘前市	一戸 ツネ	鳥取県	西原 艶子
大阪府	三浦千津子	鳥取市	福田 登美
芦屋市	黒田 能子	シドニー	坂上のり子
愛媛県	花岡 順子	鳥取県	石谷美恵子

CTも心の髪は写せまい
息災で今年も噛めた福の豆
月光に羽ばたく名も無き花の笑み
いつからか鬼の心になじんでる
旅慣れてリュックひとつの荷が軽い
夢いっぱい詰めた風船離さない
モーツァルトに包まれ羽化がはじまりぬ
はらからの姉が一番煙たがられ
居るだけで心安らぐ三姉妹
物言わぬ唇寒し冬籠り
筋道は通すが情は知っている
フリーサイズ痩せすぎも難儀です
冬の通夜毎年ここで風邪もらう
寂しい日嬉しい日にも娘が二人
鮎玉に釣られてついできた地獄
どこまでも潮の満干を信じたい

鳥取市	永原 昌鼓
松江市	兼本 政子
倉敷市	小野 克枝
大阪市	川久保睦子
東京都	清原 悦子
和歌山県	武本 碧
和歌山県	森下 順子
鳥取県	西川 和子
鳥取市	土橋 睦子
鳥取市	録沢 風花
東京都	岸野あやめ
八尾市	高杉 千歩
和歌山県	福本 英子
河内長野市	植村 喜代
倉敷市	井上 富子
米子市	野坂 なみ

篤子さんの句ー人生は月日を行く旅人、早春の旅で出会った
白い梅、忘れられない人、作者の胸の疼きが伝わってきます。
智恵子さんの句ー仮面夫婦の多い昨今、諷刺もコミニケーション、楽しい時には笑い、哀しい時には涙し、本音で生きておられる作者の柔軟な姿勢に好感がもてます。早智さんの句ー銃を持つて脅しながらの平和は、本当の平和じゃない自衛隊派遣に
対する政治批判、辛口的一句です。章子さんの句ー一人になっ
て、一日を振り返った時、言い過ぎたり、人の痛みに触れてし
まって自己嫌悪に苛まれることが多々あります。熱いお茶とい
う語彙がどこか自虐的で、深い反省の色が窺えます。

空間

河合 茂雄選



観覧車熱い二人の夢空間
奈落の底そこは四次元かもしれぬ
闇という空間にいる魔物
空間へ綴る私の愛の詩
この広い空であなたと逢う波長
ストロウの空間にいる孤独感
この空間うめるは空の青だろう
空間が埋まらぬままの私たち
空間をさくらで埋める妻の旅
空間に駄目だとベケを画いて見せ
子の抜けた家を手手に使い分け
空間に足りぬ祈りの千羽ツル
女郎蜘蛛胸の隙間に棲まわせる
空間を追い越してゆく古時計
禅寺の空間白い風が吹く
天と地の空間に咲く虹の花
空間の良さが画けない設計図
男とおんなの空間が狭くなる
会長の横に隙間がある斜
空間へ花を飾ってひとり住む
善と悪その空間にある迷い
冬山のひろい空間素晴らしい

恭 輝 夫 (花) 順 子 (備) 泰 女 可 住 蕉 子 時 雄 富 子 (渡) 一 風 早 智 愛 論 保 州 章 久 典 子 雅 城 章 司 重 人 螢 朝 子 千 里 公 誠

ときめきが風止む空間待つっている
大空に向かつて大好きと叫ぶ
同居して空間がない気兼ね
一畳のスペースあればでかい夢
生き甲斐の色で空間塗り直す
都市計画ここらあたり公園を
空間に檻子でも動かぬ意志がある
胸のすきまに忍び寄る少年の闇
勝手に掃除しないでほしい俺の部屋
衣食住足りて空間考える
いざと言う時に空間開けておく
地球から一隅借りて子を育て
心地よい空間人の和をつくる
空間が壁より厚い時がある
空間に計算された石を置く
佳
空間で曲がり私に当らぬ陽
空間へ猫の額を引き伸ばす
シクラメン置く空間があたたかい
お隣とほどよい空間持つている
字足らずの恋で空間埋めている
人
空間を残さず枢花で埋め
地
裸木の空がとつても広くなる
天
空間が欲しくて月へ背伸びする
軸
空間へ動く墨子が風になる

弥 生 ミツ子 とし子 隆 盛 ヒサ子 度 扶 美 代 寿 美 洋 介 柳 弘 虹 汀 棲 世 昌 鼓 たもつ 彩 子 シマ子 雅 明 英 旺 智 加 恵 理 恵 雄 々 雄 々 茂 代 若 松 雅 枝

看 護

楠 昭子選



看護する心に深い森がある
看護して看護をされるいろは順
看護師がほめられてる投書欄
長患いありがとうではすまぬ恩
親や子と思う看護でついほろり
看護などいらぬと拗ねる天邪鬼
見て貰う畳の上は遠い夢
長男の嫁は看護師さんである
病人の愚痴をウンウンウンと聞く
入浴も食事もヘルパーさん頼り
いい顔の嫁に看護をまかせきり
いい顔でいよう看護の嫁が来る
横切った風が看護の汗褒める
看取られて嫁のぬく味を今更に
今はただ看護日誌を読み返す
看護した事があるから良くわかる
引き継いだ看護日誌の重い朝
看護にも土日がほしい核家族
思いやりナイチンゲール読んでから
衣食住足りて看護を考える
看護する方もあなたと同年
遠慮なく言いたいことを言う看護

美 明 俊 子 不 二 慕 情 高 栄 鐘 造 勝 視 霜 石 妻 子 雄 々 和 重 扶 美 代 たず子 蕉 子 朝 子 晴 翠 りつえ 充 子 柳 弘 (井) 富 子 ミツ子

千羽鶴も看護一役買つて出る

病人に怒鳴られながら看護する

正直な看護記録が置いてある

制服を脱ぐ看護師の紅の色

本当は看護されたくないのです

歩けたぞ看護する身も熱くなる

うたた寝の看護に病母の掛布団

不覚にも夫にすぎる車椅子

ヤンチャ言う病母に時々鬼になる

学ばせて貰った姑の看護

泣く奴があるかと叱り妻看護

病名に触れず看護師星を褒め

心病む子と水仙の香に座る

看護とは心とこころで許し合う

介護の手少し休めて蜜柑剥く

佳

ハヒフヘホ笑うけいこもして看護

相槌を打つのも看護だと思つ

病む人の視線にそってする看護

命大事に母のおむつを替えている

すまんなあ義父を泣かせた日の看護

人

看護日誌明るい文字が増えて春

地

夜の詰め所でナイチンゲール眠かろう

天

母の背をさすると洩れる子守歌

軸

いまならばもつと看護が出来るのに

シマ子

一花

理恵

重人

たもつ

昌鼓

恭昌

志華子

寿美

敏子

(園)幸生

伊津志

茂代

千里

雅枝

みつこ

(花)順子

碧

善信

みね

あずま

美代子

遠山可住

強 引

木村富美子選



温室で無理矢理春を咲かされる

強引な鞭も無駄よとハルウララ

強引に置いて行かれた置き菓子

強引にプライドだけは守り抜く

強引な時代おくれのオモチャ箱

強引に三年先の予約席

無理をすな無理をするなど無理をいう

強引に生き甲斐燃やす万歩計

強引が嫌いでも今ひとりいる

強引に値切つておいて買ひもせず

手をあげるまで強引に押しまくる

法律の抜け穴大物が通る

強引な無頼に怯むベンを持つ

菓子箱に強引詰めてくる無心

問答無用貴方は何時も譲らない

強引な人だがデマは飛ばさない

強引なリードに何故か魅せられる

無理やりに我を押し通す星条旗

強引な引き抜きだった舞台裏

強引な男の中にあるキラリ

強引に奪った妻と離さない

強引に割り込み掴む福袋

強引に値引きをさせる大阪弁

強引な正論を背にイラク入り

無理を押し通す親父天然記念物

強引に押し通された有実法

金持の強引敵が多すぎる

無理矢理に変えられまじろ今の姓

おばさんのヒップ隙間を見逃さぬ

ニコニコと口説く一歩も下がらない

強引に生きると変り者にされ

強引な誘いにのらぬ休肝日

正論だが強引すぎた青りんご

強引に賞味期限を守る嫁

強引に旨いと言わす父の味

寺の供養功德になると言うて来る

強引な父 鬼は外鬼は外

佳

(伊)玲子

とし子

螢

霜石

正剣

正雄

善信

四郎

雄々

慕情

蕉子

いさお

宗明

章子

彩子

兵八郎

美也子

弥生

隆盛

あずま

可住

一粹

シマ子

俊子

たす子

克治

倫子

たもつ

宏章

充子

(渡)富子

勝視

一花

美代子

理恵

森下愛論

初歩教室

題一 椅子

三宅保州

作句上のタブー 川柳をたしなむ者として、次のような句を作つてはいけません。

- 一 駄洒落 語呂合わせ、言葉遊び、下品な句
- 二 差別用語、不快語、隠語を使つた句
- 三 盗作（他人の句をそのまま或いは真似たりして自分の句とすること）

差別用語を使わないことは、単に川柳人としてのみでなく社会人としての規範であります。およそ性別、職業、身分、地位、人種、民族、地域、心身の障害、不自由等について、差別の觀念を示す言葉、表現等使わないことを肝に銘じて下さい。未だに差別的な句を投句したり選ぶ選者が時に見受けられるのは、川柳の低評価になりかねず遺憾なことです。

盗作は論外ですが、偶然に他の句に似ている暗合句についても、わかつた時点で入選を辞退したり削除するのがマナーです。

【同想句】

「椅子とりゲーム」的な句が多かつた。

いつまでも椅子を欲しがらる偉い人

椅子狙うお金で動く議員席

大臣の椅子はまだかと議員さん

肘のある椅子争いのサラリーマン

社会での椅子取りゲーム負けている

大人達椅子取り競争罪つくり

椅子取りのゲームで居場所弾かれる

小数の椅子へ健気に身をけずる

団塊は課長の椅子も覚束ず

憧れの椅子の取り合い出世欲

椅子取りと出世欲は表現が重複的。

毎日が椅子取りゲームサバイバル

椅子取りゲームとサバイバルが重複的。

ライバルの同期は五人椅子ひとつ

この場合の五人は句が動きます。

嫁姑椅子とりゲームいつも負け

どちらが負けたのでしょうか。

椅子取りに勝った兄貴は怒られる

椅子取りに負けた末っ子母の胸

一句では兄弟喧嘩とわかりにくいのでは

【添削・批評句】

原 藤いすで気持ちよさそうこつくりと

気持ちよさそうとこつくりとは似すぎ

原 心地良いマッサージ機でうたた寝を

心地良いとうたた寝が重複気味

添 マッサージの椅子で極楽気分なり

原 やれやれと椅子に座れば安堵する みね代

益子

タカ子

みね代

弘之

真一

トミノ

弘子

孝明

英旺

郁代

英旺

いさお

こずえ

像山

像山

乃

綾

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

やれやれと安堵が重複しすぎます。

添 肩の荷を下ろすと椅子も柔らかい

原 ゆつたりと肘掛け椅子の定年後

添 肘掛け椅子にやつと座れた定年後

原 披露宴園児の椅子に身を縮め

幼稚園での披露宴ですが、一般的には

添 参観日園児の椅子に身を縮め

原 座る椅子予約されてる御曹司

そうですすね的すぎます。逆説的なら面白い。

原 広縁に藤椅子読書夢を見る

何もかも詰め込みすぎ、ぎくしゃく

添 藤椅子に座り一気に読み終える

原 棄て難い亡母の形見の藤の椅子

形見で亡母とわかるから母でよい。

原 日向ぼこ椅子と待ってる無人駅

添 無人駅のベンチで今日も日向ぼこ

原 甘えない車椅子でも普通です

説明調すぎます。

添 甘やかさないでください車椅子

原 父入院あいた座椅子へ猫する

添 入院の父の座椅子へ猫座る

原 子の試合椅子はあるけど立ったまま

添 子の試合椅子に座つてなどおれぬ

原 椅子にのりお鍋を洗う孫二歳

二歳は動きます。乗りで小さいとわかる。

原 留守の夫私の椅子を温めてる

添 留守番の夫温めてくれた椅子

弘之

美千代

章司

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

孝明

原 祖父からの椅子を今でも使つてゐる 真一

説明調で平板。アクセントをつけたい。

添 祖父からの椅子に明治が生きている

原 闘志燃え聞き合つてゐる車椅子 美恵子

何をせめぎ合つてゐるのですか。

原 危なかし椅子だけれども頼つてゐる こそえ

危なかし椅子を具体的に詠みたい。

原 硬過ぎも柔らか過ぎも困る椅子 はじめ

ちよつと理屈っぽい。

原 天下り立派な椅子が用意され 初恵

説明句過ぎる。そこを詠みたい。

原 食卓の椅子まきが出る子の巣立ち 弘子

添 食卓の椅子そのままに子の巣立ち

原 交番に椅子がぼつとある平和 道子

添 警官が椅子に座つてゐる平和

原 死刑には楽すぎないか電気椅子 侑子

楽すぎないかとまで詠むのは異論も

添 電気椅子は何にも話らないけれど

原 ベッドよりよく眠るんだ椅子の方 たん吉

添 ベッドより安眠できる慣れた椅子

【少し工夫すれば佳くなる句】

あの椅子は狙つてとれるものでない 敬之介

あの椅子を具体的に詠んでほしい。

ライバルの椅子に座つて句を作る 智加恵

句を作るは、他の具象にしてほしい。

原 車椅子あればよかった亡母の世に政子

添 母の世にあればよかった車椅子

原 陽当たりの良い椅子猫が占拠する 満子

添 陽当たりのよい椅子猫と分かち合う

椅子見つけやつと座つて乗り過ごし 稔

大臣の椅子がそんなに欲しいのか

その椅子は壊れませんか妻の席

車椅子には辛からうこの段差

椅子も待つ角を隠した花嫁を

十か月椅子につかまり立ち上がる

長椅子に兄弟同じ顔並ぶ

我が儘な足の主張で狂う椅子

止まり木に今日も噂の花開く

お茶の間の椅子に正座のおばあちゃん

椅子蹴つてそれで無念が晴れますか

椅子蹴つて立ちたいけれど妻の顔

椅子までも僕の無職を馬鹿にする

公園に僕の休める椅子がある

背もたれも西部仕込みで座り良い

【佳句】

日溜まりのベンチに並びメール打つ 春代

図書館の椅子を乗っ取り大いびき 春代

合併へ議員の椅子が駄々をこね 時雄

登校を信じて椅子は待つてゐる 武

飛ばされてもまだしがみつく椅子がある 栄呼

公園のベンチが友の輪を広げ 宏子

主のない椅子がバブルを知つてゐる 雅明

亡夫の椅子陽の射す場所に置いたまま 円女

夫の座椅子定位置のまま七回忌 栄子

身から出た錆椅子を蹴る羽目になり りのり

折りたたみ椅子も持ち出す大人気 孝明

日溜まりの二人の椅子がよく喋る イセ

寄りかかる椅子は立派な方がよい 信子

勝ち取った椅子に仮面を剥がされる 幸

飛び付いた椅子は三本脚だった つよし

ごめんねと言えずに空いた椅子ひとつ ポン吉

この人に猿の腰掛け効くどころか たん吉

反り返りすぎて背もたれ外される 初恵

椅子とりの鬼抜けられぬ闇の中 喜子

【今月の推せん句】

背凭れのない椅子だから喋れない 喜田准一

背凭れのない椅子は暗喩もしくは擬人法

であり、権力のない大衆が作者自身たろう。

ソファーよりやはり落ち着く掘り炬燵

矢野良一

庶民派感覚を言い得て妙。

うちのより立派なソファー棄ててある

俣野登志子

さりげなく資源保護など痛烈な諷刺があ

る。

【私の句】

極限に生きる男に椅子がない

椅子がある限りゲームは終わらない

秀句鑑賞

同人吟 中原 比呂志

— 3月号から

川柳塔なら句会では、各題「天」に選ばれた句を列記し、投票で当月の秀句一題を選んでいる。しかし、票差はほとんどない。兼題が異なり比較しにくい句であっても、それぞれが訴えるもの、響くものがあつて票にばらつきが生じるのである。また、選ぶ側の個性や観点の違いも反映される。だから運動競技のように一位二位とランク付けできるものでもないし、すべきものでもない。となれば秀句とはいかなるものかと悩んでしまう。「川柳三要素」に人間性、社会性など組み合わせた句を、私なりに受け止めた句を選ばせてもらった。

院長の机の上の宗教書

高橋 岳水

医学書と宗教本の取り合わせが絶妙。心のケアも求められる治療行為の中で、仏教の慈悲、キリスト教の愛の心もまた必要。科学的な医学だけでは解決できぬ悩みを持つ医師自身の安らぎの本でもある。

一行の余白残して明日へ生き

中塚 礎石

一行の余白に明日はどんなドラマが埋められるのだろうか。余白を残せた今日のゆとりと感謝。今日の余白は、充実した明日を約束してくれることでしょう。

まだ欲に走り信号無視をする

宮西 弥生

「欲に頂きなして、欲心はそのきわまることを知らず（沙石集）」がある。作者の意図は前向きな生きざまであるが、バイタリティーに富む大阪の女性像とみればユーモアがわいて出る。

気を抜くとすぐ引力に負けてくる

古久保 和子

人間関係に引力を絡ませた着眼は素晴らしい。流れに棹をさすわけではないが、強いものに何となく巻き込まれるのも意に反する。

安全神話日本も疲れたしてきた

山本 義子

海外旅行で一番心配するのが治安である。親切で安全な日本の評価をうち砕く犯罪の手口に、人間も国家も振り回される昨今である。

夫婦仲良くして信頼できる店

春木 圭一郎

商いは信用第一。品質はもとより、売り手の人柄を買い手側もよく知っている。スーパーにはないふれあいが生きている商店街。

いつまでも笛と太鼓の俺お前

米田 恭昌

オーケストラの派手さにはほど遠いが、日本の風土に合った音色で生活を共にする、夫がいる妻がいる。神前結婚で誓った絆を今も大切にしている夫婦愛。

アルバムを捲る宝を探すように

林 瑞枝

アルバムには自分史がある。文字より広がりを含んだ一枚一枚の写真はまさに宝玉。若き日のアルバムから作句に役立つモチーフが飛び出すかも知れない。

墓の中嫌です閉所恐怖症

北野 哲男

誰しもが夢の中で経験をしたであろう、暗闇に押し込まれたあの恐怖感。人間であるがゆえに恐れる死。一条の光に救いを求め、叫び声をあげる地獄絵図の中の一人かも知れ

ぬ。仏は慈悲心でこれらの人を掬い上げる。

遠回りしても避けられない関所

判断は間違つてない回り道
錢山昌枝

早川盛夫
寄り道で得た人生の隠し味

保田絹子

人生の終着駅までは、人それぞれの道を歩む。紆余曲折の道のりをどう切り抜けていくのか、良き伴侶と手をたずさへ、相談しあいながら。

節くれた男優しく卵割る

三島 崋

剛と柔の対比をさりげなくまとめ上げた佳句である。力強い男性の指が、こわこわ卵を割る仕草には戸惑いも感じられる。

縄電車今運転手ひとりだけ

岸野 あやめ

昔、路面電車には三人が乗務していたが、今はワンマンカーばかりである。環境変化と少子化で子どもの遊びも大きく変わってしまった。連れ合いを亡くした縄電車と読みとれば、寂しさにうち勝ち、しつかり縄を握りしめ直さなければならぬ。

アンテナが低いと柔な時もある

高瀬 霜石

アンテナが高いと当然、人間関係も複雑多岐にわたるストレスもたまる。必要最小限のアンテナの高さはどの範囲に絞り込むのか、これまた悩むところかも知れない。

昭和史の黒い部分に積もる雪

福井桂香

黒い部分のひとつは青年将校の反乱、二・二六事件だろう。雪の白さの下で何かが蠢いている。自衛隊海外派兵の中で考え直さなければならぬ時期にきているのではないか。

薄氷踏んでしまったハイヒール

長谷川 春蘭

若者の行動を見つめていると、薄氷を踏む思いがする高齢者の眼。こんなことを知らなかったのかと思うのは作者だけではないだろう。

年寄りには年輪生かす知恵がある

美田 旋風

ある国では「老人が一人亡くなると図書館がひとつ消えたと同じ損失である」といわれる。培われた知識、経験は次世代へ途切れることなく引き継いでゆかねば、その国の文化は滅びてしまう。

高くない鼻で人間らしく生き

原 賢

天狗の鼻ばかりでは話がまとまらない。相

手の立場も考えてこそ和が保たれる。すこし鼻の高さを下げて調和を図ることが大切。

まだ新米ですと老人会へ入る

早川 棲世

いよいよ団塊の世代といわれる人達が職場定年を迎える高齢社会がやってくる。達者な高齢者がおられる会では六十歳はまだ若い。合格をするまで神は頼られる

楠 昭子

人間の都合で神も超多忙

野田 栄呼

試験、就職、商売繁盛その他諸々、人間のエゴを拍手で御神殿へ送り込まれる。迷心の透き間を埋めていただく御利益に期待。

説法が眠り薬のように効き

村上 玄也

作家・今東光住職を思い浮かべた。住職のそばには、いつも人が集まる。話上手は聞く側の心をつかみ一体となるから眠っている魂を呼び起こすことができるのだらう。信者を眠らせては御利益も遠のくことになる。

ああしんと言うつる方の口達者

國見 蘭香

世話焼きの行動派タイプの方だろう。昔風に言えば口八丁手八丁。町内の情報家でもある。

水煙抄

秀句鑑賞

—3月号から

穴吹尚士

《社会諷刺の句》

過疎化する里が市制になるといふ

安達 厚

〇〇市×町字△△大字□□になるのでしようね。村のままで良いから、次世代対策をして活性化しろとの怒りの声です。

えらそうに言ってもみんなもとは猿

堀 正和

そうです。ブッシュもフセインも金正日も日本のあの方も、先祖はみんな猿なんです。せいぜい人間の世界で切り捨てられる尻尾にならないよう、気を付けましょう。

《人生諷詠の句》

三猿になろうなろうと肩が凝る

猪 森 スミエ

実は私もそうなんです。でも、三世代同居で、おジイちゃん、おバアちゃんと愛されるためには肩の凝りくらい我慢しましょう。

形あるものより心贈ります

酒井 美美子

贈り物をするお金はあるのですが、それでは気の済まない誠実な方ですね。形あるものはいつか壊れますが、温かい心はいつまでも記憶にのこります。

理屈ではそうだがうまくいかぬ運

岡田 幸生

計画を立ててがんばったのに、うまくいかなかったのは女神の責任と主張されています。庶民はみなそう考えて細々と生きています。

ほんのりと女酔わせた屋の酒

宮本 末子

真つ昼間から、誰に酔わされたかが問題です。相手は男性ですか。二人きりですか。オバサンだけで吞んでもいても、絵になりません。

日だまりを選んで歩く親子猫

伏見 雅明

「ほのほの」という言葉が浮かんできます。作者の親子関係かもと深読みすると、子を想う親の気持がしみじみと伝わってきます。

ああ恋は優しい顔にしてくれる

伴 洋子

もう昔の事なので私には思い出せませんが、誰もがそういう顔になるのでしょうか。「ああ恋は」の詠嘆調が効いています。

言いかけてなんでもないと口つくむ

川島 和歌子

言いかけて口をつぐむからこそ、相手は気になるのです。このテクニクを会得するには、相当の習練が必要です。人生の達人です。《ウィットに富んだ句》

いける口ですなと猪口がにじり寄り

升成 好

両手に徳利と猪口を持って、満面のお愛想笑いで、得意先をもてなす情景が目につきます。「猪口がにじり寄り」に惚れました。

燃やすのが勿体ないようなお棺

萩野 像山

ご家族を愛し、愛された方が亡くなられたのです。ね。総松造りのお棺でしょうか。紫煙が極楽へ極楽へと靡いていることでしょうか。

暇そうな神をみこんで願ひ事

増井 ヨシ枝

有名な神様には人が殺到します。寂れている神様なら、お賽銭を弾けば、無理難題を持ち込んで、きつと御利益があるでしょう。

初耳とびっくり顔であの話

青砥 菊枝

良いお人柄です。いつも相手の心を気遣って、何回聞いても上手なびっくり顔をされています。『あの話』で締めました。

〈図書紹介〉

川柳の群像

東野 大八 著

田辺 聖子 監修・編



集英社・330ページ
定価2500円+税

本誌『川柳塔』に、昭和五十七年から平成十三年まで二十一年間にわたって連載された東野大八執筆の『川柳の群像』が、そのままの書名で集英社から出版された。かねてからの労作を単行本にしたいと試みてきた私としては、念願が成就した思いである。

しかも、『古川柳おちほひろい』『道頓堀の雨に別れて以来なり』などの著作があり、きわめて川柳について造詣の深い作家の田辺聖子さんが監修・編にあたり、巻頭七ページにわたって、大八氏との交友や川柳についての

思いを述べている。

本書の礎稿となった『川柳の群像』に掲載された川柳作家は二七〇人の多数に上るが、この企画に参加した橋高薫風氏と私の意見も参考にして、編集の段階で一〇〇人にしぼられている。大阪、東京を中心にしながら北海道から南は九州まで網羅し、活動した時代や所属の柳社に偏らないように配慮され、そのプロフィールや代表句を挙げ、人物川柳史」と言っている内容となっている。

ここで登場人物のすべてを挙げることはできないが、古くは慶応元年生れの古川柳研究家の西原柳雨に始まって、明治川柳の創始者である井上剣花坊、坂井久良伎、それに続く六大家と呼ばれる麻生路郎、川上三太郎、岸本水府、梶本紋太、前田雀郎、村田周魚とそ

れらの人脈につながる人たちが名を連ね、変ったところでは、鶴彬、ブライス、前田伍健、森田一二、吉川雉子郎も登場している。

なお、川柳塔社関係では、麻生路郎、麻生霞乃、尼縁之助、川村芳郎、北川春果、小出智子、清水白柳、須崎豆秋、高鷺亜鈍、谷垣史好、中島生々庵、西尾菜、橋本緑雨、福田山雨楼、不二田二三夫らが掲載されている。

しかし、聖子さんが触れているように、日に追われて執筆した大八氏の礎稿を追跡調査して異同を正し、客観的資料として価値あるものとすべく努力した。黒子の田村義彦氏の苦労は、本書を学芸書として位置づけた。そして巻末に、古藤愛子さんが「父、大八のこと」と題して一文を綴っている。

終りに、「川柳作家ならびに研究者にとつて、本書はこよなき文献であり、好個の読み物ともいえる。：本書はまた、東野大八氏が川柳人生のすべてを挙げて、川柳と川柳作家に捧げた頌歌ともいえよう」とする田辺聖子さんの言葉を紹介して結びとしたい。

(田中 正坊)

明治・大正・昭和の川柳作家一〇〇人

本社 三月句会

三月八日(月)午後一時
アウイーナ大坂

今冬最後の寒気が残った8日、118名の参加を得て本社句会が開催された。冒頭、みづ子副主幹から東京で発足した「川柳塔のぞみ」につき、発起人の播本充子さんからの依頼でお礼が述べられた。

お話は川原章久氏。道修町の瑠珈屋へ丁稚奉公した時の数々の苦勞話の披露。大番頭から丁稚までの階級制度の中で、朝食は沢庵でお茶漬だが沢庵が嫌いでお茶漬だけを流し込んでいたり、夜は丁稚の雑魚寝で新入りの氏が南京虫に集中的に食われたり、往生したそう。お家はんとご寮人さんの確執に巻き込まれ、仕事外のこと黙って堪えざるを得なかった。ほんほんの学校からの呼び出しに命じられて親代わりに向向き、教師が呆れた話には満場大爆笑であった。

さげない追憶談の中に戦前の色が濃く残り、かの「細雪」を丁稚サイドから見た、正に「昭和は遠くなりけり」の感のする、興趣に富んだお話であった。

月間賞は小泉ひさ乃さん(大坂市)に輝く。
(司会)玄也(記名)恵子・真理子
(受付)睦子・倫子(清記)義
席題「絵」 鴨谷瑠美子選

絵心は無いが美人はすぐ描ける
母さんの顔になつてる團児の絵
絵心の解る夫だが短気なり
浮世絵の一枚娘にもゆずれない
絵の人をほめて画伯の名を知らず
人の世の邪念を払う日の墨絵
政治家よ絵に描いた餅もう要らん
初めてのデートは見栄で絵画展
賞もらい絵がだんだんと悪くなり
わたくしが描くとリンゴも桃もみな同じ
僕の絵は思案の色がてんこ盛り
本物と信じてくれぬ我が家の絵
春の絵は自信過剰な花ばかり
似顔絵にはつきり皺を描かれてる
世界中にたつた一つの私の絵
贋作を掛けて話題のできた部屋
絵手紙に湯の香をのせて便りくる
掛軸の幽霊でたり入つたり
絵に描くと頼りにならぬ犬である
父の絵の処分に困る形見分け
逆さまと誰も気付かぬピカソの絵
マスクしてマフラーもして梅園きに
やり直し出来ぬ絵筆に四苦八苦
指切りもしたのにまたも絵空ごと

房子 笛生 柳石子 冬葉 とし子 弥生 楓楽 和夫 公誠 孝一 重人 千里 朋月 小風 耕治 一風 朋月 美代子 弘風 玄也 哲男 欣子 修

デッサンを待ちくたびれる絵具皿
妻の絵にそつと笑くはを足しておく
今日というキャンパス誰にでもくれる
背を向けた故里だけどぬくい絵だ
下手だけど絵手紙ならば喜ばれ
泣き笑い今日も独りの絵を描こう
似顔絵が決め手となつた逮捕劇
絵に描いて花の時間をとじ込める
佳 鶏もカラスも埋める春の戯画
雪の絵にポストがあつたはつとする
見た人が叫びたくなるムンクの絵
モナリザが僕に何かを言いたそう
それぞれの春の絵を描き果立ちゆく
富子
にちようび絵になる雪が降り出した
月子
冬地の絵をねこそぎさらう春一番
度
絵を描ける人は天才だと思ふ
天 軸
ばかし絵にする情熱の胸あたり
義
兼題「センス」 米澤 倭子選
百歳のセンス輝くタクト振る
ご当主のセンス客間の違い棚
ユニクロで磨く定年後のセンス
飾らないのが私のセンスです
何よりも靴を磨いているセンス
和香 昭三 真理子 保州 シマ子

古希過ぎて赤を着こなすのもセンス
 飢える者のセンスで風を読んでいる
 お下りの服はセンスでカバーする
 まっ白な肌着にセンス匂わせる
 アドリブのセンスさながらプロみたい
 奇抜さも若いセンスでニューモード
 先輩の背に煌めいているセンス
 センスの良さが光る一点豪華主義
 無理でしたセンスの違うお方です
 どんぐりの群れで光っているセンス
 友達とのセンスを真似て他人めく
 絵のセンス無理だと笑うDNA
 お人柄にじみ出ている良いセンス
 胡蝶蘭の気品フレッシュなるセンス
 黒髪でセンスの良さを生かして
 燐し銀のセンスに女は弱いもの
 母さんはセンスがないと娘の助言
 若やいでセンスも光る老いの恋
 私のセンス和製ですのと京言葉
 優しさを添えた気配りして貰い
 センスより財布が決める試着室
 政治家のセンス庶民とかけ離れ
 妃殿下のお帽子はすに被られて
 百均をセンスの良さで着る憎さ
 値段よりセンスですわとバーゲンへ
 文庫本のカバーを皮にするセンス
 着心地がいいのでセンス気にせず
 伊チローのセンス努力も人の倍

美代子 森子 鹿太 重人 一風 寿美 潤子 玄也 哲男 美明 冬葉 弘風 寿海 雅文 はじめ 理恵 富美 セツ子 昭天 洋 甚一 保州 淳司 哲男 瑠美子 月子 たもつ

草花を生けるセンスの暮し方
 大阪のセンスが好きでミナミ好き
 返されたひと言センス良すぎます
 たちの芽の春のセンスを皿に盛る
 人
 無造作に活けてセンスの決まるバラ
 地
 ライバルのセンス斜めから盗む
 天
 人として生きるセンスはハートでしょ
 軸
 斬新な嫁のセンスに追いつけず
 兼題「奇麗」 松原 寿子選
 リズムまで奇麗小川に春の音
 奇麗から希望になって翔んでいる
 はめられた奇麗ますます輝いて
 青い目もオオワンダフル通り抜け
 上っ面だけの奇麗はタイクツだ
 介護する奇麗ごとではすまぬ愛
 呆けてからとてもきれいなになった母
 どこまでも奇麗な海に立ちつくす
 食べっぷり見事奇麗にたいらげる
 奇麗好きの嫁に気疲れしています
 美女に棲む悪魔もきつと美しい
 奇麗こと言うより大事心がけ
 熱帯魚の肌へうっとりしてしまふ
 奇麗な目してるあなたに溺れそう
 奇麗ことのうしろに闇が見え隠れ

恵子 洋 かりん 隆盛 孝一 朱夏 朝子

想い出は帰って来ない奇麗な瞳
 汚れた机が奇麗な指で光ってる
 麗しい脱皮だ少女蝶になる
 千本の奇麗なバラに騙される
 いい子して奇麗な嘘がついぼろり
 無口だが男奇麗に歳を重ね
 ピエロから奇麗な涙みた鏡
 酒あればもっと奇麗な通り抜け
 奇麗こと言うて私が瘦せてくる
 奇麗ごと信じて足を掬われる
 借金に奇麗さっぱり忘れます
 わたしより奇麗な人はみんな敵
 健康の秘訣知ってる奇麗好き
 コンプレックス隠して話す奇麗こと
 風の耳打ちきれいに散らす花吹雪
 離婚して奇麗にあくが抜けました
 違反なし僕はペーバードライバー
 冬ソナタ ロマン映像見事な美
 きれいな女に咲けぬが結ぶ大きな実
 綺麗な女について乗りたい専用車
 煩惱を奇麗に消した白い道
 美しく崩し草書は夢を呼ぶ
 人
 失恋もちょっと奇麗に書く日記
 地
 百歳の皺は奇麗なアクセサリー
 天
 ガラス拭く奇麗な明日が見えるまで

孝一 満津子 富子 愛論 欣子 一風 睦子 尚士 ダン吉 鐘造 弘風 天笑 寿海 文 隆盛 房子 一歩 舞夢 洋 甚一 和香 一風 一歩 光久 たず子

水盤に女らしさが盛つてある

兼題「抱く」

池

森子選

年齢はどうあれ夢を抱いている
正義感抱いて死にぞま見つけたり
春なれば春になりたい風を抱く
車座になって秘密を抱いている
春の海誤解を抱いてさわざ出し
梅一輪多情多感抱くしずく
マスクしてうす桃色の孫を抱く
妻の譜にうすくれないを抱くなり
抱かれない風が私をすり抜ける
骨つばの母へ不幸を託びて抱く
バラ千本抱けるほどの愛を持つ
解かれて私にもどる腕の中
バラ抱いたつもり刺だけ残される
約束を破った小指のはてり抱く
夕焼けを抱いて枯野を行く老いか
心の揺れ抱いて岬の風に付つ
遠い日の火種真面目に抱いたまま
残り火を抱いて原野に佇ちつくす
ひざ抱いてことは着詰めている詩人
君の眼に疑い抱く余地がある
騒ぐ血を有め有めて抱いている
嘘をつき通して石を抱いている
ずかずかと西陽私を抱きにくる
蒼いおさい乳房に抱いている詩人
信じない人も抱いてる神の腕

照子 螢子 能子 義文 柳弘 篤子 茜子 潤子 寿美 柳右子 アキ 睦子 睦子 萬子 一風 アキ 楓子 泰子 保州 雅文 寿子 真理子

抱いたのはまほろし二度と振り向かぬ
桃は移り気身こもる花弁抱いて春
初恋を生涯抱いたまま朽ちる
黒髪多情へ風は殺意抱く
抱き続けたばらの蕾が今開く
神様に抱かれてるのか運がいい
抱擁の視野にはらはら散るさくら

佳

情報に抱かれて情報に溺れ
憂鬱を少うし抱いている夕陽
ふるさとの風に抱かれビュアになる
多情多恨紙人形を抱きしめて
嘘一つ抱いた女が美しい

人

抱きしめてしまった刺のある女
春近し逢えは溢れるものを抱く

地

自分を抱く三月の雪まみれ

天

火の鳥に抱かれて翔んだ冬の河

軸

兼題「根」

三宅

保州選

根気よくリハビリ春に会えそう
娘の家で居心地よくて根が生える
アメリカに押さえられてる首根っこ
すぐに乗る根は単純なお人好し
根つからの善人なので芽が出ない
根つからのお人好しです母ゆずり

みつ子 柳弘 睦子 愛論 いわゑ 天笑 洋 祥昭 扶美代 月子 美代子 美明 富子 つづや 美代子

ぶつから棒だけど根はよいお方です
根つからのお人好しにもある悩み
あの人も視点かえれば根はやさし
色付けて根掘り葉掘りを喜ばず
根も葉もない噂に馬鹿がついている
居心地がいいのですぐに根が生える
策尽きた上司根性論はかり

根回しの下手な絵馬にもさくら咲く
根回しの上手い男がかかる罫
根回しに行くど帰らぬ父の癖
かわいがり過ぎて根腐れ徒の花
根っこではもう分り合ってる無口
飲みだすと根つ子が生えてくるわたし
根が生えた妻に上手に使われる
考える輩で人間根が切れぬ
根分けした隣家の花に嫉妬する
ほうれん草の根つこの赤は愛たろう
根を張って母はいのちの準備する
わたくしの根つこに亡父の火の柱
根の深い運命線に操られ
懐の奥に根づいた鬼がいる
罪状を問うたら根っこ軋みだす
お座敷にアレ竹の子が顔出した
成績は言わず根気よさをほめ
一子相伝根っこしつかり太らせる

佳

バイオチの根にはジョークが通じない
未練まだあるので少し根を残す
四捨五入捨てた根つこに花が咲く

甚一 欣子 トミノ 和夫 比ろ志 泰子 玄也 瑠美子 利昭 淳司 能子 朋月 五月 弥生 和夫 たす子 扶美代 森子 孝一 篤子 美代子 千代 雅文 朱夏 楓子 美代子 鹿太

いつだって根っこはサイン出している
男です根も葉もないと言いません
修

根の部分だけは故郷に置いてある
鹿太

ええ加減ばけて根に持つ事もなし
天笑

花褒めて根を踏んでいく人の列
真理子

球根になって私を遺したい
軸

兼題「掘る」 河内 天笑選

初掘りの筍御飯春の色
利昭

犬の鳴く瓦礫の隙間掘り下げる
一風

掘り返せば土はふんわり生かえる
たもつ

お互いに掘り出しものと思ってる
一歩

欲に目が眩んで墓穴掘っている
富美子

大阪を掘れば温泉出るといふ
志津子

迂闊にも自分の掘った穴に落ち
雅明

タイムカプセル長い眠りの玉手箱
隆盛

掘りも掘ったり街の下にも街がある
かりん

穴掘って蹴りたい背中二つ三つ
美明

いらんことまで喋るから墓穴掘る
玄也

掘り出され戸惑い見える埴輪の目
瑠美子

山茶花が散ったあたりに穴を掘る
朱夏

掘ればまだ少し出てくる知恵があり
扶美代

竹ペラの夢真実を遅延と掘る
一風

ロマン掘る火星に残る水の跡
洋

掘りこたつ恋がちょっとかいかけてくる
遠野

路の墓掘ってあたりを春にする
たず子

人類はやがて火星に井戸を掘る
鹿太

真相を掘ると地雷に触れるかも
楓

掘り下げて見れば矢つ張り黒い金
萬

初対面掘り葉掘りはやめましよう
柳右子

欲だけはどこを掘っても湧いてくる
保州

初恋は道頓堀に捨てました
志津子

身に合わぬ穴をせせと掘る野望
寿美

郷土愛掘り起こして国訛り
遠野

青春がアフリカの地で井戸を掘る
尚士

お静かにと縄文人が言うてます
義子

あつちこち掘るとチヨンボが出て困り
月子

芋掘りを終えて見上げる青い空
たもつ

行間に埋もれた本音掘ってみる
比志

掘り当てた人脈だけは譲るまい
則彦

佳

ころころと笑い転げるいもを掘る
度

バーゲンの掘出しものも着るままに
富美

鶏の断末魔聞く穴を掘る
富子

どん底で気の合う友を掘り当てる
扶美代

根掘り葉掘り聞いてしまつて枷となり
茜

ばあちゃんがこつそり穴を掘っている
潤子

山分けをしようとか穴を掘っている
恵子

うっかりと私が入る穴を掘る
小泉ひさ乃

菜園をみみず掘り返してくれる
軸

川柳塔のぞみ発会句会

(川柳塔かんとく仮称改め)

河内天笑主幹、播本充子理事の発起による川柳塔かんとく(仮称)は、2月28日東京都千代田区のアルカディア市ヶ谷で、出席・投句者12名を得て盛大に開催された。まず、この会を「川柳塔のぞみ」とすることの承認を得て、東京における川柳塔初の句会がスタートした。橘高薫風名誉主幹からは「路郎師の念願が叶った」との挨拶があった。

当日はサークル棒様の吟行もかねて大阪から15名が参加。なお当会はしばらく隔月開催。世話人の充子理事から、遠方の皆さんには投句でこの会を盛り立てて欲しいとの依頼があった。

当日の天位

まっ白になるまで海と見つめ合う

(美文選) 藤田 泰子

ふくらんだ書希望と名をつける

(紀伊子選) 太田扶美代

一行も書かぬ詩人で雲の上

(晩秋選) 吉本 瘦児

ネクタイの赤が主張を譲らない

(周平選) 大河原信昭

自分を叱る光る自分になりたいから

(みつ子選) 西口いわゑ

4月句会の案内はP 118



追悼

尼れいじさんを悼む

竹治 ちかし

一月十六日の夕方、突然入ってきた訃報に思わず「嘘、うそ、嘘」と頭の中が真っ白になりました。三日前、病院に御見舞に行った際、「入院した時よりだいぶ良くなりましたよ」と奥さんからお聞きし、ほっとしましたのに……。病院では立って話していた私に気を遣って、椅子を勧めるように奥さんに指図されていたので、「れいじさん、頭の方は大丈夫だね安心したよ」と、冗談など言って別ればかりなのに……。

思い起こせば、れいじさんとの初対面は、二十一年前昭和五十八年の九月、尼緑之助先生の出版記念の句会場ではなかったかと思えます。ただ挨拶を交わしただけのことでした。それ以後、大きな句会が開催される時には出席され、お世話をされるようになりました。平成四年頃からは、例会にも出席されるよう

になり、私とのコンビが出来上がったと思います。平成九年、いずも川柳会の会長になられてからは、更に意欲的に川柳に取り組んで来られました。れいじさんは、いずも川柳会の三代目会長として、二代目久家代仕男会長亡き後、七年間にわたり頑張ってこられました。まだまだ頑張って貰わなければならなかったのに、かえすがえすも残念で残念でたまりません。

お父さんがいずも川柳会の創始者、尼緑之助氏ということで、色々と気も遣われ、大変な事も多くあったことと思います。あなたは、心優しい心配りの豊かな人でした。句会に家の庭で咲いた花とか、果実とか、よく何かを持って来られ、さりげなく会を和やかにされていました。気取ったところがなく、誰とでも気さくに、明るく話をされる人でもありません。

良い人だからこそ、神様はこんなにも早く召されたのでしょうか。

ここに、近詠の中から抜粋して、ありし日のれいじさんを偲びます

(生活の中のれいじさん)

落ちこんだ日にもどっかい空がある
ゆつくりと沈む夕陽に亡父を見る
病み上り妻の空気が濃くなる

(人に優しいれいじさん)

人が居るよき友がいて生きている
今日会った人皆友達だ秋日和
他家の犬二匹に私頼られる

(自分に厳しいれいじさん)

まあいいかそんな私に鞭を打つ
いぶし銀表になどは出たがらぬ
腰痛むきつと仏が打ったムチ
(お酒も好きないれいじさん)

路が伸び葡萄が伸び酒がのび
飲んでのんで飲んで父の日が終る
百薬の長が消された処方箋

釋敬禮居士 享年六十八歳

どうか安らかに眠り下さい。そして天国から、いずも川柳会を見守って下さい。

合掌

第19回国民文化祭 ふくおか2004

川柳 作品募集要項

～ 飛梅に乗って広がれ 文化新時代 ～

一、応募受付期間 平成十六年四月一日(木)～六月三十日(水)(当日消印有効)

二、応募規定

作品 一人各題二句詠(未発表作品に限る)

応募料 一人につき一、〇〇〇円(但し、海外投稿者及び小・中・高校生は無料とします。)

(3) 応募方法 福岡県実行委員会作成の「募集要項」をご覧の上、所定の応募用紙を使用してご応募ください。

(4) 応募先 〒832-8601 福岡県柳川市大字本町八七一 第19回国民文化祭柳川市実行委員会事務局

三、宿題・選者(事前投句) 一般 選者

蟹Ⅱ竹本瓢太郎(東京) 冒険Ⅱ長谷川冬樹(新潟) 帰るⅡ近江あきら(東京) 舟Ⅱ森中恵美子(大阪)

(事前投句) ジュニア 選者

蟹Ⅱ北村 泰章(高知) 冒険Ⅱ津田 暹(千葉) 帰るⅡ西出 楓楽(大阪)

白Ⅱ間瀬田紋章(宮崎) 揺れるⅡ大西 泰世(兵庫) 棘Ⅱ新家 完司(鳥取)

第二次選者

岸本 吟一(東京)

鷹野 青鳥(福岡) 吉岡 龍城(熊本) 今川 乱魚(千葉) 斎藤 大雄(北海道)

四、賞(予定) 文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・福岡県知事賞・第19回国民文化祭福岡県実行委員会会長賞

福岡県教育委員会賞・柳川市長賞・第19回国民文化祭柳川市実行委員会会長賞・柳川市教育委員会賞・社全日本川柳協会会長賞・福岡県川柳協会賞

五、発表会場 川柳大会(入賞発表、表彰式、当日句、選評)

平成十六年十一月十三日(土) 10時30分～15時30分 柳川市民会館

合同大会(上位賞の表彰式、記念講演会)

平成十六年十一月十四日(日) 10時00分～12時10分 大宰府市中央公民館

入選作品は作品集として刊行し、応募者全員(小・中・高校生の部は入賞者)に無料で配布します。

六、問い合わせ先及び募集要項請求先

第19回国民文化祭柳川市実行委員会事務局 〒832-8601 福岡県柳川市大字本町八七一

TEL 〇九四四-七三三八一一 FAX 〇九四四-七四一五五五

七、主催者

文化庁・福岡県・福岡県教育委員会・柳川市・柳川市教育委員会・社全日本川柳協会・福岡県川柳協会

第19回国民文化祭福岡県実行委員会・第19回国民文化祭柳川市実行委員会

ロボットの眼鏡

太田 扶美代

父は八十二歳で白内障の手術を受けた。眼鏡はかかっていたが、日常生活に不自由はなかったので、少しでも危険が伴うのなら、手術は止めてほしかった。

「御飯とオカズ間違えたこともないし」と軽く反対したが、いまさら断れないと言った。

病院の規則で一週間だけ家政婦さんをお願いした。若くて美しい家政婦さんに、父は有頂天になり、私たちにもう来なくていいと言いつつ始末。それでも用事もあり、毎日病院を訪ねた。ふだんは、一人暮らしの父を、元気をいいことに、弟妹たちも減多に訪ねなかったで、家政婦さんを交えて、父は本当に嬉しそだった。

退院して一年が過ぎた頃、もう一方の目も手術すると言いつつ出した。「それでエエやないの！子供みたいなこと言わんといて！」怒つてみたけれど、もう引込みがつかないと言う。

そんな理由で、また体にメスを入れるなんてどうしても納得ができなかった。

薬箱から出してきた大きな眼鏡を見て、私は仰天した。まるで水中眼鏡だ。手術が成功したらこれをかけるのだと言う「何で、怖い思いをして、手術して、そんなロボットみたいな眼鏡かけなあかんの！」

二度目の手術は長女の私が付き添った。その朝の父は遠足に行く子のようにハシヤいであ病室に入ってから興奮は続き、高ぶったまま喋り続けて夜を迎えた。私がウトウトすると、「もう寝たのか」とがっかりする。話は一方的で若い頃、弁護士を目指し勉強したことや軍隊で活躍した話など、ほとんどが自慢話だった。

夜が明けると、手術のことが心配なのか大人しくなり、励ますつもりで話しかけても、すぐグチになる。父の揺れる心が伝わってきた。そんな間にも看護師さんは、手術の準備で何度も出入りする。二十分おきの麻酔の目薬を四度さし終えて出て行った時だった。

不意に父が私の顔を覗き込み「逃げるか、扶美ちゃん」と言った。一瞬、意味が分からず、キョトンとしていたが、反射的に頷いてしまった。

その時である。ドアがノックされ飛び込む

ように院長先生が入って来られた。

「やあ、お早よう。今日は僕と一緒に頑張りますよ」と言いながら、父の手を取り、振り回すように揺すぶった。「あ、あのー、今日のことですが……」と言いかけたら、手術のことを心配していると思われたのか「執刀は僕です。安心して下さい」。先生は力強い一言を残して出て行かれた。

「急やから言い出しにくかったワ。詰所で話してくるワ」

「もうアカン。院長に見つかったから逃げられへん」。朝一番の手術は成功し、子供達も毎日顔を出し、美人の家政婦さんはいなかったけれど、父は上機嫌だった。

父は目の手術などどうでもよかったのかも知れない。入院すれば毎日、子供や孫たちが来てくれる。束の間と分かっていても、そんな日が欲しかったのかも知れない。そうとすれば、私が父に言った言葉はきつかった。父を責めた言葉が、悔いとなって心を離れない。

在りし日の父を想う時、真つ先に脳裏に浮かぶのは、あの朝の出来事「逃げようか」と、私を覗き込んだ父の顔である。

あの珍奇なロボットの眼鏡は一度もかけることなく、遺品となった薬箱の中に、あの日のまま入っていた。

みぞの塔

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川呂万報

どの子にもひいきなどない母の愛

不意に鳴る電話一瞬間くなる

はからずも不意の御縁で金婚へ

不意に肩抱かれてハツと夢さめる

不意の客驚いたやろ火星人

不意をつく戦術を練る詐欺師達

不意を衝く不整脈をも手なすける

不意に来て令状という怖い文字

割り込んで平気な顔のコンバクト

古女房小言も平気聞き流す

怪我しても祖母が平気と睡をつけ

指切りのあとは平気で渡す鍵

大戦の痛み忘れてる平気

貧乏は平気と言えた若かった

好きなだけ借りて平気で自己破産

五センチの段差が老いを妨げる

弁護士がカレー裁判邪魔してる

昼寝とき間違い電話邪魔をする

解りかけた幸せ持病魔をする

妨害の電波世界を闇にする

成人式調子外れが騒ぎだす

ばあちゃんのデートに孫がついてくる

耳元で蚊が瞑想の邪魔をする

満月に妨害された二人つれ

安全が妨害されて卵泣く

族がいてうまく舞えない改革案

いい噂くるくると舞い戻る

落葉舞う累々とある青テント

デパートがてんでこ舞いの福袋

ロース川柳会

山崎

君子報

遠い日の出逢い支えに子と生きる

優勝のスパイク土はつけたまま

少しなら積ってほしい庭の雪

記念樹は今もここにキラキラと

出来ることただ祈るのみ自衛隊

出逢うから別れが来るのと桜散る

新春に記念の写経墨香る

親友へ世界遺産の切手貼る

記念日の夫婦小さなケーキ切る

出会ってから六十余年今至福

うぬぼれを胸のどこかに棲まわせる

毎日が記念日古希をしたたかに

創立百年重みつたえるオルゴール

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

反省を猿に学んで世を渡る

猿は木に空中漫步お家芸

みよ子

仁緑

路子

基

苑子

呂万

英雄

一脩

ダン吉

狸村

哲子

みつ子

藍

トミエ

貴代子

孝一

美籠

いわゑ

武庫坊

年代

義子

君子

二〇〇四年十支の掛軸三番隻

申年へ知恵を貰って暮らしたい

進化して猿も人間くさくなる

黄昏は猿真似でゆく気も楽に

三猿の誓い新たに屠蘇を酌む

申年に良い事だけを掴みたい

猿まねを上手に利用生きる道

人間が木から落ちると笑う猿

町へ出て追われて猿は腑に落ちず

高槻川柳サークルの花

川島諷云児報

すべらせた口が招いていた不運

ウグイスを招いて春を待つ財布

会いたくない人と一緒に招かれる

定年後招待の声とんと減り

税務署に期日指定で招かれる

招かない客連れて来て妻の角

風船おしさん昇ったきりでそのまんま

出発の日取りは茶柱でさめる

朝焼けの知覧飛び立つ特攻機

だんだんと背が曲った妥協癖

ライバルにまずい姿を覗かれる

凱旋のときのポーズは決めてる

後ろ姿血は争えず父に似る

ひっそりと生きる姿に欲がない

流れ星姿消されしかた案じ

裸木の自分信じている姿

終電車力の抜けた顔はかり

被災地の炊き出し割草着が光る

公美枝

鈴木

和枝

豊枝

智恵子

久子

弘子

正光

雄々

萬美

晴美

スミ子

治三郎

尚士

孝一

あやめ

稲子

石舟

典子

庸佑

宏章

武史

節子

義子

みつ子

メ女

泰雄

割烹着脱いでほつこり袖子の風呂山典
インスタントは見向きもしない割烹着
割烹着似合う男の料理室
割烹着良妻こっこしています

エプロンに世代譲つた割烹着
こしらえた暇がこびる不意の客
生きてきたよつびきらきら星一つ
正月のみ籤だけ振いてある

ひと癖もふた癖もある唐辛子
律儀にも整骨院から年賀状
輪の中に居て逆風に氣を許す
誰にでもぬぐい切れない過去がある

川柳塔おっぱい吟社 木村あきら報

太陽の下では嘘はつけません
種袋振れば土恋う音がする
咳すれど氣遣う人もなき孤独
貧乏くじ引いたと夫婦仲が良い
古希越えて甘い言葉がまだ欲しい
まだ女高鳴る胸を何としよう
味噌汁の具の多さにも愛がある
同窓会友の本音がまたボロリ
減反の国の向こうに飢餓の国
帰省の子何時か背中に亡夫を見る
嫁ぐ娘へ溢れる母の愛を見る
里帰り母の雨傘迎え来る
幸せは笑顔か知れぬ笑つとく
愛してる言わぬ夫で手まめです
年下も兄貴の嫁はお姉さん

子 典 芽 一 人 恵 子 夫 激 惠 栄 龍 児 諷 云 初 恵 ひかり 文 仙 吟 笑 賢 勝 治 延 あきら 八重子 いさむ 寿々女 よしみ 輝 夫 放 任

こばれ種そこから芽吹く物語
決意して新年迎えドジ一つ
冬道路銀杏時雨に追い越され

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

しあわせを売りたい誰か売ってんか
売られた時に喧嘩買う元氣
福袋買うふところが炎でいる
急に変わる妻の検査が手厳しい
花変わり人変わらせる世に地の温み
憎しみが愛に変わっていく炎
白い巨塔黒い企み渦を巻く
企みをみんな見抜いた熱帯魚
カクテルの底に沈めた悪巧み
企みに乗らない呪文かけておく
企みがレントゲンにも写ってる
札束の企みが好き金バツジ
極めればなお遠くなる芸の道
芸の無い無冠の父で長生きで
芸妓減る上七軒に冬の月
半玉に蔽くあたる撥さばき
人形がぼろぼろ涙流す芸
一流の芸で舞台が引き締まる

西宮北口川柳会 黒田 能子報

父の樹の天辺一匹の鬼が棲む
節分に不況の鬼を追つ払う
看取られることなく鬼の孤独な死
内に住む鬼を見つめて豆を撒く

坊太郎 市 長 貞 月 朝 子 シマ子 弥 生 章 久 度 美弥子 賢 子 雅 文 とみを 和 子 秀 夫 あや子 太 一 愛 論 幹 生 良 子 信 治 湖 風 求 芽 昭 房 子 章 子

佳句地十選 (3月号から) 青 枝 鉄 治

のぼせるなバツジ外せば粗大ごみ
悪政を見抜けぬ民もまた悲し
ドイツ語を混ぜてさりと性を説き
故郷の匂いが詰まる母の便
内部告発見て見ぬ振りが出来ぬ性
わが天女ときどき角も牙も出ず
泥鰌棲む欄干守て母ひとり
日暮れ時イラク派兵の列を思う
変わり身が早く主流の列にいる
年金が破産しそうな長寿国

新聞記事に泣いているのは鬼だろ
いつの世も優しい鬼はきつと居る
想像の世界へぶらり映画館
懐かしい我が初恋に似た映画
たおやかなしぐさ思い出のただけに
たおやかな人たおやかに自己主張
たおやかに生きて風には逆らわず
壁面の美女たおやか太古の笑み残す
たおやかに踊り明かした郡上盆
法要を終えてみんなの和む顔
珍らしくおごつてくれて和む友
ひとりだけの時間柚子浮く終い風呂
和やかになると大阪弁が出る
お帰りと犬がなごます独り者
ゆとりなどないが孫なら五人いる

富喜子 絹 いわゑ 江 美 キク子 嘉 彦 たす子 孝 一 昭 三 歳 子 奮 水 石 舟 哲 男 五 月 鹿 太

ゆつくりでいいよと言われ慌て出す
ベット犬ドレスアップでお散歩か
バージロードの父は見馴れぬ父である
老化とやだんだん荷物重くなる
おいでませおきに訛りに迎えられ
以心伝心母も便りを待っている
糠漬の亡母の秘伝は嫁が継ぐ
潮騒は挽歌か遠い子守唄
さくらさくら老いを忘れて口ずさむ
椿ボトリ女怨念捨てました
後戻り利かぬボタンの掛け違い

尼崎尾浜川柳会

田辺 鹿太郎

かあ様の雪ふわふわと肩に乗る
雑魚らしい息づかいなら得意です
親し過ぎ今さら名前など聞けぬ
温もりをナースの笑顔から貰う
予約して食事するほど美味しいか
さりげなく予約匂わすチョコレート
寒の月野山の白に冴えざえと
寒い日はキューと一ぱい明日の活
握った手の温もり今も忘れない
腰痛は温泉宿においできた
日の丸とした年金の予約揺れ
出来るなら百歳予約する強気
リフォームのチラシが入る寒い家
極楽に席予約して寺詣り
居るだけで温もり伝わる夫と住む
英語にも似た津軽弁聞く旅館

てる トミエ 比ろ志 貴代子 美代子 光久 曙蝶 松煙 春蘭 美龍

富柳会

池

森子報

いつも通りいつもの靴のある暮し
枯葉ならサツサと散れというパッハ
二人の春ますヴィバルディ予約する
君だれと何をたくらむ鬼薊
寝ることは仕事と友のアドバイス
和服には和服の顔になる女
寒々と一人で降りる無人駅
愛憎も薄れ流れるいわし雲
人生の余白ゆつくり流れよう
葛藤が続いて指先まで水雨
花描き花の心に問いかける
餅肌が自慢の老母も車椅子
定年の庭に真つ赤なバラの花
休日自家発電に切り替える
余命数減って輝き増す命
再会で輝き合った笑い笑顔
息をとめ花の命の音を聞く
年金問題に終始するOB会
年金の灯に揺れながら翅のばす
酒二合悟りの父の高いびき
原点を思い出させる丸い餅
輝いて友は他人になっていく
さよならが言える女のうすい紅
潮騒の浜ふるさことが耳の底
焦土から立つ少年が輝いて
空白がない人生だ窓がない

比ろ志 義芳 孝一 正治 美龍 求芽 紫香 和子 登子 アキ 深雪 高鷲 亮幹 奈保美 一慧 誠 宏至 紅紫朗 こっこく 和代 巳代一 順子 鐘造 鬼焼 政義 初太郎 奏子

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

少年へ脱皮輝く瞳を見たか
私が輝くまでの鶴を折る
冬最中亡夫の血の温もりを
先生の眼が映っている瞳
哀しきは風の紅萩もつれあい
誰にも言えない私だけの枯野
手作りの壺もほこるぶ梅の花
大好きよいつも輝いてるあなた
親子孫絆まるめる暮れる餅
年金が目減り酸素が薄くなる
シャッターチャンスあなたを一人占めにする
瞬間の命を食べているカメラ
人生のシャッターチャンス決まらない
妻の顔かくしカメラに思える日
いい出会いだつたとカメラ知っている
真実を視た日のカメラ喋り出す
アリバイがカメラの中で喋り出す
顔よりもきれいに撮れた内視鏡
カメラを通して見たら絵になる寒い街
水没の過疎をカメラが見届ける
愛用のカメラ弾ます銀世界
人生を胸のカメラに焼き付ける
黒板に舟を浮かべてみたくなる
黒板の字が消されてどうしよう
消せるから黒板に好き好きと書く
黒板の落書き褒めてから叱る
黒板も机上の答睨んでる
信子 東雲 キミエ ひろこ 春蘭 鹿夫 一夫 冬虹 欣之 森子 大輪 夕胡 克子 よしこ 英子 真弓 裕美 和代 順子 鉄治 泰女 和子 輝子 三喜夫 紀久子 和重 和香

黒板消しの中から不満もれてくる
黒板の仇名のセンス抜群だ
卒業の度に黒板拭くむ

多情多恨の夜の枕は水浸し
恋ころ浸した酒が効いてくる
突つ張つた一日僕を湯に浸す

キヤンドルの吐息も恋に浸つて
煮凝りに浸す昨日の嘘一つ
レトルトに浸り胃袋揺ねだした

じつくりと浸すひとりのレモンティー
つつがなく暮れて柚子湯の香に浸る
慈雨に浸るようにはいかぬ子の嫉

良質の酸素に浸る森の恋

尼崎いくしま川柳会
春城武庫坊報

節分会金峯山寺で厄払い
二月の月の蒼さが凍み渡る
仲よくて悪くて年子の顔かたち

顔形母に似てきて頑固まで
祈り終れば母に似ている観世音
うしろから老いは突然やつて来る

寒空にいまに残る柿一つ
ふり返る愛は他人に語らない
霜柱裂いて顔出す福寿草

自給率世界を食べている怖さ
指切りをしたがる小指持て余す
水菜しよりし明日は雪という報せ

ものうげな春よ吐息をたてないで
脱皮した衣バラリと遍路旅

寛之 久子 和子 東園 勝巳 純

寿子

正博

東吉

朱夏

あき子

ダン吉

精子

桂香

富美子

稚代

さち子

三男

怜

正子

年代

しつ子

幸子

武庫坊

芳子

千恵

光穂

純

勝巳

東園

和子

久子

寛之

腰を病むあつけらかんと立春の卵

川柳ふうもん吟社

杉本

年金がパンクするまで生きてやる
雪おんな来るならお酒持つて来い
ゼロからの出発でした手鍋提げ

ウイルスから次々届く挑戦状
猿まねをする愚かさに気がつかぬ
未来へと続く希望はえつとある

へそくりがえつとある事内緒だよ
老いの目は猿芝居にも温かい
反省の猿に負けてる人の性

最初から好きでなかった家の猫
合併は愛をたつぷり添えてする
市と合併みがけば光る村主張

後悔の酒はゼロへと突き落とす
合併をしようか春も近くなる
確率がゼロでないからくじを買う

政治家の猿芝居には飽きあきた
三猿をやめて世の中さわがしい
進化ゼロバソコンにうる気になれぬ

猿真似の真実すぐにあばかれる
露天風呂猿と混浴旅の宿
合併で面影消える母校の名

猿知恵が働くように酒を酌む
人間も猿も反省して生きる
合併で議員の数を持て余す

猿死んで人間並みの葬儀する
小魚が合併大魚驚かす

孝男報

洋々

主一郎

節子

三津子

裕子

朋恵

益子

春名

昌鼓

茂登子

善夫

志緒

一粋

一瑠

節子

保子

はつ江

義徳

雅女

孝男報 洋々 主一郎 節子 三津子 裕子 朋恵 益子 春名 昌鼓 茂登子 善夫 志緒 一粋 一瑠 節子 保子 はつ江 義徳 雅女 宗明 俊典 金祥 無限 毅 由美子 孝明

年ころの合併ならば走ります
合併の餅だんだん丸くなつてきた
母さんは三猿などと言つとれぬ

ゼロ歳児どんな彩にも染められる
はたる川柳同好会

水野 黒兎報

直次

黒兎

長一

春代

柳童

契子

緑骨

久子

正三郎

メ女

螢柳

信男

昭子

雪子

桂子

禮子

勝

京都塔の会

都倉 求芽報

それなりの幸せ午後テイタイム
駅の遮断機 冬には冬の音で鳴る
文芸欄を切り抜いている長い夜

立ち話たあいまいなことを延々と

達子

武庫坊

年代

美穂

博学の姑さまをもてあます

思い出の曲のあなたは風化せず

ときめきに縁遠くなる殻の中

ときめきを無くすことなく歳かさね

ときめきの余炎が憎い夜のグラス

ときめきを少しし妻の和服から

ときめいて春の息吹きに誘われる

祝箸一膳増えた曾孫来る

様々な過ぎし日々いま懐しむ

飯うまい五体が動く今が花

形だけの妥協で今を切り抜ける

今風のおせちに祖母の迷い箸

今点滴ふくろの中に生がある

今までは助走これから青春

仰ぐこと絶えて久しい師の姿

仰ぎ見た人がまみれるスキヤンダル

九条を仰ぐことなくイラク行く

ざんげして素直に仰ぐ阿弥陀像

星仰ぎ楽しい余韻あたためる

修理して磨いて寿命延ばしたる

寿命には予告ないのでケ・セラセラ

寿命だと軽く電球捨てられる

一本の寿命を果てるまで歩く

寿命延びさびしさは倍倍になり

寿命まで生きればいいと不摂生

精一杯生きたと言いたい生命です

川柳塔唐津

久保

正剣報

惚けるわけにはいきません親の世話

兵八郎

あやめ

ふりこ

輝美

久美子

百合子

求芽

紫香

メ女

久留美

満子

萬的

克治

和友

啓子

弘之

正坊

英旺

芳子

宏子

典子

修水

庸佑

欣之

幸代

益子

葉子

反対でイラク派遣の無事折る

育つはずも期待裏切る肥料過多

明治大正昭和と指を借り伝え

虫達が食わぬ野菜を人が食べ

握手して歩留まり計る選挙戦

梯子酒中の下だねとウマが合い

何もかも押しの一手じゃ無理がい

イベントで実力示すボランティア

金時計父の歳時記知りつくす

川柳塔なら

坊農

柳弘報

待つ女の色占いの指あそび

朝夕の祈り平和にまだ遠い

朝起きて五体満足ありがとう

風邪引くと笛もがらがら声となる

悩むひま無い幸せな朝を出る

マンションに虎落笛鳴る北の窓

鹿寄せの一笛びく古都のなら

イラクへの進軍ラッパ空し過ぎ

タイマーが入って朝を暖める

雪解けを待つて余白をうめゆき

朝刊を五時に読んでる定年後

夜な夜なの夜には口笛吹かぬこと

薄紙のまた一枚をはぐ夜明け

初物食いグルメ命をかけている

終章のホイッスルまで燃え続く

総入歯口笛なんか吹けません

群れの中笛に踊らぬ僕がいる

初物と言つて貰つたまずい味

實

勝視

晴翠

高明

輝夫

水笑

虹汀

四郎

正剣

柳弘報

カツ子

登美子

博一

ふりこ

孝子

章久

敏子

弘風

冬葉

千梢

太一

春蘭

真理子

理恵

富子

まつお

ダン吉

春雄

戦わねばならない朝の爪を切る

一呼吸待つと打開の策が見え

待つ人に柱時計は無表情

神さまも人も信じる朝の音

晩成を信じる母のやさしい目

初物も一番後で食べる母

朝露へ太極拳の息づかい

ボクの笛はニーチェを読んでいる

待つことに馴れて人間丸うなり

四季の無い売場初物気にもせず

古里に待たしたままの四季の詩

一年の生まれる音を聞く初日

竹原川柳会

時広

一路報

友達に百人会って来て豊か

豊かさに慣れて犯罪増え続け

犬猫も豊かな時代生きている

たくあんにこだわりを持つ豊かさよ

太陽の恵み豊かに自家野菜

豊かなさるの隙間軍靴の音がする

一つずつ捨てて豊かになつていく

チョコレート甘い誘惑には勝てぬ

本命のチョコは手作りだと決める

花一つ無いのに薫る友の部屋

ひいふうみい火星にとどけシャボン玉

古日記写真一枚出て揺らぐ

平均寿命ここから一歩踏み出そう

一期一会すてきな人にまた出会う

洋子

和夫

秋雄

弥生

道雄

茂雄

美千子

元紀

一風

蘭香

隆盛

國治

幸子

節夫

年子

輝恵

幸子

青居

比呂子

万枝

史子

正宏

淑子

汎美

栄恵

半覚

乳房一ツになつても母は母である
喜寿迎えたのはもう一人の私です
一目惚れそれから四十年いっしょ
庭椿一度に咲いた暖かさ

幸福がノックしている僕の窓
パイパイが終らぬうちに窓を閉め
まどふいて心もきれいになりました
子の帰りがあけてる母の窓

窓枠を額に真つ赤な陽が昇る
老いた父母年始の子等待つ窓辺
どうしたの隣の窓の灯がつかぬ
ガラス窓スキと書くバカと書く

窓を開け自由な空に飛び立とう
冬の雨淋しさを増す母遠く
南向く窓だけを選ぶ福の神

川柳ささやま

遠山

可住報

自画像へ別のわたしを描きだす
絵を替えて一足早い春にする
うっとり孫の和装がまぶしくて
日向ぼっこつとさる術がある
ひたすらに走り幸運追いかける
すき焼きの匂い寝床へついてくる
結び目が解けてうっとり終い風呂
家計簿のなげきが移る寒い夜
初夢に一年の計組み替える
日溜りでうっとり昼寝今の幸
ホーホケキヨ移り渡つて春を告げ
うっとり昨日の夢がまだ覚めず

不朽 民恵 夏喜 笑子 敬子 臣子 道子 慶子 房子 静風 眞由美 孝枝 一路 恵美 純子 美緒子 美智子 文子 美紗子 靖子 とみ子 多美子 開子 かほる つや子

うっとり昼寝しました雪が舞う
生きる物うっとりさせて初日の出
菊花展うっとり見とれ時が過ぎ
移された庭で素直に花が咲く
初夢が叶うチャンスを待つとする
初夢はすてきな人にくぐり逢う
うっとり昔の唱歌一人聞く
移り住む定年の里星が降る

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

健やかにこの世で長居してみたい
結論は長居無用と空を見る
回れ右あのひと言がかえた道
婆ちゃんのひと言が効く飯茶わん
おまえさま時には夫へゴマをすり
かるた取り遠い記憶の中にある
ブレイキのさかぬある日の大統領
ひと言もふた言も多い九官鳥
ひと言を胸に巣立つた青い鳥
点滴の嘘を見抜いていた微笑

城北川柳会

神夏磯典子報

もつれ解く一步譲った広い胸
正しくてあらねばならぬ議員さん
さようならまだドキドキが止まらない
検診の結果どきどき待つ時間
正直に返事出来ない社の空気
但し書き多くて意味が通らない
正しい道学んだはずの踏み違え

八重子 富美 富子 君代 康子 朝子 哲男 可住 かつ子 聖子 恵美子 好栄 民子 伸子 はるみ 博利 清泉 白汀 喜美子 美代子 集一 茂 典子 あやめ トヨ子

異常気象翁のさかりに朝顔も
発表を待つコヒーがさめている
さあ一歩希望という灯が舟出する
退院日朝の一歩が躍つて
夫婦でシリウス一歩のままだ
正直でない児は何時も目を伏せる
正直の頭に馬鹿の乗つた人
日本語に戻せば説明などいらぬ
一期一会旅の枕は話好き
正直に生きて明日と握手する

トキメキを届けておくれコードレス
マニフェストその時だけの流行語
シリーズ屏風四季折々の風の彩
戦争の一步になるな自衛隊
ドッスンと夢で好かつた落し穴
今日よりは明日につながる愛の詩
正論を吐けば冷たい目が刺さる
正と邪を無学の親に教えられ
未来図のシリーズになるサザエさん
シリーズに歳は取らないサザエさん
シリーズ版見事揃つていない書棚
一歩目を間違つたのが罪らしい
ご家族に来て下さいと聴診器

川柳塔打吹

大森

孝恵報

愛子さま背負う笑顔の皇太子
道楽を背負つて渡る丸木橋
人生は苦楽を背負う味なもの
学校が終れば背負う子守歌

あい子 重人 昭子 達子 求芽 政子 高栄 千歩 一枝 はじめ とし子 千里 一步 静枝 春蘭 順三 ひさ乃 柳弘 倫子 修 公一 龍枝 博丈 清 備みち子

轟沈の火柱脳裏離れない

夕陽沈む視野へわたしの影も消え
ボランテアすれば沈んで居られない

何となく信用できん神楽くる
初もうで神楽の音も森の中

神楽よりわしゃどじよう揃いの方がいい
大神楽ではないですよ老人車です

御神楽を舞ってイラクへ派遣させ
何ごとがあつて姉は姉のかお

串だんご姉にみんなであつてゆく
姉さんの悲哀静かに受けとめる

のんびり屋の姉も聞いている春の音
放課後はオロチの舞いに生徒会

神楽坂ふたり軋んだ跡がある
人妻の巫女が舞つて神楽舞い

神楽面脱げば曹洞宗の顔
御神楽に猿がきりきり舞いをする

川柳塔みちのく
小寺 花峯報

ははに似た後姿は優し過ぎ
いもうとの背な仕草に亡母を見る

悔しさを忘れぬように石を積み
ひねもす雨でとても悔しい富士登山

野良犬の首輪に過去の影がある
妖艶に首を落とした紅椿

悔しさをじつと耐える蝸牛
ブライドも少女の澄んだ瞳に負ける

いい考えくれそう顔雪だるま
そつくりな顔で群れる街すずめ

実満 くに子
はるお 久枝
八重子 菊乃
汲香 永子
保子 彩子
立亥 睦子
公子 節子
宣子 盛桜
螢

決断の早い椿で首が落ち

遠来の友をもてなす雪見酒
いじめつ子はひとりもない雪合戦

指切りの子の瞳が妻に似て恐い
三幸川柳教室 古久保和子報

アルバムに過去の絆が貼つてある
縄のれん男どうしが持つ絆

結び目にゆとり持せておく絆
とりどりの絆に今日を生かされる

以心伝心太い絆で守る城
妥協して今をつないでいる絆

切れそうな絆に効かす唐辛子
もつれても切れることなし血の絆

久し振りの握手近況追いかけて
丁寧なあいさつされて面食らう

あいさつが嫌で手前の角曲がる
挨拶は無いけど越して来たらしい

おおきに一番耳にあたたかい
商いに染まり毎度と言う寝言

生きてるか食べているかと子の電話
雨の日は雨のあいさつして通る

さよならは山の向こうに埋めである
おはなが弾むバサリの深緑

武器のない地球であればなと思う
良い方に思い直して坂登る

思うこと言うたら火花散るだろう
思い出を手繰ると義理が数珠つなぎ

傲慢であつたと思う花の頃
慕情 千加子

花峯 一花
一花 五楽庵
かずみ 昇
碧 三千子
桂香 美枝子
保州 一步
義男 准一
武 町子
起世子 次根
みね 章子
朱夏 当代
幸 伊七
鉄治 靖子

あれこれと思えば果てのない枕

まだ思うことありガス抜きは出来ず
安売りは出来ぬと思う寒卵

おねえに赤ずきんちゃん三度よむ
ぬくもりを少しもらいに絵本展

お泊りの旅へ絵本がお供する
絵本売場で桃の流れる川を買う

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報
孫の書く手紙にゆるむお年玉

手紙より声が欲しくて電話する
里の子が朝の挨拶してくれる

あいさつをしないと損するような人
やあやあで済ます男のご挨拶

携帯の会話へ挨拶してしまふ
切れそうな絆を繋ぐ年賀状

ありがとうゴメンがいろいろおサルさん
きつちりとおせちの器かたづける

政策をきつちり作り先送り
でもやはり年金払うバカでいる

騙しても母はきつちり知る本音
震災の時刻きつちり手を合わせ

きつちりと親の躰に返し針
黒白をつけたい男隅にいる

手抜きには後できつちり付けがくる
父のいた頃は合つた鳩時計

一本の線に定規と性格と
きつちりと折らねば鶴が生まれない

着メロもワルツに替えて春を呼ぶ
悦子 美代子

公子 清史
和子 信子
智三 千秀
登美代 久仁子
一壺 敏
志洋 泰子
六平 保江
和夫 久仁雄
庸佑 昭平
一知 ダン吉
章司 扶美代
美代子 悦子
りつえ

しつかりと今を生きたい明日のため
冬満月の明るくて寂しくて
二世帯の渡り廊下が軋んでる
初春や水仙の香に酔っぱらう
明暗を分ける酒にははたくな
かずら橋渡り終えたら君は泣く
明日という文字に小さな願かける
初物を食いに渡った橋がある

川柳やがわ

森

なごやかに健康祈る乾杯を
宝船七福神が重すぎる
初夢は七福神と酌みかわし
天高く産声あげている未来
乾杯へがつちり握手する夫婦
七福神妻に似たのが一人いる
声よりも大義に馳せる自衛隊
人声が聞こえて迷路から抜ける
改革の声も派兵に掻き消され
人間はこわいと鬼の話す声
鶴よりも妻のひと声には重み
弁財天男世帯に花をそえ
親譲り優しい声とお人好し
その時は大きな声で妻を呼ぶ
乾杯の手がふるえる泣いている
福の神招来春のコレクション
我が家にも同居貧乏神と福の神
一・七声かけあつてきた仲間
乾杯の演技が冴える新年会

幸子 (富) 涼子 和代 はるお 小 久 公 弘
三郎 恵子 亜成 仁清 勇太朗 たもつ 弘風 高栄 博泉 朝子 一風 一炊 ルイ子

神妙に乾杯までは聞く祝辞
君と僕手繰り寄せてる福の神
初笑い七福神と船出する
乾杯と言われ戸惑う法事あと
七福神宝船ごとんと来い
宝船七福神に申も乗せ
居酒屋の弁天さんと飲んでいる
七福神隣まで来て来ぬわが家
七福神留守ばかりで待ちばうけ
産声が大いなる大物になるぞ
宣誓の球児青春演じ切る

豊中もくせい川柳会

江見

予定表キャンセルをして冬こもり
体調がよくなり句会に出てる夢
とり柄なくてもみんなからあてにされ
物腰高貴やはり血筋かお人柄
人柄は言葉の端にあふれてる
朝市に土の匂いを盛る老婆
風評の怖さ商品知っている
ウィルスに商品棚も休んでる
商品は只今病氣牛井屋
マイナスはもう考えず賽を振る
甘やかすマイナスの手は子に貸さぬ
マイナスもプラスもめぐる走馬灯
一番のマイナス僕がここに居る
ありがとうすらりと言つて丸く居る
今日の酒すらり喉ごし銘柄は
枯れすすき無常の風に立ち向かう

弘一 かすみ 柳弘 さち子 房子 庸佑 朋月 栄二 秀雄 雅文 見清報 正坊 慶子 見清 郁子 玲子 尚士 庸佑 巴子 千津子 萬的 石舟 求芽 重人 春 緑骨 タミ

こちらから変つてなじむ嫁姑
人生は短いからと跳んでる
一つ一つ夢ある団地の灯がともる
別れ際両手で包む冷たい手
背信を隠す女の厚化粧
医療保等引上げ弱者どう生きる
生きるため狼も山からおりてくる
ファミコンに倦きて仰いだ広い空
良き夫下手な料理も食べてくれ
商品の中に潜んだ資本主義
マイナスを覚悟言ふべき事を言う
親切がすぎて誤解がまだ残り
知らぬ間に九条崩す風が吹く
春一番日本中を走り抜け

川柳塔おとり

原みさを報

そのままの二人砂丘へ消えて行き
あの二人目をそらしてる恋してる
神さまが決めた二人の長い道
二人三脚いつか一人になるさだめ
老い二人相合傘もままならぬ
二人して歩いた道を子が辿る
冬景色同行二人寒修行
病床の夫と二人で春を待つ
ほのぼのと湯気たっている雪おんな
シチュウの湯気に逢いたい人の影が浮き
温泉の湯気は美形にしてくれる
火山から湯気地球は生きてる
ぱつと蓋取れば七草粥香る

満寿巳 蛙 ム女 宇乃子 高栄 久太郎 都代子 則彦 照子 実 英子 和子 啓生 知香子 舍人 道子 登美 彩子 清子 幸次郎 小生 仁子 螢 雄々 せつ子 真一 艶子

目の前の裸を湯気は包み込む
湯気上げて叱る元氣も今は失せ
仏様湯気たつ新茶めしあがれ
湯気充滿欲求不満陽に晒す

そのまゝを見てお嫁にしてもらう
そのまゝに伸ばしてならぬ芽が伸びる
三脚にそのまゝ乗せる笑い皺
そのまゝに写るカメラを持て余す
そのまゝに書いて治る傷もある
天衣無縫そのまゝ伸びてほしい子等
精神はこどものまゝで親になる
赤紙に召されそのまゝ行つたきり
王様は裸のまゝにしておこう

高知川柳社

川竹

松風報

石橋を叩いたはずがこの落ち目
不器用な世渡りしてる暖かさ
東大を出て世渡りは負けている
世渡り上手 酒も上手に飲んでいる
世渡りを考えぬまゝも米寿
親よりはましな世渡りして欲しい
世渡りは下手でも負けぬ米作り
夫から息子に代わる鍋奉行
熱燗が鍋にはの字の寒の入り
ピカピカに鍋を磨いて嫁の意地
国籍はどうあれ一つ鍋の中
鍋にしてよかった外は雪になり
ふく鍋と聞いてとまどう祖母の箸
酒好きがお鍋の味を倍にする

以和万津 義弘 一弘 黙光 孝子 野草 紀子 宏章 由多香 風花 美佳 富貴子 みさを 暖 佐紀子 快風 孝雄 圭二 幸 圭風 和江 てるみ 典雄 美々 悦子 京子

幸せな鍋で家族に囲まれる
あんときは手鍋提げててもでしたがね
スイトンの挽歌聞いてる古い鍋
笑い茸お鍋へ入れたのはわたし

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

いつかまた流す涙を溜めておこ
何よりの馳走湯宿のマツサージ
サービスはまゝころからのありがた
口という凶器を連れてやって来た
骨格がずれて人格まで変る
妻からの風が変つた怒らした
あの人と話せばやさしい春の風
ひとり旅明日吹く風にあるドラマ
塞翁が馬と笑うさ裏目でも
心まで覗かれそうな目に出会う
九条を読む目ないのか総理はん
目の奥で炎が燃えている闘志
目印を一杯つけてる定年後
小さきみに歩みつないだ老いの道
父さんが休むと母さんがいない
休むのが苦手な母はこまねずみ
雨の日は冷凍食品ゆり起こす
確固たる信念もたず日々流る
それなりの信念ありますイラク入り
理念持つ父が家族を支えてる
どん底も理念は曲げぬあばら骨
理念など言わぬが老母にかなわぬ
森には森の理念があつて春になる

佳風 まさ子 良雄 哲史 欣子 柳伸 已代一 幸美 きよみ シマ子 宏至 弥生 幸生 春蘭 ダン吉 とみを はじむ 弘直 アキラ 欣之 きらり 菜月 加津子 ひさ乃 一風 美代子

岩美川柳会

石谷美恵子報

たつぷりと喉を利かせせる浪花節
観客をたつぷり泣かせ幕がおり
たつぷりの風呂で心の冷え温め
コップ酒たつぷり盛られ口が寄り
リストラに未練たつぷり置いて来る
たつぷりと時間はあつたはず八十路
久し振りと友とたつぷり話し合う
たつぷりと墨含ませて達磨の目
たつぷりの日差し蒲団に夢結ぶ
屋根屋根に綿菓子配る雪おんな
お裾わけ向う三軒両隣り
平等にメシを配つてくれた母
老人を配つて回る福祉バス
酔いどれを配つて回る幹事さん
ひたすらに便り待つ人配る人
腰巾着に入れてある昭和かな
袋帯女の性が織り込まれ
もち代の出ない袋は叛かれる
非常袋賞味期限を詰めている
笑い袋悲しい時に開けてみる
紙袋袋を知らぬ篤農家
五番目の駅で降りればすぐ近く
大吉は八と信じていた不覚
受験番号氏神様に見せておく
呱呱の声番号つけて歩き出す
味のある人生今日も泣き笑い
カタツムリ泊つた宿が隠せない

蟹郎 圭一郎 たぬ 静生 公乃 よしえ かつみ 公子 和子 石花菜 睦子 完司 はるお 重忠 照子 螢 節子 忠良 裕子 季芳 一瑤 孝男 雅女 一京 美恵子

長柳会 加島 由一報

雪山を紙めてかかつて助け呼ぶ
申告書傍らにおき歌唄う
雪ならと酒の支度の台所
ナツメロを唄えば若さよみがえる
声明に聞き惚れお布施追加する
鼻びアスそなたの子が親になる
吹雪く夜もその一言で温かく
章表つく高見盛の気合い入れ
居酒屋のママが小粋なはやり唄
着色の奇抜さで得る二百億
蛇にピアス人格Bを駆け抜ける
正調を唄えば侘し子守歌
この吹雪越えると母の里がある
蛇にピアス読む気をそそる本の題
風雪に耐えた男の笑い皺
粉雪の舞うあぜ道の塾靴
うつすらと口紅を引く雪だるま
デュエットの相手は好きな人を避け
どう見てもやはり奇抜なピカソの絵
隈取りの奇抜さ映えて見得決まる
キッチンで妻のハミング跳ねている
雪だるま運命を知った顔で立つ

川柳さんだ 北野 哲男報

武男 輝子 由一 ひろし 淳司 けい子 和子 芳野 良男 幸雄 直樹 正一 和代 正子 英美 富美子 美和子 正美 史 淳子 一慧 婦美子 朋月 開子

雛の箱開けてときめく娘と母と
振り袖のビールに父は五年酔い
金もなし恥ずかしおますビール腹
幸せを一人占めしてビール飲む
恩を着た女は誘惑したくない
消去法ひとつのチョコに辿りつく
試合ではニコニコしてる鬼コーチ
土の雛美人でないが温かい
ひび割れた夫婦茶碗にある話

川柳藤井寺 高田美代子報

しあわせは家族の音のたしかなり
柏手の音が邪心を遠ざける
老いひとり音が聞こえる生きている
みぞおちの爆発音にうろたえる
いのちある限り私の音を出す
雑音もあつてなんぼの身の回り
人間を支配している電子音
轟轟と岩打つ音や冬の海
音もなくさりげなくいる妻欲しい
拍子木の後を騒音バイク締め
雑音も時には恋し冬の部屋
音もなく近づくテロに年は明け
目覚ましに泡食う癖がまだ抜けぬ
朝寒や言葉かけ合う駐車場
花街の舗道に響く下駄の音
足音が追ってくるよな夜の道
眠いのに律儀に起きている時計
吹雪も狂う竹山の三味の音

歳子 房江 五月 章子 忠 雅司 正和 哲男 千代 婦美枝 昭子 たつお アキ 重人 美代子 明子 龍一 真一 かつみ 昌子 武義 耕策 春蘭 半蔵門 アヤ子 喜代子 葉

せせらぎに夢遊ばせる山の宿
音無しの構えで妻はストライキ
靴音でわかる合格不合格
ミサイルの音も聞こえる平和論
聞こえる春の足音其処此処に
しがらみが邪魔して本音いい出せず
コップ酒心に風が音する
弱音吐くことは許さぬ父のせな
コーヒ豆挽く音今日が回り出す
足音で判る人生浮き沈み
満月が昇るでつかい声出して
さまざま春の期待へ水の音

倉吉川柳会 竹信 照彦報

平和ボケそんな総理が兵を出す
豆がらを焚いてもてなす雪の客
枝豆を大寒に食う罰当り
身籠つて可愛い女になってゆく
童顔の可愛い孫は声変り
老いてなお可愛い女と呼ばれた
惚けてない惚けてないぞと惚けが言う
年寄りを惚けないようにこき使う
父に似た人がおられる橋の下
吊り橋の真ん中で腰が抜け
ほろ酔いで橋がせまいとぐずりだす
数寄屋橋はりまや橋の熱い恋
絡む義理涙で渡る橋もある
経上げる時は惚け顔しんとする
へそくりで惚けないうちに旅に出る

みつこ シマ子 志洋 六點 恵勇 扶代 悦子 桂子 鐘造 美子 瑞美子 次男 石花菜 玲坊 蜚子 祐子 醉美蓉 泰輔 幸子 完司 よしえ 重忠 日出子 喜美子 睦子 龍枝

惚けて来てどなたですかと娘に尋ね
惚けてきたどんな事でも驚かぬ
まだら惚け会話がはずむ猫言葉
若者をさらってしまふ過疎の橋
お手玉の中で小豆が磨かれる
可愛いね耳打ちされて熱が出る
豆煮える匂いは母のなつかしさ
ザル盛りのささげ豌豆春の色
惚けという逃げ道もあるこの浮世
凍みた日の足もそろそろ橋渡る
惚け葉ちやらんぼらんを持ち歩く
おふくろの形見のように可愛い
可愛がり過ぎて子供が道連れ
可愛さを半減させる口がある
固すぎて噛めぬ我が家で炒った豆

川柳塔まつ吟社

津川

紫見報

冬枯れの野に置いてきた別れ
今更に秘密をばらすこともない
気を許しうっかり話したかくしごと
明日という夢は心に抱いている
秘密めく雪は夕暮れ近く降る
風びたり止むと秘密が歩きだす
年金が延びて家計をしめなおし
八方美人で家計がきしみ出す
月末の早さ家計簿慌て出す
清貧の家計に母の蓬餅
生活の知恵を生かしている家計
身の丈に合った暮らしで足る家計

(西)喜美子

賀寿恵

ゆり子

芳光

和枝

悠子

克枝

和子

萩江

京子

勝誉

修

かつみ

登美枝

照彦

邦代

政子

義良

昭二

小生

雪代

房子

螢

静恵

沁丘

いずも川柳会

佐藤

治代報

イメージを変えて町中活性化
降り止まぬ雪がわたしにくれた暇
暇過ぎて古い時計を解いてみる
眉引けば私の顔も出来上がる
イメージにこだわって過ぎて縁遠く
あれこれと噂を流す暇な人
つつかい棒取ると私は風になる
手を添えたはずのわたしが蹴蹴く

支えてるつもり足元掬われる
反抗期支える駒はマシユマロで
みずすまし見事な波が支えてる
負けそうになつて支え松の雪
支え合つて生きている火の中水の中
冬山の命支えたのは無縁
けんそんの人が人並み以下という
人並みに日本語すらも話せない
人並みにいい婆さんになりきれず
人並みの暮らし偶には河豚も食う
人並みに恋して振られ老いの坂
上を向くから人並みがよくキレル
雪しんしん嘘も噂もかくれんぼ
わたくしの掌に着地して消える雪
牡丹雪ジェラシーがある雪女
返事には幸せと書く雪しきり
風花が舞う襟立てて来る笑顔
雪が舞う約束のない部屋の窓

澄子

喜美子

幸子

秀子

きみえ

知恵子

日出子

芳山

ちえこ

昌枝

茂美

町紅

たけし

玲子

多賀子

桂子

注湖

紫晃

ミチ子

スズコ

啓三

邦子

英子

和歌子

治代

キミエ

キミエ

イメージと違う女神がそばにいる
百八つ撞いて煩悩年を取る
取り敢えず半端な答えにしてしまふ
取り替える出来る修正液がある
添えられた手がはつきりと柔らかい
引き際にきれいな水を打っておく
引つ込みがつかなくなった古女房
引き返し泣いた数だけ強くなり
暇な他人の窓が気にかかる
吹雪く日は神も仏もみんな暇
引き出しの奥にしまっている椿
巻き添えは嫌でそつぽを向いている
掛け引きが下手で尻尾に従ってゆく
引き出しにそのまま残るとうがらし
イメージもいいが味わいある話
暇のある人ない人とすれ違う
イメージを私の胸でふくらます
かんむりを取れば誰でも同じ人
香水の匂いを添えて封をする
より添うて歩いた時が花でした
引っぱると切れる二月も少年も

翠洋会

六吹

尚士報

許されて許して今は共白髪
約束の場所で待つて今もなお
春一番今がうれいランドセル
六十路前サユリストには今が旬

美江子

テル子

玲子

桂子

久子

多喜

敬子

すみこ

満江

芙佐子

歌子

寿美

昌枝

房子

町紅

文子

きみえ

ちかし

蘭水

茂美

多賀子

章峰

尚士

舞夢

絹子

桃花

桃花

無事祈るイラク派遣へ旗をふる
雨男やつぱり降ってきたツアー
古里から餅が届いて母達者
森の道木洩れ日が降る夢が降る
奥の手の尻尾優雅に振ってます
ふられても拾う神あり今日があり
お化粧が早くなってる古女房
雪の降る所へ娘やれませんか
ふる池に昔話が沈んでる
星が降る丘で唇盗まれる
食足りてスリムになれぬ意気地なさ
色あせた愛赤を足し黒を足し
テレビ見て晩のおかずを買いに行く
末席でただただ拍手して祝う
五十年本音隠して生きてる
東風吹けばおらが春だと葱坊主
写経する筆が仏とすると会話
息子と酒果せなかった父が居た
橋渡り元にもどれぬ風が吹く
苦と楽が背中合わせに生さるって
おばあさんになつてしまえば楽である
ずぶ濡れの心に一輪花を挿し
いつもより上買うわたしのチョコ
地図にない峠を二つ越えて里

川柳クラブわたの花 吉村 一風報

千歩 恭昌 富子 みつ子 伽羅 蕉子 日の出 東雲 千梢 石舟 奏子 会美 真理子 良一 志華子 正雄 孝一 蛙 美籠 義昭 さと美 照子

歳月の空気みたいで夫婦です
銀婚日味かみしめるお赤飯
夜神楽の姫にちらりと喉仏
通り抜け前も後もうば桜
純行で歳月重ねこれからも
家の恥なんでも言える友がいる
幻想を追って溺れてばかりいる
母の歳越えてしみじみ母想う
せつば詰まるとどこから知恵湧いてくる
敬語ってどんな言葉という世代
歳月は兎の如く亀のごと
恥を恐れず一応はやってみる
けんかして妻に勝つたが後こわい
飼猫に心の動き見破られ
盛大な花火と消えたサテライト
盛大な拍手にも猿無表情
楽しい余生光陰人を持たせま
幸せ色見つけた孫に春が来る
五指のよう握って開く花美蓉
一回きりの人生だから迷って
誰にでも心温める窓がある
飲めるかな三年飾ったナポレオン
はかなさに夢も消えうせふてねする
老いを恥じ家に引込む我れに喝
しばらくは修理で待つと医者がいい
貧しくも布団の中は温かい
ウィルスがパソコンにまで感染し
言わぬが花を小出ししながら生きている

いづみ 義明 春江 純生 知佐子 美代子 八寿子 はじむ 道子 宏至 ミツ子 キク子 君江 宏 一風 きらり 欣子 幸枝 晴美 俊子 恭一 奈良司 浩三 正純 一道 (本)たえこ (赤)妙子

川柳塔わかやま十五年度各賞

同吟社では各賞を発表、2月8日の句会で表彰をした。本社関係者の受賞句は次のとおり。

〔葵水賞〕

西出 楓楽選

一位・田村あき子 一位・青枝鉄治 振る
鉄にトリックはない土に生き 三位・玉井豊太

〔おおい賞〕

奥田みつ子選

一位・堀富美子 一位・澤田和重 長男の
嫁に猫語で使われる 三位・松尾和香 百歳の
命育む自然体

〔たちばな賞〕

宮口 克子選

一位・坂東和代 一位・大森年子
三位・福重美子

〔課題吟賞〕

桑原 道夫選

一位・中島正博 一位・寺田裕美
三位・前田真弓

川柳塔のぞみ

日時 4月16日(金) 午後1時から

会場 憲政会館地下鉄永田町下車②出口5分

題と選者 「続」「旗」「ピタミン」(各3句)

「自由吟」(2句) 全て選者未定

投句 用紙自由・80円切手3枚

4月12日(月) 締切

〒193-0832 八王子市散田町2-31-3

播本充子宛 TEL 0426-16513172

第28回 全日本川柳2004年埼玉大会

日時 平成十六年六月十三日(日) 午前十時開場
会場 埼玉会館 大ホール
〒330-0000 埼玉県さいたま市浦和区高砂三ー一四

交通機関 JR京浜東北線、高崎線、宇都宮線
「浦和駅」西口下車徒歩5分

宿 題 第一部(事前投句、四月十五日締切)

「爽やか」松岡 葉路 選 「彩り」零石 隆子 選
「助ける」天根 夢草 選 「まごころ」小島 蘭幸 選
ジュニア部門(小・中学生)

「さわやか」平田 朝子 選 「助ける」米島 暁子 選
「まごころ」国吉司図子 選

3.5×18cmの句箋一枚に一句宛記入・各題二句無記名・封筒に住所・氏名明記、投句料一〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛郵送のこと。ジュニア部門は投句料無料
投句先 〒550-0004 大阪市北区天神橋二丁目北一ー一
ステッピン南森町七〇二

(社)全日本川柳協会 宛

TEL 〇六(六三三)二二二〇 FAX 〇六(六三三)二四三三

宿 題 第二部(当日投句、十一時二十分締切)

「新鮮」内田 昌波 選 「都会」田頭 良子 選
「心機一転」川俣 秀夫 選

第二次選者 各題二句当日配布の句箋に記入
吉岡 龍城・今川 乱魚・塩見 草映
磯野いさむ・大野 風柳・竹本瓢太郎

会 費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む) 川柳大賞
表彰(予定) 文部科学大臣奨励賞 参議院議長賞
大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ
全日本川柳埼玉大会実行委員長 佐藤 美文

△前夜祭ご案内▽

前夜祭 平成十六年六月十二日(土) 午後六時
会場 ホテル・プリランテ武蔵野
〒330-0001 さいたま市中央区新都心2ー2

交通 JR京浜東北線、高崎線、宇都宮線
「さいたま新都心駅」西口下車徒歩5分

会 費 八、〇〇〇円(立食、アトラクション)

△宿泊・観光ご案内▽

☆ホテル・プリランテ武蔵野
シングル 九〇〇〇円 ツイン 一六〇〇〇円 2名分
和室(2・4名) 宿泊人数により料金の差があります。
希望者は事務局まで事前にご連絡下さい。料金は一万円前後(2室)あります。

☆ラフレ・さいたま(簡保加入者施設)
シングル 九四〇〇円 ツイン 一七四〇〇円 2名分

◆簡易保険加入者本人(70歳以上は旧保険でも可)は事前に証明書コピーの提出があれば2000円割引になります。宿泊日には返金いたします。
観 光 蔵の町川越観光(近畿日本ツアーリスト)
日時 平成十六年六月十二日12時・17時 集合 ホテル・プリランテ武蔵野12時 会費 五、〇〇〇円(昼食なし) 各自昼食を済ませてご乗車して下さい。申し込み35名以下の場合観光を中止します。

◇前夜祭・宿泊・観光の申し込み締切は四月十五日必着で、宿泊は先着順で満員しだい締切です。
◇別紙申込書に内容記入の上、合計金額を郵便振替口座へご入金下さい。

◎申込先 〒330-0005 川口市川口一ー三ー一四〇一
松岡 葉路方 日川協埼玉大会事務局 宛

TEL FAX 〇四八(二二二)八〇八四

◎送金先 郵便振替口座番号 〇〇一九〇〇一ー二五九三三六
日川協埼玉大会事務局 宛

『川柳からつ』

二五〇号記念句会

おかげさまで、毎月の句誌が「二五〇号」になりました。

平成11年の「二〇〇号」記念句会、平成14年の「二〇周年」記念句会の時のように皆さんにお会いしたいと思っています。

日時 5月23日(日) 開場12時

開会・投句締切 13時30分

場所 唐津シティホテル

JR唐津駅南口

電話0955-72-1100

会費 1000円

懇親会 5000円

一泊朝食 7500円

申し込み 5月20日まで

兼題 「外国」「梯子」「立身・出世」

「神社」「イベント」「雑詠」

(各2句)

連絡 仁部四郎

電話0955-73-2262

川柳塔唐津支部

京都塔の会

春の吟行洛西句会

日時 五月三十一日(月) 十時十分

集合場所 阪急「桂」駅西口

◎送迎バスは十時半に出発します

行程 桂駅西口⇨バス⇨野鳥遊園(バードウォッチング)⇨バス⇨ふれあい会館(正午頃)

昼食 ふれあい会館到着次第(和食)

昼食後開催

句会 ◎昼食・句会共に同部屋で椅子席を用意

題 「当日雑感」「飯」「高い」「自信」 各題三句

解散 阪急「桂」駅 午後四時頃

費用 四千元(当日頂きます)

締切 五月二十日

申込 都倉求芽まで

〒六〇〇-八四二八 京都市下京区諏訪町通松原下る弁財天町三二八

電話〇七五-三五一四一〇九

☆桂坂野鳥遊園 オシドリ、カルガモ、カワセミ、など約九十種類の野鳥が生息。「観鳥楼」から双眼鏡で観測できる。

☆ふれあい会館 西山山麓にあり閑静な庭園、大浴場などがある。

大阪川柳人クラブ

第五回吟行のゝ案内

日時 五月二十八日(金) 八時集合

集合場所 JR大阪駅南側 ヒルトンホテル前

(道路を挟んで西側)

行程 大阪駅前出発⇨バス⇨亀岡「大石酒造見学と試飲」⇨バス⇨美山「昼食と句会」⇨「かやぶきの集落・資料館散策」⇨バス⇨丹波ワイン見学と試飲」⇨バス⇨大阪駅西口午後六時半頃帰着の予定

参加費 七千円

キャンセル料 三〜二日前 半額負担 前日〜当日 全額負担

宿題 「田舎」「吟行雑感」 各題二句

申込 五月十日まで

取り消しは一週間前まで

申込先 事務局 大堀 正明

〒五三三-〇〇二二 大阪市淀川区木川東四-三三四-二二二

電話〇六-六三〇五-四五三六

長浜 美籠

電話〇九〇-一五八二-八七七二

坂本 晴美

電話〇六-六三八四-二四六六

柳界展望

☆第7回なんなんタウン大阪弁川柳コンテストは、全国から5825句が集まった。入賞13句に選ばれた本社関係者は次のとおり。

〈佳作〉

なるようになりますわいな

もう寝まひよ 河内 月子

おおきにの言葉に今日が

弾み出す 出口セツ子

☆和歌山県川柳協会(牛尾

緑良会長)は読売新聞社後

援により、小中学生を対象

に第2回ジュニア紙上川柳

大会を開催。189名の応募

があり1月28日読売新聞和

歌山版で発表された。

☆第1回鹿野町ジュニア川

柳大賞は、森中恵美子・小

林由多香・門脇かずお選で

開催された。鹿野中・小学

生の特選入選者は次の通り。

中原豊 久保田結香 高

田圭一郎 ゆいまなみ

☆第45回伍建まつり川柳大

会は2月15日松山県民文化

会館で350名の参加で開催。

〈最優秀賞〉

とびつかりの笑顔で明日

また会おう 黒田 茂代

▽出版 △

★竹内紫緒氏(町田市・同

人)は、句文集「技師の一

行詩」(B6判・160頁)を

出版。序文は橋高薫風氏。

価千円十送料。申込紫緒氏。

★東野大八著、田辺聖子監

修・編「川柳の群像」が集

英社から刊行された。A5

判・三三〇頁の上製本で、

定価二五〇〇円十税

▼人 事 ▲

○岡山県内37の川柳結社が

集まって、岡山川柳協会が

発足。初代会長に濱野奇重

氏(参与)が選出された。

○大阪川柳人クラブは、2

月11日総会を開き、今年度

功労賞を安藤寿美子(豊中

市)さんに贈った。

○川柳塔のぞみ(川柳塔か

んとう仮称改め)発会句会

参加のため、薫風名誉主幹、

みつ子副主幹、たもつ・楓

楽副理事長他11名東京行

▽御芳志御礼△

□小糸昭子さん(大阪市)

から金一封を拝受

▽改 名 △

○妻谷重三さん(同人名簿

P14)は、重風(ちようふ

う)と改名

▼計 報 ▲

□尼れいじ氏(出雲市・理

事・いずも川柳会会長)は

2月16日逝去。市内明拳寺

新同人紹介

細 田 裕 花

―天笑・洋々・完司・公弘推薦

土 橋 房 枝

―狸村・ダン吉・蛙城推薦

田 中 千 莞 子

―諷云児・美龍・秀夫推薦

での葬儀には多数の柳友が見送った。68歳(P102掲載)

▽訂 正 △

3月号P6上段5行目、御前さま↓午前さま 同下

段8行目、万座↓満座 P

52上段3行目、除破急↓序

破急 同下段17行目、シベ

リヤ↓シベリア P79下段

26行目、父の帯↓火の帯

ら 3月号P51参照

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木)正午から 届く・根性・右・有頂天 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
岸和田 川柳会	17日(土)正午から 封筒・べたほめ・奉仕・曲がる	五風荘 岸和田城南東横 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
城 北 川 柳 会	17日(土)午後1時から 首・約束・ちらちら・自由吟	神徳会館(会場変更注意) 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 藤 井 寺	18日(日)午後1時から 満員・おふくろ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺団1-105 高田美代子
岬川柳会	18日(日)午後1時半から 人気・発足・ワイド・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	19日(月)午後1時から ユニーク・砂糖・せめて 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブ わたの花	23日(金)午前10時から 逆・余る・野暮・曲り角	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	24日(土)午後6時から 汚れ・テープ・光る・芽	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
八尾市民 川 柳 会	25日(日) 吟 行 近鉄八尾駅前 午前8時集合	問い合わせ先 TEL 0729-99-3173 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	25日(日)午後1時から 英語・さらし・ルンバ・「箱」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	25日(日) 吟 行 沈・ラブラブ・助太刀	問い合わせ先 TEL 0857-26-2226 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	26日(月)午後1時から 皆・盗む・気品	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	26日(月)午後7時半から 浮く・音・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	28日(水)午後6時から 湯・類・絵・封	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	1 日(木)午後 1 時から 栄える・卓・派手	奈良市立中央公民館 4 F (近鉄奈良④出口歩 5 分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62—6 渡辺富子
尼 崎 いくしま	2 日(金)午後 1 時から 学ぶ・調子・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	3 日(土)午後 1 時から 鮮やか・スタミナ・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	3 日(土)午後 1 時から 絵・始末・締める	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	5 日(月)午後 1 時半から 愛・いも・洩れる	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13 宗 水笑
堺川柳会	10日(土)午後 1 時から 門出(共選)・パン い・わ・し(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3 河内天笑
川 柳 塔 打 吹	10日(土)午後 1 時から 笹舟・ぐいぐい・外れる	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
川 柳 塔 ま つ え	10日(土)午後 1 時半から アクセル・祝・だます ネクタイ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22 三島崧丘
川 柳 塔 みちのく	10日(土)午後 4 時から 油断・折る・ぎくしゃく	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後 1 時から ジョーク・若手・縫る 「こと(事)」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
川 柳 ねやがわ	11日(日)午後 1 時半から スーパー・窓口・分別・自由吟	寝屋川市立総合センター 4 F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9 高田博泉
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後 1 時から 賭け・好き・ゆるやか・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2—82—308 西口いわゑ
ほたる 川 柳 同 好 会	13日(火)午後 1 時から 事務所・溶ける・じわじわ	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2—4—1 水野黒兎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	13日(火)午後 1 時半から 指輪・洗う・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太

編集後記

☆川柳塔創刊八十周年記念
合同句集の締切りが近づいてきました。この句集発刊は10年に一度の事業で、15句全てそのまま掲載されます。今までの作品のまとめとして記念になると思いますので、ぜひ参加していただくようお願いします。

☆先日、テレビで第17回サ

ラリーマン川柳（サラ川）の投票の案内をしていた。すでに応募は締切られて、23525句の中から第一生命の販売促進部が中心となつて100句が選ばれている。その中からパソコンによる投票でベストテンが選ばれ、4月末に発表される。聞けば前回の投票者は10万人を越えたという。

☆ITオンチの私は、早速孫に頼みパソコンで取出し

てもらった。サラ川は毎年

マスコミに取上げられているが、句については毎年同

レベルというところ。句材は身辺からのものが多いが、

上司や同僚、家族たちをそこまで揶揄しなくても、と

思う句が多い。また、言葉遊び、懸けことは、駄洒落、

いかにも笑いを下さいと言わんばかりのものがほとんどで、文芸というにはかなり隔たりがある。

☆江戸時代柄井川柳の興した川柳は、四世川柳が道を

あやまらせた。その後、明治時代に剣花坊、久良伎な

どが文芸としての川柳を甦らせる。それを引継ぎ、麻

生路郎師をはじめとする六大家の努力によって川柳の

今日がある。

☆サラ川ブームにより、四世川柳の轍を再び踏んでは

ならないと、些か気の重い昨今である。

(ふ)

ひとこと

天笑さんの一言

みつ子さんの一筆

本社句会で天笑主幹が「川柳塔かんとう」の発足句会にせめて投句をと呼びかけられ、ためらっていた背中を押されて投句をしました。経緯を簡単に返信に記しましたが、播本充子さんが大変お喜びだったと風の便りに聞きました。

川柳塔合同句集の参加には、時間があるとうつくり構えていました。そこへ参加呼びかけの葉書が

届き「編集担当奥田みつ子」として自筆のおすすめを頂きました。十五句の選定はともかく、即日

五千円を振り込みました。各地の句会であれ、川柳塔社であれ、その運営は多くの方々の献身的なボランティアで成り立っています。その恩恵を受けている私

達はせめて協力姿勢を早目に表明し、早く安心をして頂くように努める必要があると、つくづく思

いました。(六吹 尚士)

○活字離れを言いだして久

しい。目で読むよりテープ、CDと耳からのものが増え

てきた。詩集から小説、法話まで多種にわたる。窓辺

の椅子で、また、病室と用いかなたもあつてよいと思

う。○本屋のチラシで「京ことばで綴る源氏物語」という

のを眺めている。京都生まれの国文学者が現代京こと

ばに訳し、プロの朗読で桐壺に始まり浮舟十巻とある。学生時代必死で暗記し

たものだが、これは一見面白い。目で見ると読むと違う。語らうは！どの天子の御代のことでもござり。女御や更衣が大勢待つといやしたなか

に！とある。これを耳で聞くとどない響きますのやろか。

○さて、句会の披露のお勉強をさせて戴くとつくづくく事の難しさを痛感している。選句の難しいのは言うに及ばず、披露については

故高杉鬼遊先生に教えて戴いたことを披露。必ず辞書見て読み間違えぬよう、句読点をうちリズムよく読むこと、呼名のあつた方へ体を向け心を込めて披露するなどである。だがしかしである。壇上においては理論どおりにかかず且ついい響きでお耳に届いているだろうか、勉強不足ではすまぬ。皆々さまのご指導・鞭撻のほどお願いする次第です。

(よ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

発表（6月号）

地名

市 県

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



同	人
一	般

府	
市	

雅 号 (ふりがな)

Na

◎自選15句を楷書でお書きください。

川柳塔創刊八十周年記念句集 参加用紙



作品募集

6月号発表(4月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑 選
水煙抄(8句)	板尾岳人 選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵 選
茴香の花(3句)	藤田泰子 選
吟「愛」	門谷たず子 選
課題「いも」	古川奮水 選
課「洩れる」	津村志華子 選
初歩教室「介護」(3句)	三宅保州担当

7月号
課題吟「エアコン」「根 気」
「規格」
初歩教室「汗」

本社4月句会

とき 4月7日(水) 午後5時半・6時半締切
―開催時間が変わりました。―
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛東
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし
兼題 「寿 司」 岩 佐 ダン 吉
「ヒロイン」 鶴 田 遠 野 選
「原点」 河 内 月 子 選
「はじめ」 藤 本 朱 夏 選
「鯛 う」 河 内 天 笑 選
席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 5000円

本社5月句会 7日(金) 午後5時半から
兼題 「濃 い」「噂 く」「傾 く」
「仕 事」「座 る」

第22年度 夜市川柳募集

第11回「放 浪」 大野風柳選
ハガキに3句 4月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限り、ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇〇四年(平成十六年)四月一日発行

編集兼 発行人 河内 權治

印刷所 美研アト

〒545-0005 大阪府阿倍野区三好町一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-4946
振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

